

ロンドンの区立図書館「Idea Store」の再編計画に関する研究

Study on Reorganization of Public Library 'Idea Store' in London

李 燕

目次

| | |
|--|----|
| 第1章 研究の概要 | 1 |
| 1-1. 研究背景 | 2 |
| 1-2. 目的 | 2 |
| 1-3. 研究方法 | 2 |
| 1-4. 調査方法 | 4 |
| 第2章 研究の基礎的背景 | 5 |
| 2-1. 日本の公共図書館 | 6 |
| 2-1-1. 近代図書館の誕生 | |
| 2-1-2. 勉強部屋から貸出サービスへ | |
| 2-1-3. 多様なサービスと滞在型、課題解決型図書館 | |
| 2-1-4. 公共図書館の公共性 | |
| 2-1-5. 公共図書館の再編における課題 | |
| 2-1-6. 各地の特色ある事例 | |
| 2-2. 海外の公共図書館の取り組み | 17 |
| 2-2-1. アメリカの公共図書館 | |
| 2-2-2. 北欧の公共図書館 | |
| 2-2-3. イギリスの公共図書館 | |
| 2-3. ユネスコの公共図書館宣言 | 27 |
| 2-4. 研究の分析対象 | 28 |
| 2-4-1. Idea Store の規模 | |
| 2-5. 日本とイギリスの公共図書館の比較 | 29 |
| 2-5-1. 公共図書館の設置主体 | |
| 2-5-2. 公共図書館の設置数 | |
| 2-5-3. 公共図書館の利用実態 | |
| 2-5-4. 公共図書館の基準 | |
| 2-6. 既往研究と本研究の位置づけ | 37 |
| 2-6-1. 図書館建築に関する既往研究 | |
| 2-6-2. イギリスの図書館計画と Idea Store に関する既往研究 | |
| 2-6-3. 本研究の位置づけ | |
| 第3章 Tower Hamlets 区と Idea Store の概要 | 43 |
| 3-1. Tower Hamlets 区の概要 | 44 |
| 3-2. Tower Hamlets 区人口構成および地域課題 | 44 |
| 3-3. Idea Store の開館に至る経緯 | 49 |
| 3-4. Idea Store の戦略 | 51 |
| 3-5. Idea Store の特徴 | 52 |
| 3-5-1. Tower Hamlets 区立図書館の再配置計画 | |
| 3-5-2. 成人学習センターとの連携と多様な学習プログラムの導入 | |
| 3-5-3. 建築デザイン上の配慮 | |

-
- 3-5-4. Idea Store の規模
 - 3-5-5. Idea Store の建設の資金提供者
 - 3-6. Idea Store の成果 — 57

第4章 Idea Store の整備に関する図書館計画及び都市・地域計画 58

- 4-1. イギリス及びロンドンの図書館行政 — 59
- 4-2. Idea Store の整備に関する政策及び事業の分類 — 59
- 4-3. イギリスの公共図書館計画に関する政策と Idea Store の関係 — 61
 - 4-3-1. Reading Tower Hamletse Future
 - 4-3-2. Framework for Tower Hamletse Future
 - 4-3-3. Tower Hamletse Modern Idea Storeation Review of Public Libraries
- 4-4. 公共サービスの展開に関する政策及び事業と Idea Store の関係 — 63
- 4-5. 都市・地域計画に関する政策と Idea Store の関係 — 64
 - 4-5-1. ロンドン・プラン (Tower Hamletse London Plan) と Idea Store の関係
 - 4-5-2. Town Centre Network と Idea Store の関係
 - 4-5-3. Tower Hamlets Community Plan と Idea Store の関係
 - 4-5-4. Tower Hamlets Local Development Framework と Idea Store の関係
- 4-6. 小結 — 71
 - 4-6-1. 都市・地域計画および関連政策と Idea Store の再編計画の関係

第5章 Idea Store の建築空間及び配置 72

- 5-1. Idea Store 周辺の地域特性 — 73
 - 5-1-1. 居住者の地域特性と Idea Store の配置
 - 5-1-2. Tower Hamlets 区の商業集積や公共交通拠点と Idea Store の配置
 - 5-1-3. Tower Hamlets 区の Opportunity Area および Town Centre と Idea Store の配置
 - 5-1-4. 公立学校の再整備と Idea Store の配置
 - 5-1-5. 今後の Idea Store の配置
- 5-2. Idea Store の立地と建築空間の概要 — 78
 - 5-2-1. Idea Store Bow
 - 5-2-2. Idea Store Chrisp Street
 - 5-2-3. Idea Store Whitechapel
 - 5-2-3. Idea Store Canary Wharf
 - 5-2-3. Idea Store Watney Market
- 5-3. 利用者が来館して滞在するためのスペース — 95
 - 5-3-1. 学習教室
 - 5-3-2. 子どもの図書スペース (Children's Library)
 - 5-3-3. One Stop Shop
 - 5-3-4. カフェ
- 5-4. 小結 — 106
 - 5-4-1. Idea Store の立地と建築空間の特徴

第6章 Idea Store の提供プログラム 107

- 6-1. 各図書館の利用傾向 —— 108
- 6-2. 定期的イベント —— 109
- 6-3. 学習コースの内容と登録人数 —— 111
 - 6-3-1. 学習コースの登録人数
 - 6-3-2. 学習コースの内容
- 6-4. Idea Store の建築空間及び配置と提供プログラムの関係 —— 114
- 6-5. 提供プログラムとその後 —— 115
 - 6-5-1. 子ども向けのサービス
 - 6-5-2. 健康支援
 - 6-5-3. 就業支援
- 6-6. 新型コロナウイルスに対する支援 —— 116
- 6-7. 小結 —— 117

第7章 総括 118

- 7-1. 都市・地域計画および関連政策と Idea Store の再編計画の関係 —— 119
- 7-2. Idea Store の提供プログラムと立地及び建築空間との関係 —— 120
- 7-3. 今後の公共図書館の再編への提言 —— 123
 - 7-3-1. 図書館の立地
 - 7-3-2. 親しみのある建築デザイン
 - 7-3-3. 図書館の複合化
 - 7-3-4. 地域特性に合わせた空間およびプログラムの再編

参考文献 126

図表リスト 130

第 1 章 研究の概要

1-1. 研究背景

戦後、人口増加や高度経済成長に伴って多くの公共施設が建設されたが、現在その多くは老朽化が進み、大規模な修繕と建替えの時期を迎えている。なお、多くの自治体が厳しい財政状況を抱えている中、既存公共施設の維持管理と更新はこれから深刻な問題になる。さらに、近年の人口減少や少子高齢化の進化による社会構造の変化の中で、新たな地域の課題とニーズに対応できる公共サービス提供するために、日本の公共施設はこれから量的かつ質的な再編が必要になってくる。

2014年1月、総務省は公共施設等の総合的かつ計画的な管理による老朽化対策等の推進が掲載され、各自治体に「公共施設等総合管理計画」の策定を要請した。日本の各地で公共施設の再編計画が検討される中、2015年9月名古屋市は「市設建築物再編整備の方針」を策定し、市が保有する施設資産に対して単なる「縮小」ではなく、「縮充」を実現する再編計画を目指している。こうした方針に従えば、量的な削減による公共サービスの希薄化を防ぎ、地域の今日的なニーズに対応できる公共サービスを提供するためには、これまでビルディングタイプ毎で計画されて来た公共施設の複合化、多機能化はある程度必然的と思われる。

この考え方に基づいて日本の公共図書館を見ると、公共図書館に対する市民ニーズにはこれまでの本の貸借や読書、学習だけでなく、課題解決のための情報収集や目的がなくても知的で多様な市民が集う空間でしばらく滞在したいというニーズが加わってきている。実際、このようなニーズの変化に立地、建築空間、そして提供プログラムの面に対応した国内事例も確認できるようになってきている。しかし、そのほとんどは単館での取り組みに留まっている。

そこで、本研究では複数の区立図書館の配置と建築空間、そして提供プログラムを地域課題とニーズに対応して再編し、成果を収めている海外の事例（ロンドン区立図書館 Idea Store）に着目した。

1-2. 目的

本研究では都市や地域計画に関する政策と連動しながら、図書館再編に成功したと評価されているイギリス・ロンドン東部のタワー・ハムレッツ区 (London Borough of Tower Hamlets、以下 TH 区) において、2002年から順次開館した区立図書館（通称 Idea Store、以下 IS）に着目し、地域の課題とニーズに対応した図書館再編を実現した社会的要因とその再編プロセス、詳しくは IS の立地、建築空間と提供プログラについて考察し、今後の日本の公共図書館および公共施設の再編に関する建築的な知見を得ることを目的とする。

1-3. 研究方法

研究の基礎的背景では、日本とイギリスの図書館制度や図書館の設置状態、利用実態を比較しながら、日本とイギリスの相違点を分析する。

また、海外で取り組んでいる特色のある図書館再編事例を紹介し、その中においたISの施設再編の特殊性について論じることを通じて、筆者がISを分析対象とした理由と本研究の位置づけを行う(第2章)。

まず、ISの概要として、ISが開館された理由やISの特徴、利用実態と成果をまとめる(第3章)。

次に、ISの整備と関連するイギリスの図書館計画とロンドン及びTH区の都市・地域計画に関する政策の内容を分析し、ISの整備との関係を明らかにする(第4章)。

そして、TH区が行ったISの空間整備および配置について分析し、ISの立地特性と建築的な特徴を把握し、各ISの配置と空間整備とその地域特性の関係を明らかにする。(第5章)

また、各図書館における提供プログラムの再編について詳しく分析し、ISの建築空間及び配置と提供プログラムとの関係性について考察する(第6章)。

最後に、以上の分析から、TH区が今のISを整備した経緯や、ISの建築空間及び配置と提供プログラムの関係をまとめ、TH区が地域の課題とニーズの対応する図書館再編を実現した要因を整理する。さらに、筆者からこの研究を通じて日本の公共図書館にも参考できる再編手法を提示し、今後の公共図書館の再編への提言を行う(第7章)。

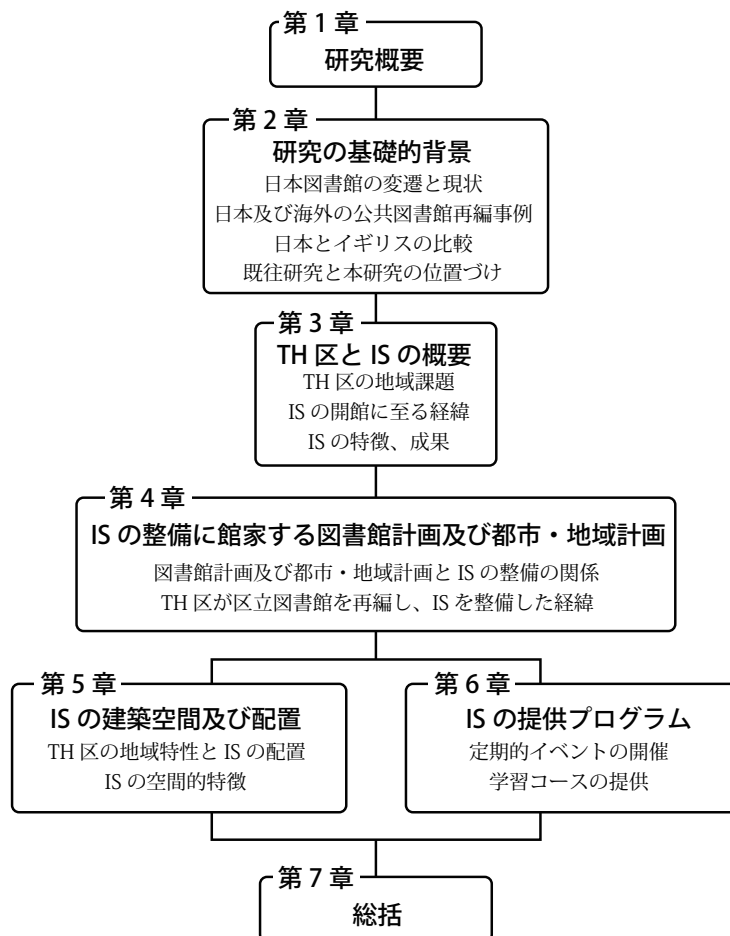


図 1-1 研究の構成

1-4. 調査方法

- ①公表されたISに関する文献の調査と、2013年9月に実施した現地調査を通してISの施設整備及び整備に至った経緯を明らかにした。
- ②2014年2月に実施したISの代表補佐であるセルジオ・ドリアーニ(Sergio Dogliani)氏へのヒアリングとその際に受領した資料から、ISの利用実態と成果を把握した。
- ③イギリスの図書館計画やロンドン及びTH区の都市・地域計画に関する各政策を公表されている文献などから把握した。
- ④2014年5月に実施した追加の現地調査により、ISの建築的な特徴を把握した。また、ISの代表補佐から受領した資料と公表された資料から、各ISの提供プログラムの内容を把握した。

なお、本研究では最初のISであるISBが開館した2002年から最後のISWMが開館した翌年の2014年までを主な調査対象範囲としている。それ以降、ISの建築的な図書館再編が確認されなかったものの、その後の提供プログラムにおいて、特徴としてあげられる内容については第6-5章に記述している。

第 2 章 研究の基礎的背景

この章では、日本と海外の公共図書館の変遷と現状について把握し、その中でイギリス・ロンドンのTH区の区立図書館の再編事例の特殊性について説明し、日本とイギリスの公共図書館を比較しながら、本研究でISを分析対象とした理由とこの研究を行う意義を論じたい。

2-1. 日本の公共図書館の変遷

2-1-1. 近代図書館の誕生

日本では、古代から朝廷、寺院や貴族による書物の所蔵と保存が確認できる。なお、一般大衆にも閲覧できる文庫が現れたのは、江戸時代の貸本屋である。当時、貸本屋は草双紙や洒落本、滑稽本、人情本などを安価に大衆に貸し出し、書物と読者を結びつけるのに重要な役割を果たした。面白いことに、当時の貸本屋の業務には書物に関するだけでなく、手紙などの仲介や日常の交際も含まれる。全国的に貸本屋として有名だった名古屋の貸本屋である大野屋惣八では、書物の貸出だけでなく、文人学者たちがよく訪ね、主人と飲食をともにしながら、書籍について討論する交際の場でもあった¹⁾。貸本屋は戦後も多く存在し、小説や漫画などの図書を多く預かっていたが、1950年以降は公共図書館の普及や安価な図書販売が増加することにより、徐々にその姿を消した。

1872年、帝国図書館の前身である文部省書籍館が設立され、これは日本はじめての公立の図書館となった。しかし、当時の閲覧はまだ有料制だった。一方で、この時期では学校附属の書籍館や雑誌、書籍縦覧所など、もっと安易な読書施設も各地で多く展開されていて、中には、無料で書籍を公開する施設もあった²⁾。明治時代では、通俗の書籍を備蓄する「通俗図書館」の設置が促され、読書による民衆の思想の健全化と知識の向上が期待された。大正時代になると、社会教育に対する社会的関心が高まり、図書館にも教育的な役割が課されるようになり、中央・地方における社会教育行政機構の整備にともない、全国的に図書館の設置が急激に展開されたが、私設と公設の図書館が混在していた³⁾。

1) 長本千代治「近世貸本屋の研究」東京堂出版,1982

2) 小黒浩司「図書・図書館史」JLA図書館情報学テキストシリーズ3,日本図書館協会,2013

3) 裏田武夫、小川剛：明治・大正期公共図書館研究序説,東京大学教育学部紀要,東京大学教育学部,P153-189,1965

2-1-2. 勉強部屋から貸出型サービスへ

1) 図書館法から「中小レポート」

戦後 1950 年、日本は初めて図書館法を制定し、公共図書館の無料利用と広域な図書館資料の収集を規定した。しかし、この図書館法は実質的な内容が乏しいものであり、当時の公共図書館は館内の閲覧機能が主体であり、図書館利用は全般的に低迷の状況であった。当時は閉鎖的な図書館運営が多く、利用者のほとんどが学生であり、図書館は主に大学受験生の勉強部屋として利用された⁴⁾。

1963 年に日本図書館協会が出版した「中小都市における公共図書館の運営」⁵⁾(通称、中小レポート)が刊行され、公共図書館の本質的な機能は、資料を求めるあらゆる人々やグループに対し、効率的かつ無料で資料を提供するとともに、住民の資料要求を増大させるのが目的であると指摘した。また、国立図書館などの大規模の公立図書館に対して、中小規模である市町村の公共図書館こそが、地域住民に奉仕する図書館サービスの中心であると指摘した。なお、是枝ら⁶⁾によれば、この「中小レポート」はその思想を実践するための具体的な方針を示しておらず、図書館の資料提供機能を「貸出」サービスとして実践したのは日野市立図書館であり、その後の貸出型の公共図書館のモデルとなった。

4) 松本直司、他：建築計画学，理工図書，2013.3

5) 「中小都市における公共図書館の運営—中小公共図書館運営基準委員会報告」日本図書館協会，1963

6) 是枝英子、瀬里久子、松岡要、若杉隆志「現代の公共図書館・半世紀の歩み」，日本図書館協会，1995.8

7) 「市民の図書館」日本図書館協会，1970

8) 佐藤政孝：図書館発達史，みずうみ書房，1986.3

2) 市民の図書館

1970 年には「市民の図書館」⁷⁾が発刊され、公共図書館の運営における 3 つの重点をあげた。

①市民の求める図書を自由に気楽に貸し出すこと。

②児童の読書要求に答え、徹底的にサービスすること。

③全ての人々が図書館サービスを受けられるように、全域にサービス網をはりめぐらすこと。

「市民の図書館」はまた「市立図書館は単に 1 つの建物ではなく、本館、分館、移動図書館からなる 1 つの組織でなければならない。」という図書館システムの運営を提示し、市町村立図書館の広域的な発展を促した。

「中小レポート」と「市民図書館」では公共図書館の基本的機能は資料を求めるあらゆる人々に、資料を提供することであり、公共図書館の中心的サービスは「資料提供」であると、明確に述べられている。

3) 名古屋市の 1 区 1 館計画

「昭和三十九年八月に市が実施した多世論調査の結果、市民が設置を希望する文化施設のトップに図書館が使命されたことから、市では姿勢の重点課題に図書館を位置づけ、一区一館の図書館整備計画を決定し、その早期実現を目指すことになった。」⁸⁾

そして、1977 年の天白図書館の開館により、名古屋市の 1 区 1 館計画はほぼ達成され、名古屋市の図書館整備は日本の全国において先進的

な事例であった。しかし、1区1館という図書館の設置計画の枠を超えて、「さらなる分館設置を求める声は、この計画が終了する以前より、様々な立場の人から提出されていた。ただし…1区に1つの図書館だけで充分だと考える人も、少なからず存在していた。それでも、分館増設を求める声は、1区1館計画が終了した後も、出され続けた。というも、名古屋市の1区1館制は、計画が出された時点では先進的であったが、完了する頃にはかなり時代遅れのものになっていたからである。」⁹⁾ なお、37年も経た現在においても、名古屋市ではまだ1区1館制の図書館整備に留まっている。名古屋市の各行政区の人口や面積、地域特性などが大きく異なる中で、この横並びの1区1館の図書館計画は適切な設置計画だとは言えないだろう。

9) 薬師院はるみ「名古屋市の1区1館計画がたどった道：図書館先進地の誕生とその後」八千代出版, 2012.10

10) 池谷のぞみ、安形麻理、須賀千絵「図書館は市民と本・情報をむすぶ」勁草書房, 2015.3 - 白石英理子：公共図書館を考える, p275

2-1-3. 多様なサービスと滞在型、課題解決型図書館

90年代からコンピューターの普及とともに、資料の電子化とインターネット上の情報提供サービスが公共図書館で提供され、図書館データベースやインターネットにアクセスできるコンピューターが館内に設置されるようになった。また、社会的に生涯学習への関心が高まり、公共図書館において学習室や集会室などを設置するようになり、飲食スペースやカフェなどを併設し、利用者の長時間利用を目指す滞在型図書館も増えた。

2006年、文部科学省の「これからの図書館像—地域を支える情報拠点をめざして—」が発表され、行政支援、学校教育支援、ビジネス支援、子育て支援を主とし、その他地域の実情に応じて医療や福祉、法務などの情報提供サービスを必要であるとしている。この影響により、地域の課題を解決する支援をするという新たな役割が図書館に与えられ、公共図書館においてレファレンスサービスを充実させ、課題解決に必要な資料や情報を提供する「課題解決型図書館」というキーワードが現れるようになった。

白石氏はこれまでの日本の公共図書館の変化を①運営形態、②提要するサービス、③社会的意義という三つの視点から分析し、以下のようにまとめている(表2-1)¹⁰⁾。白石氏によると、1970年代の日本公共図書館は行政により運営されることを原則とし、資料提供が主な図書館サービスであり、住民の教育権、知る権利の考えから来た学習権の保障ために公共図書館があった。なお、現在の公共図書館は公設公営と公設民営(PFI、指定管理者制度)という様々な運営形態があり、課題解決型のサービスを提供することが現在の公共図書館論である。また、公共図書館の社会的な意義を考えるために、現在、図書館情報学分野では公共図書館の社会的意義を見出すために、「公共性」をめぐる議論が広がっていると白石氏は指摘している。ただこの「公共性」の意味内容は単一ではなく、各学問分野においてその概念も様々である。

表 2-1 1970年代の公共図書館論と現在の公共図書館論

| | 1970年代 | 現在 |
|--------|--------|-----------------------------------|
| 社会的意義 | 学習権の保障 | (公共性) |
| 提供サービス | 資料提供 | 課題解決に必要な資料や情報の提供 レファレンスサービスの充実 |
| 運営形態 | 公設公営 | 公設公営、 公設民営(PFI、指定管理者制度) |

2-1-4. 公共図書館の公共性

ここで、筆者は斎藤純一による公共性¹¹⁾の特性を引用しながら、公共図書館の公共性について考えてみたい。斎藤氏によると公共性には Official、Common、Open という3つの意味合いがある。国家に関する公的な (Official) ものという意味、特定の誰かにではなく、すべての人びとに関係する共通のもの (Common) という意味、誰に対しても開かれている (Open) という意味。

公共図書館は公共建築として、行政により管理され、国民の税金資産により運営され、まさに Official の場所である。これまで本の貸出を主要サービスとして来た公共図書館は、ほとんど図書を目的とした利用のための場所であるため、Common と Open という意味合いは弱いと思うが、近年、各地で増えている「滞在型」や「課題解決型」図書館は、レファレンスサービス、ビジネス支援や子ども向けサービスなどを提供する多様な運営と空間を内包しながら、さまざまな利用目的で来訪する市民を受け入れ、Common で Open な施設になりつつである。特に、Open という側面から考えると、図書館は誰でも無料で利用できる場所として、みんながいつでも気軽に来訪し、滞在と交流を行う場所、それこそ「屋根のある広場」¹²⁾ となりうるだろう。

こうした Common と Open な性格を持つ公共の場として、今後の公共図書館のあり方やその再編計画について考えることは重要な検討課題だと筆者は考える。

11) 斎藤純一「公共性」岩波書店, 2000.5

12) 小篠隆生、小松尚『「地区の家」と「屋根のある広場」』, 鹿島出版会, 2018.12

1) 生涯学習拠点としての公共図書館

近年、余暇時間の増大と人口高齢化の社会構成の中で、生涯を通じて多様な学習を行い、充実した人生を過ごすことが多く求められている。こうした社会的需要が高まる中で、公共図書館は社会教育を行う施設として、そこに貯蔵された「知の資源」を活かしながら、積極的に地域住民に対して学習や文化的な交流を行う活動と施設を提供し、地域の生涯学習の拠点として整備される必要があると考える。そのためにも、公共図書館は貸出サービスだけではなく、もっと多様なサービスを提供し、それに応じる空間整備も必要となる。

2) 居場所としての公共図書館

最近では図書館の雰囲気が好きで図書館で滞在する利用者が増加している。自宅ではなく、わざわざ図書館で勉強する学生や図書館で新聞を読む高齢者は数少なくない。これは、図書館にはある種の居心地の良さがあるからだと考えられる。人びとは他人と同じ空間を共有することで安心感を持ち、公共図書館においても「公的な場所」にしながら、「個的な空間」を楽しむ人が多く存在すると考えられる。このような視点から見る公共図書館の整備は実は地域住民の「居場所づくり」にもなっている。

2-1-5. 公共図書館の再編における課題

1) 公共図書館の現状と市民の期待の乖離

多くの市民は公共図書館と言えば静かな場所であり、読書と資料の貸出を行う施設だと認識し、その利用目的がない場合は公共図書館をほとんど利用しない場合が多い。2016年度の名古屋市の公共図書館の利用状況を見ると、年間1点以上資料を借りた市民は11.7%(約9人に1人)であり、232万超えの人口に対して図書館の登録者数は47万(2016年度)にとどまり、この10年間の来館者数もほぼ横ばいの傾向であり、図書館に利用はまだ市民全体に広がっていない状況である¹³⁾。

13) 名古屋市教育委員会「なごやアクティブ・ライブラリー構想」2017.12

それに対して、2016年に名古屋市が開催したシンポジウム「これからの図書館をみつめて～なごやアクティブ・ライブラリー～」の市民アンケート調査では、市民から図書館がもっと便利な場所にあり、居心地のよく、魅力のある場所であってほしい意見が確認された¹²⁾。公共図書館に多くの市民の関心を引き寄せるためには、これまでの従来の公共図書館に対する固定観念を一変させ、図書館を空間的にもプログラムのにもすべての人ひとにひらかれた施設に再編する必要がある。

2) 音の問題

公共図書館の多目的利用において必ず問題として出てくる音の問題である。これまでの公共図書館は資料の収集と読書が基本的な利用目的であり、屋内の静寂さを守ることは当たり前だったが、公共図書館の滞在

利用や課題解決型サービスが増加する中、これから公共図書館に来館する利用者たちは紙を媒体とした図書による情報だけではなく、人々の会話や交流、講演会などの様々な活動によって得られる情報を求めるだろう。そのためには、静かな読書スペースだけではなく、音を許容する空間の整備も必要になってくる。また、公共図書館の中で多少の音と声を許容することは、ある特定の利用目的のために他の利用を排除するのではなく、日常的に様々な音を背景にしながら生活するのと同じように、すべての人びとにひらいた公共図書館をより豊かに利用し、人と人をつなぐ居場所を提供するためである。

3) 図書館職員に求められる新しい資質

最近日本では「課題解決型図書館」が重視され、レファレンスサービスやビジネス支援など地域の課題とニーズに応じるサービスを提供する図書館が増えている。しかし、その多くは図書館内の一角にサービスカウンターが設置されているものの、そのサービス内容と利用方法はわかりにくく、スタッフも常駐ではなく、必要に応じて窓口立ち寄り。これまで司書という国家資格の基で、専門的な選書や資料の分類、貸出を主な業務内容としてきた図書館職員にとって、様々な利用ニーズに応じて多様なサービスを行うことは大きな課題ではあるが、これまで受付カウンターの向こう側で利用者を待っていた図書館職員は、もっと利用者にアプローチし、積極的にコミュニケーションを交わしながら、多様な利用ニーズに対応できる資質が求められる。

住民が公共図書館に求める利用ニーズは従来の資料の貸出や情報収集から滞在、課題解決まで変化し、ますます多様化している。そこで、2-1-6 では近年増加している滞在型利用を前提とした、または多様な提供サービスを複合・内包した各地の図書館事例の特色を説明する。

2-1-6. 各地の特色ある事例

① 荻田町立図書館

1990年、福岡県北東部にある海沿いの小さなまちで開館した。日野市立中央図書館が「貸出型図書館」のモデルだと言うならば、荻田町立図書館は「滞在型図書館」の先駆けの図書館であり、「「貸出型」のように借りて帰る本を見つけたらすぐに退出してしまう図書館ではなく、長い時間を図書館内で過ごすことができる「滞在型図書館」の理念を具現化したものとして、図書館界並びに図書館建築に新しいモデルを提起した。」¹⁴⁾

図書館はトップライトを設けた三つの建物から構成され、大パティオと名付けられた中庭を囲む形で配置されている。また、あらかしコンクリートのフレームになっている屋外の渡り廊下が敷地全体に広がっていることが外観的な特徴である。館内の閲覧スペースにはソファ席、和室の座敷の席やスチール椅子の席などの多様な席が用意されており、利用目的にあわせて利用席を選び、多様な滞在ができる。

14) 植松貞夫, SD編集部, 本と人のための空間: 図書館建築の新しい風, 鹿島出版会, 1998.3



写真1 荻田町立図書館外観 (建物の設計を行った山手総合計画研究所のホームページより: <http://www.y-p-c.co.jp/ypc/project/7/pages/kanda.htm>)

② 伊万里市立図書館

1995年に開館した滞在型図書館であり、施設の設計段階から行政、市民と設計者の三者の意見を交わしながら、市民とともに新しい図書館を作り上げた。館内には集会場やホールなどが併設され、上映会、講演会や各種展示会が開催されるなど、さまざまな滞在活動を行うことができる。また、図書館運営に積極的に市民ボランティアの参加を導入し、ボランティアが読み聞かせをしたり、図書館展示品の製作や庭の管理などの図書館活動に参加している¹⁵⁾。

15) 末次健太郎, 伊万里をつくり、市民とともに育つ市民の図書館—伊万里市民図書館の取り組みについて, 発表4, シンポジウム「人と人、人と資料が会う場としての図書館」, <特集> 第55回研究大会, 図書館界 66(2), 112-117, 2014

③小布施町立図書館を拠点としたまちじゅう図書館

小布施町立図書館(通称まちとしょテラソ)は長野県の小布施駅前において、小布施町役場と小学校に隣接して建てられた図書館である。この図書館は、「本を読むだけでなく、人が人出会い、思い思いに時を過ごす「広場」のような建築」¹⁶⁾をつくるというコンセプトから、三角の屋根に覆われたひと繋がりの大きな図書館空間になっている。

「まちとしょテラソは、「学びの場」、「子育ての場」、「交流の場」、「情報発信の場」という4つの柱による「交流と想像を楽しむ、文化の拠点」という理念」をもとに¹⁷⁾、図書の貸出を中心とした従来の図書館サービスを提供する他にも、有名な作家、映画監督などの講演会や地元の古本を販売する「1箱古本市」などのイベントを開催している。

2012年からは、小布施町立図書館を中心に、町内にあるカフェや商店、食事処と連行しながら、店内または店舗の前に図書を並べ、まちの人びとに本を貸出し、或は店内で読ませる「おぶせまちじゅう図書館」というプログラムが開催されている。

16) 小布施町立図書館「まちとしょテラソ」, 新建築, 84(12), 新建築社, pp.118-129, 2009.11

17) 小布施町立図書館のHPによるまちとしょテラソの概要, <http://machitoshoterrasow.com/index.html> 【2015.1.6, 23:36 確認】



写真2 小布施町立図書館の内観(小松尚撮影)

④多世代利用を実現した複合施設—武蔵野プレイス

2011年の7月に武蔵境駅の駅前に開館した武蔵野のプレイスは図書館を中心に、生涯学習支援、市民活動支援、青少年活動支援の機能を交わした複合施設である。ここでは、施設全体の運営を「公益財団法人武蔵野生涯学習振興事業団」という指定管理者に委託することにより、施設を一体的に運営し、4つの機能を融合させながら多様なサービスと活動を提供している。館内には、図書館以外に市民活動を行うワークラウンジや楽器演奏やダンス練習などの青少年活動を行うティーンズスタジオなどが整備されている。

建物は独特な建築デザインが採用され、外部に面しては楕円形の窓が空いた曲面の外壁が建てられ、内部においては曲面の壁と天井でつながる連続性がある空間が作られた。



写真3 武蔵野のプレイスの外観 (小松尚撮影)



写真4 武蔵野のプレイスのフロアマップ (武蔵野プレイスのHPから引用：http://www.musashino.or.jp/place/_1203.html)

5 民間のノウハウを活かした武雄市図書館

2013年4月に武雄市は元も利用率が低かった武雄市図書館の建物を改装し、株式会社カルチュア・コンビニエンス・クラブ (CCC) を指定管理者として図書館を新しく開館した。図書館には代官山の蔦屋書店に類似した内装デザインが行われ、1階にはスターバックスが設置されている。その他、館内には音楽・映像ソフトレンタルや書籍・雑誌を販売する蔦屋書店も設置されている。

新しい武雄市図書館が開館されてから、図書館の来訪者は大幅に増加し、特に若者の利用者が多く増加した。その後、CCCの運営による通称「ツタヤ図書館」は神奈川県海老名市、宮城県多賀城市、岡山県高梁市、山口周南市、和歌山県和歌山市などに開館を展開したが、これまでの行政と異なる CCC 運営手法は「公設民営のブックカフェ」¹⁸⁾ として呼ばれ、特に最近では選書問題が社会的な反論と批判を多く受けている。

18) 2013年10月30日に開催された図書館総合展の「武雄市図書館を検証する」というフォーラムにおいて、慶応大学の糸賀雅児教授は武雄市図書館を「図書館という名称を使っているから論議を呼ぶが、これは公設民営のブックカフェだ」と述べた。



写真5 武雄市図書館内観1(小松尚撮影)



写真6 武雄市図書館内観2(小松尚撮影)

⑥被災地のこころの避難場－陸前高田市仮設図書館と3館の私設図書館

岩手県陸前高田市は2011年3月11日、東日本大震災により大きな被害を受け、市中心にあった市立図書館は津波で全滅された。その後、図書館の再開に向けた行政と地元の住民の努力により、2012年9月、竹駒コミュニティセンターの敷地にログハウス1階建ての仮設図書館を設置し、閲覧室の開館と図書の貸出サービスを開始した。その近くには私設の児童図書館「ちいさいおうち」が隣接し、図書館の児童室の役割となっていた。他にも陸前高田市の市立図書館を補う形で「にじのライブラリー」と「陸前高田コミュニティ図書室」の私設図書館が開館され、地域の人々に図書を提供しながら、実際は震災後に不安であった住民たちがいつでも立ち寄り、会話を交わしながらこころの安らぎを求める憩いの場となった。

2017年7月、新しい陸前高田市立図書館が開館することにより、仮設図書館と3館の私設図書館はすべて閉館となったが、震災後の6年間、図書館という物理的な場所と読書という活動を介して、震災地の住民に平穏な日常感覚を取り戻し、人びとが集い、会話と交流を楽しむ機会を提供し、震災後の住民たちのこころを復興する役割を担ってきた。



写真7 陸前高田コミュニティ図書館（写真は運営団体だった公益社団法人シャント国際ボランティア会のホームページからから：<https://sva.or.jp/wp/?news=37840>）



写真8 ちいさいおうち（写真は運営団体だった特定非営利活動法人うれし野子ども図書館のホームページから：<https://sva.or.jp/wp/?news=37840>）

2-2. 海外の公共図書館の取り組み

2-2-1. アメリカの公共図書館

1) 行政情報の提供

アメリカは公共図書館を介して、市民に政府の活動や政策の内容を伝えている。図書館では行政刊行物や行政活動のパンフレットなどを用意し、行政の取り組みをより分かりやすく市民に伝えるために、積極的に行政情報を発信している。さらに、選挙の時期には、選挙候補者に関する情報や投票に参考になる資料を提供している¹⁹⁾。

19) 松林正己：図書館はだれのものかー豊かなアメリカの図書館を訪ねて，風媒社，2007.2

2) ホームレスの居場所

公共図書館は全ての人々に開かれた施設であり、どのような利用者にとっても公平な場所ではないといけない。その理念を基づいて、アメリカの多くの公共図書館は現在ホームレスの居場所にもなっている。当然、公共図書館において、ホームレスの不愉快の行動によるマナー問題も起きたりするが、アメリカのシアトルの公共図書館ではホームレスという社会的弱者に対して特別な配慮を行っている。シアトルの公共図書館で増えつつあるカフェ・コーナでは、ホームレスがコーヒや軽食の販売を担当している。図書館はその収益の一部を受けるとともに、ホームレスの就業問題も解決している¹⁹⁾。

3) まちに安心感をもたらすニューヨークの図書館

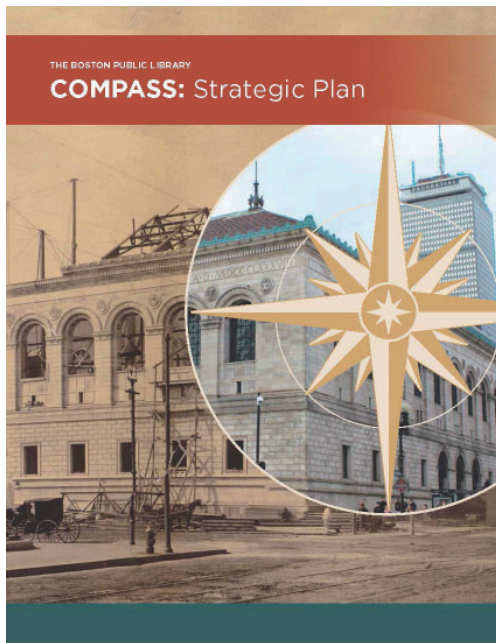
911 テロ事件の際に、ニューヨーク図書館では事件に関する最新ニュースや政府の対策に関する情報を提供し、地域に安心感を与えた。テロ事件以降、ニューヨークの公共文化施設では利用者が激減したが、ニューヨークの公共図書館ではテロ後数週間で、利用者が一気に12%増加、貸出数に至っては19%が増加した²⁰⁾。つまり、テロ事件という不安な事態が起きた際に、ニューヨークの公共図書館は、まちの人びとが集まれる安全な公共の場所を提供し、そこで住民にテロ事件の対策に関する情報を提供することを通じて、地域の不安な気持ちを安定させた。

20) 菅谷明子：未来をつくる図書館ーニューヨークからの報告，岩谷新書，2003.9

4) ボストン公共図書館の再編

ボストン公共図書館はアメリカの最も古い図書館であり、世界で初めて無料で図書館資料を公衆に公開した図書館である。現在は、中央図書館と25館の分館図書館で構成され、そのほとんどが当初の建設時から長い時間が経たことから、2000年以降からは多くの図書館が改修、増築や改築されるなど、図書館再編が行われた。さらに、2011年にはボストン公共図書館(The Boston Public Library)は今後の図書館運営方針を示す図書館戦略プラン「COMPASS:Strategic Plan」を策定した。その内容については、久保ら²¹⁾の研究で詳しく確認できるが、彼の研究によると、この戦略プランが策定され以降、建築的な図書館整備を行ったボストン公共図書館では2つの建築的な特徴が確認できた。一つは外壁や内壁にガラスの設置を多く採用し、視認性を確保すること。2つ目は、館内にカフェや子ども専用スペースなど会話などが許容された賑やかな図書空間の整備を重視することである。

21) 久保 元広, 小松 尚: ボストン公共図書館の運営方針の改訂と建築的変更に関する研究, 日本建築学会大会学術講演梗概集, 建築計画, 87-88, 2019.7



COMPASS: Strategic Plan, The Boston Public Library(2011)
Boston Public Libray ホームページから (<https://www.bpl.org/about-us/strategic-plan/>) [2020.10.28 確認]

2-2-2. 北欧の公共図書館

北欧の公共図書館は、生涯学習機関としての長い歴史を持っており、すべての住民が等しく情報にアクセスし、自ら学ぶ場として公共図書館は市民のコミュニティ中で重要な役割を果たしている。90年代の情報革命以来には、紙で出版される伝統的な図書資料以外に CD や DVD といった新しい電子メディアとインターネットにアクセスする端末を図書館に導入した。この他、講演会・映画上映会・コンサート・読書会・語学講座などの行事に加えて、最近では、健康相談、法律相談などを行う図書館も増えている²²⁾。

22) 吉田右子：デンマークのにぎやかな公共図書館：平等・共有・セルフヘルプを実現する場所，新評論，2010.11

1) デンマーク²³⁾

デンマークの図書館の定番プログラムとしては、講演会、展示会、読書会、学習会などが挙げられる。

23) デンマークの内容は以下の文献を参照した。

これに加えて、最近、デンマークのいくつかの自治体で、住民サービスコーナーを図書館館内に設ける動きが出て来た。これは、行政手続き、税金相談、年金相談など今まで役所で行われて来た行政サービスを図書館で行ってしまおうというものである。このように、図書館は他の公的機関と場所や人材を共有するという複合化が 2000 年以降の新しい動向である。

吉田右子：デンマークのにぎやかな公共図書館：平等・共有・セルフヘルプを実現する場所，新評論，2010.11

この他、図書館では労働力不足を補うために多く受け入れてきた移民向けの図書館サービスも充実し、多言語資料の収集と提供のほかにも、就労情報、教育、社会保障に関わる情報も掲載している。

2) ノルウェー²⁴⁾

1971 年に改正されたノルウェーの成人教育法の中では、公共図書館が図書やその他の資料の提供によって、コミュニティのメディアセンターとして位置づけられることが明確に規定され、図書館において生涯学習プログラムを提供するは一般的なこととなった。

24) ノルウェーの内容は以下の文献を参照した。

この他、ノルウェーの公共図書館では、デジタル情報の収集と提供にも力を入れており、図書館で高齢者にコンピュータスキルを教えたり、さらに、コンピュータゲームのソフトなども貸出している。これは、全てのメディアを無料で住民に提供することを図書館サービスの理念とし、積極的に図書以外のメディアを図書館に取り入れることを通じて、全ての人々が平等にメディアを享受できるようにしている。

吉田右子，他：ノルウェーの図書館—物語・ことば・知識が踊る空間，新評論，2013.5.10

またノルウェーでは、図書館がデジタル情報を介して文化の拠点となることが期待されている。

3) スウェーデン²⁵⁾

スウェーデンでは自習的学習サークルの読書室が公共図書館のはじまりであった。20世紀初頭に民衆運動のなかから学習を主な目的とするサークルが生まれた時、本を収集したり図書室を設置したりする学習サークルが次第に増えていった。そうした団体の読書施設が公共図書館の源流となった。

1970年代になると、成人の自己学習を支援するための学習センターや学習コーナーを設置する図書館が増えていった。このように、現在では公共図書館はスウェーデン社会の生涯学習の基幹施設となっている。

最近、ストックホルム市内で増えているのは地下鉄の駅構内に設置された図書館である。これは、仕事で忙しい人びとにも通勤や帰宅のついでに図書館を利用してもらおうという考えから作られたものである。

25) スウェーデンの内容は以下の文献を参照した。

吉田右子, 他: 読書を支えるスウェーデンの公共図書館: 文化・情報へのアクセスを保障する空間, 新評論, 2012.9



写真9 Högdalen T-bana 駅の改札口からエスカレータを上ったところにホーグダーレン図書館 (hogdalens bibliotek) がある。
(写真は「読書を支えるスウェーデンの公共図書館」^{*}から引用した)

4) イタリア

ボローニャ市立サラボルサ図書館

ボローニャ市の都心にあるマッジョーレ広場に隣接している図書館であり、元々市庁舎であった建物を一部増改築して整備されてきた。入口には3層吹き抜けのアトリウム空間があり(写真10)、その廻りの一階にはカフェや乳幼児のためのスペースなどが設置され、図書館の受付カウンターは入口から目立たない奥に設置されている。これによって、来館者は警備員やスタッフの視線を気にすることなく、誰でも自由には入れる空間になっている。この図書館はこどもから高齢者、ホームレスまで含めた様々な利用者を受け入れ、誰もが気軽に長時間滞在できるようになって、開館以来、毎日4000人を超えるの来訪者を迎えており、今ではボローニャへの観光客が目指す目的地のひとつである²⁶⁾。

26) 小篠隆生、小松尚『「地区の家」と「屋根のある広場」』、鹿島出版会、2018.12



写真10 サラボルサのアトリウム空間(小松尚撮影)

4) フィンランド

ヘルシンキ中央図書館「Oodi」

2018年開館され、17000㎡ほどの延べ床面積を有するこの大規模な中央図書館は「すべての人々に開かれた居住的で機能的な出会いの場 (a living and functional meeting place open for all)」²⁷⁾ を目指しており、図書館機能以外でもカフェ、レストラン、映画館、ホール、各種スタジオや工房などのあらゆる文化的な体験を行うことができる複合型図書館となっている。これは、公共図書館として多様な機能とサービスを複合する新たな可能性を示した。

27) Oodi Helsinki Central Library
HP:<https://www.oodihelsinki.fi/en/>
[2020.12.26 アクセス]



写真 11 ヘルシンキ中央図書館 Oodi の外観 (木下亮撮影)



写真 12 ヘルシンキ中央図書館 Oodi の内観 (山岡恭大撮影)

2-2-3. イギリスの公共図書館

1) 公共図書館の誕生^{注1}

イギリスにおける公共図書館の誕生は18世紀に起きた工業革命と密接な関係がある。当時、産業革命が生み出した新たな職業により、都市には大量な労働者が増加し、さらに人びとには労働時間と余暇がより明確に分離するようになった。そこで、工業都市では労働者が余暇を過ごすレジャー・教育施設の需要が大きかった。

18世紀から19世紀にかけて、イギリスでは図書の出版がだんだん盛んになったが、本はまだ高価なものであり、中流階級のあいだでは、お互いに資金を集めて本を買い、共同に利用することで読書欲求を充たしていた。そのような動きの中で、共同資金で運営される会員制の図書館が生まれ、その数は急速に増加した。

一方で、雇用主は生産効率を高めるために労働者の技術水準を向上させることを望み、労働者階級の人びとも自ら学習を通じて工業労働における基礎的知識を求めようになった。これらの社会的な要望は19世紀に職工学校の設立を招き、すぐイギリスの各地で開設されるようになった。各職工学校には図書室が設けられ、蔵書の中には職工の学習資料だけではなく、一般的な社会教養に関する図書も多く存在した。これらの職工学校の図書室はその後の公共図書館の発展において重要な存在であった。

そして1850年にイギリスの公共図書館法が成立した。その後この図書館法は、何回も改正されたが、1964年にはこれまでの公共図書館法が大幅に改正され、公共図書館・博物館法 (Public Libraries and Museums Act 1964) が成立した。同法は、現在もその有効性を持っている。

2) 公共図書館と恵まれない人びと

1970年代、イギリスの公共図書館はまだ上流・中流階級による利用が中心であり、公共図書館が守るべきである平等なサービスは実現されてなかった。このような現状に対する社会的な批判が強まる中で、公共図書館では社会的に恵まれていない人々への関心が高まり、いままで図書館をほとんど利用していない障害者、マイノリティや失業者などに向けた図書館サービスを改善する図書館運動である「コミュニティ・ライブラリアンシップ」が1980年代にイギリスの全国に広がった。この図書館運動により、図書館ではエスニック・マイノリティの文化に対応する多言語図書を配架し、失業者に向けた就業と福祉に関する情報の提供も行っていた。この時代のイギリスの公共図書館に関する本が「コミュニティのための図書館」であり、著者であるブラックとマディマン^{※2}は次のように記述した。

「主流派コミュニティ図書館の考え方には、思想的に戦後の社会的連帯意識に対する憧れが見られた。そして、恵まれない人びとが図書館サー

注1 イギリスの公共図書館の誕生に関する内容は以下の文献内容を参照した。

・佐藤政孝：図書館発達史，みずうみ書房，1986.3

・自治体国際化協会ロンドン事務所：英国の公立図書館，自治体国際化協会，1995.2

ビスにアクセスしたりそれを利用したりすることで、確実に社会の富の公平な分け前にあずかれるよう努力がなされた。」²⁸⁾

28) アリスティア・ブラック、デーブ・マディマン著、根本彰、他訳：コミュニティのための図書館，p.69，東京大学出版社，2004

3) イギリスの公共図書館の現状

90年代の情報革命により、膨大な情報をインターネットによって簡単に人びとに共有させることを可能になった。これは、公共図書館にも大きな影響を与えた。4章で詳しく述べる1997年の「Reading the Future」と「市民のネットワーク」の発表により、イギリスの公共図書館は本と視聴資料に加えて、ITサービスを提供し、インターネットにアクセスできる端末を多く整備するようになった。

この他、近年において、イギリスの公共図書館では非公式学習(Informal Learning)の提供が重視され、成人学習プログラムを図書館に導入する事例が各地で確認できる。特に、移民が多いロンドンでは、公共図書館において移民向けの英語学習や就職に必要な資格を取得する講座を提供している。

しかし同時に、近年のイギリス公共図書館は厳しい予算削減を経験しており、毎年多くの図書館が閉館され、貸出数も下降し続けている。このように、図書館が相次いで閉館され、統合される中で、各自治体では図書館の存続のために、積極的に図書館利用の復興に努力している。また、厳しい予算削減の中、従来の自治体直営から住民ボランティアが図書館の運営を担う「コミュニティ図書館」²⁹⁾が現れたり、最近では個々の分館単位ではなく、自治体の図書館システム全体の運営を相互扶助組織(mutual)に委託する事例も見られている²⁹⁾。

29) 英国のにおける相互扶助組織による公共図書館運営にみられるガバナンスの変容，専修人文論集，専修大学学会(99):2016.11 p.207-229

4) 特色のある事例

・最初にPFIを導入した公共図書館

ボーマンス中央図書館

(Bournemouth Central Library, Bournemouth, England)

2002年に開館したボーマンス中央図書館はイギリスで最初にPFIを導入した公共図書館である。イギリスにおいて、公共図書館にPFIを導入する事例はまだ少なく、ボーマンス中央図書館はイギリスの中でも有名な存在である。

須賀はこの図書館について、「日本の図書館PFIでは、設計、建築、そして管理業務を除くほとんど運営が摘要対象となることが多いが、ボーマンスの場合、設計、建築、そして運営の一部をPFIの対象としているが、運営面の対象業務は、施設管理(内装、外装、空調、照明、水回り、清掃など)及びIT関連業務だけである。それ以外の業務、すなわち選書、貸出し、レファレンス、児童サービスといった図書館の専門的業務は、備品や図書館システムの調達をのぞき、これまで通り直営で

ある。」³⁰⁾とし、「英国の場合、図書館に限ったことではないが、すべてのPFIは、長期に渡る入札者との直接交渉を経て落札者を決める方式である。」³⁰⁾と説明している。

30) 須賀千絵：英国のPFI図書館—ボーマンス市立図書館を訪ねて，みんなの図書館，335, pp.54-63, 2005.3



写真10 ボーマンス中央図書館の外観
(写真は図書館を設計したBDP(Building Design Partnership)のHP:<http://www.bdp.com/>を引用した。)

・イギリスの最も人気な公共図書館

ノーフォーク & ノリッジ・ミレニアム図書館

(Norfolk&Norwich Millennium Library, Norwich, England)

ノーフォーク & ノリッジ・ミレニアム図書館はイギリスで年間来訪者数と貸出数が一番多い図書館である。この図書館は、イギリスの東南部のノーリッジ市の中央部に、古い教会と広場を挟んで建てられたガラス張りの複合施設に入っている。この広場は市民の日常的な活動拠点になっており、毎日に多くが人びとが集まる場所である。複合施設の中には、図書館の他にレストラン、ギャラリー、学習センターなどが設置され、それぞれが4階まで吹抜け空間になっているエントランスホールを囲んで配置されている。



写真11 ノリッジ・ミレニアム図書館が入っている複合施設 The Forum の外観 (写真は The Forum のHP：<http://www.theforumnorwich.co.uk/>から引用した。)

・ラーニングセンターと複合されたペックカム図書館

(Peckham Library, London Borough of Southwark, London, England)

多くのロンドン特別区と同じように、サザーク区 (London Borough of Southwark) にも移民が多く、失業者が多いことが問題になっている。ペックカム図書館はサザーク区の地域再開発事業として整備された公共施設であり、サザーク区の中心部にあるペックハム・タウン・スクエアという広場に面した複合の公共施設の1つとして建てられた。

建物の1階にはサザーク区の行政窓口であるワンストップセンターが設置され、2階には生涯学習を行うラーニングセンター、3階から6階まで図書館になっている。特にラーニングセンターは生涯学習支援の他にも、失業者にキャリア教育を行い、職業に必要な技術を教える就業支援を提供している。ラーニングセンターは「以前には別のところがあったが、この建物に入ってから利用が5~6倍に増えたそうである。」³¹⁾つまり、全ての人びとに開かれ、無料で情報を発信する図書館と就業支援を提供する学習施設を複合させることによって、来訪者の増加を促進してきた考えられる。

31) 西川馨：改革を続ける英国の図書館—最新事情・見学報告、リブリオ出版企画、p.42, 2003.3



写真 12 ペックカム図書館の外観
(Framework for the Future³²⁾ から写真を引用)

32) Department for Culture, Media and Sport: Framework for the future, 2003.2, http://www.healthlinklibraries.co.uk/pdf/Framework_for_the_Futures.pdf [2014.4.28 11:05 確認]

2-3. ユネスコの公共図書館宣言

1997年ユネスコ(国際連合教育科学文化機関、United Nations Educational, Scientific and Cultural Organization U.N.E.S.C.O.)は公共図書館宣言^{注2}を公表した。宣言には公共図書館の定義とサービスを提供する原則について以下のように述べている。

「公共図書館、その利用者があらゆる種類の知識と情報をやすく入手できるようにする、地域の情報センターである。公共図書館のサービスは、年齢、人類、性別、宗教、国際、言語、あるいは社会的身分を問わず、すべての人が平等に利用できるという原則に基づいて提供される。…蔵書およびサービスは、いかなる種類の思想的、政治的、あるいは宗教的な検閲にも、また商業的な圧力にも屈してはならない。」³³⁾

つまり、公共図書館は全ての人々に無料に開かれた公平な場所にならないといけない。これは、あたりまえのことに聞こえるかも知れないが、経済的な収入や社会的な地位、学歴などの格差によって、図書館から排除されやすい人が今だ存在している。この課題に対して、図書館は誰もがに利用しやすいサービスと居られやすい空間を提供しないといけない。また、図書館に来る利用者の様々なニーズに対応しないといけない。具体的には、海外の公共図書館では言語などの問題で就業が困難な移民来訪者には言語学習を提供し、安全な場所を探しにくるホームレスには滞在できる場所と生活を援助する就業情報を提供し、コンピュータが苦手な高齢者来訪者にはコンピュータ技術を教えている。これは、一見して公共図書館サービスだとは思えないかも知れないが、あらゆる人々が利用できる公平な公共施設として存在するためには、図書館が何らかに対応せざるを得ない公共サービスだとも言える。

注2 ユネスコ公共図書館宣言 1994年日本語版は日本図書館協会のHPを参照する：<http://www.jla.or.jp/library/gudeline/tabid/237/Default.aspx>

英語版はユネスコのHPを参照する：<http://www.unesco.org/webworld/libraries/manifestos/libraman.html>

33) ユネスコ公共図書館宣言 1994年の公共図書館を引用

2-4. 研究の分析対象

印刷時代における公共図書館は図書を収蔵し、市民に閲覧させ、貸出すための空間として存在した。しかし、90年代の情報革命により、人びとは紙の印刷物に頼らなくても、電子メディアやインターネットを利用して簡単に大量な情報を取得することが可能になった。これは、図書の収蔵と貸出を主要サービスとした公共図書館の存続に大きい脅威を与えた。さらに、近年には国際的に読書離れが起きており、図書館は従来の貸出サービスを提供するだけだと、徐々に利用者を失って行くと考えられる。

そこで、各国の先進的な公共図書館では図書館利用を復興させるために、2-2で述べたように、図書の貸出サービスだけに留まらず、地域住民に生涯学習プログラムを提供したり、図書館において地域に必要な情報を発信する多様なイベントを開催している。つまり、全ての人びとに無料で開かれているという図書館の空間と機能の特性を活かしながら、地域社会の課題とニーズに応える公共図書館の今日的な役割を追究している。そのような背景の中で、本研究ではイギリス・ロンドンのTH区において、地域の課題とニーズに基づいて整備されたISを研究の分析対象とする。

ISは単館だけではなく、TH区の区立図書館が全体的に再編されたから面的に整備された図書館である。また、ISの提供プログラムも地域計画と連動しながら再編された。このように、図書館の空間とプログラムの両方を再編し、かつ都市や地域計画と連動しながら、面的に整備された図書館事例は海外においても珍しい事例であり、本研究ではISの図書館再編経緯やその再編プロセスを考察することを通じて、今後の公共図書館の再編に関する知見を得ることを求めている。

2-4-1. Idea Store の規模

まず、イギリスと日本の図書館建築の整備基準が大きく異なるため、ISの建築的な規模をイメージしやすいように、TH区の区立図書館と名古屋市の公共図書館の整備状況を比較した(表2-2)。TH区は名古屋市に比べて1人あたりの蔵書数は少ないが、同じ人口に対して公共図書館の整備数がかかなり多いことがわかった。また、TH区の1人あたりの図書館面積は0.03㎡となっており、これは2章の2-5-4で紹介する2008年にMLAが公表した図書館基準³⁴⁾、1000人あたりに30㎡の延床面積の整備が望ましいとしている整備基準と概ね一致している。一方で、図書館の1館あたりの平均延床面積はTH区と名古屋市でそれほど大きな差は確認できなかった。

総括すると、TH区立図書館の整備は数的に名古屋市より多いが、図書館の蔵書数は日本より少なくなっており、TH区立図書館は資料の所蔵よりも空間的な整備が名古屋市より充実していると考えられる。

34) Museums Libraries and Archives: Public libraries archives and new development-a standard charge approach, 2001

表 2-2 TH 区と名古屋市の公共図書館整備状況 (2012 年度)

| | TH 区 | 名古屋市 |
|---------------|------------------------|---------------------|
| 1 館あたりの対応人口 | 約 3.89 万人 | 約 11.04 万人 |
| 1 館あたりの平均延床面積 | 1700 m ² ** | 1777 m ² |
| 1 人あたりの蔵書数 | 1.10 冊 | 1.40 冊 |
| 1 人あたりの図書館面積 | 0.03 m ² ** | 0.01 m ² |

TH 区の統計は 5 館の IS と 2 館の既存図書館を対象とした。

なお、※については既存図書館の BGL と CTL の延床面積が不明であるため、5 つの IS のみの延床面積で計算した数値となる。

しかし、イギリスの公共図書館を取り巻く運営、管理や行政制度などは日本と大きい違いがあるため、次から日本とイギリスの図書館制度や整備状態と利用実態を比較しながら、日本とイギリスの公共図書館の相違点を明らかにする。

2-5. 日本とイギリスの公共図書館の比較

2-5-1. 公共図書館の設置主体

1) 日本

図書館の設置において、図書館法第七条の二では「文部科学大臣は、図書館の健全な発達を図るために、図書館の設置及び運営上の望ましい基準を定め、これを公表するものとする。」と規定している。文部科学省が告示した「図書館の設置及び運営上の望ましい基準」³⁵⁾ は図書館設置において、以下のことを基準としている。

設置の基準：

1. 市(特別区を含む。以下同じ。)町村は、住民に対して適切な図書館サービスを行うことができるよう、住民の生活圈、図書館の利用圏等を十分に考慮し、市町村立図書館及び分館等の設置に努めるとともに、必要に応じ移動図書館の活用を行うものとする。併せて、市町村立図書館と公民館図書室等との連携を推進することにより、当該市町村の全域サービス網の整備に努めるものとする。
2. 都道府県は、都道府県立図書館の拡充に努め、住民に対して適切な図書館サービスを行うとともに、図書館未設置の町村が多く存在することも踏まえ、当該都道府県内の図書館サービスの全体的な進展を図る観点に立って、市町村に対して市町村立図書館の設置及び運営に関する必要な指導・助言等を行うものとする。
3. 公立図書館(法第二条第二項に規定する公立図書館をいう。以下同じ。)の設置に当たっては、サービス対象地域の人口分布と人口構成、面積、地形、交通網等を勘案して、適切な位置及び必要な図書館施設の床面積、蔵書収蔵能力、職員数等を確保するよう努めるものとする。

35) 図書館の設置及び運営上の望ましい基準(平成 24 年 12 月 19 日文部科学省告示第 172 号)の第一の二：設置の基準

2) イギリス

① イングランド

1964年の公共図書館・博物館法 (Public Libraries and Museums Act 1964) では、カウンティ (Non-Metropolitan County)、ロンドン特別区 (London Borough)、大都市ディストリクト (Metropolitan District) 及び原則として4万以上のディストリクト (District) は図書館を設置することができる規定した³⁶⁾。しかし、1972年の地方自治体改革とその後の地方政府の再編を経て、現在の図書館サービスの設置体はカウンティ、大都市バラ (Metropolitan Borough)、連合自治体 (Unitary Authority) とロンドン特別区とシティ (The City of London) になっている³⁷⁾(図2-1)。ロンドン以外のこれらの行政機関は、基本的にイングランドの地方政府の2層制行政 (2-tier) の上層行政機関 (Upper-tier Authority) にあたる。これは、日本の県の行政機関に相当すると考えられる。

36) 自治体国際化協会ロンドン事務所：英国の公立図書館，自治体国際化協会，1995.2

37) 西川馨：改革を続ける英国の図書館－最新事情・見学報告，リブリオ出版企画，2003.3

② ウェールズ³⁸⁾

ウェールズの地方政府は全て1層制自治体 (single-tier) である22のユニタリー (Unitary) に分かれている。図書館はこの22のユニタリーごとに設置される。

38) 諸外国の公共図書館に関する調査報告集－UKの公共図書館，株式会社シティー・ディー・アイ，p.103，2005.3，文部科学省のHPを参照 [2014.6.24 確認]

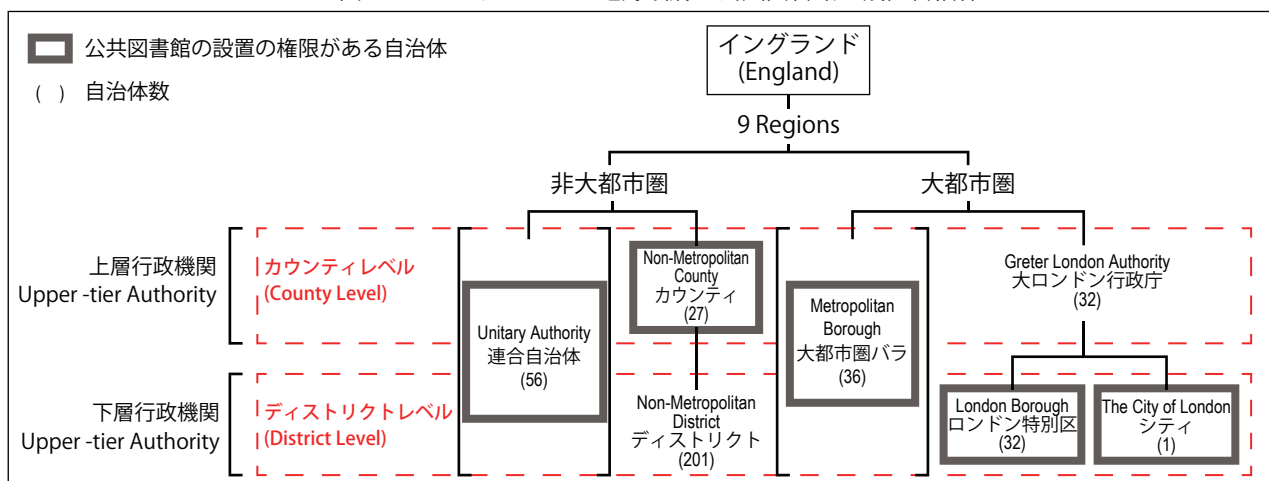
③ スコットランド³⁸⁾

スコットランドの地方政府は32のユニタリー (Unitary) に分かれており、これらが図書館の設置を担当している。

④ 北部アイルランド³⁸⁾

北部アイルランドの地方政府は26のディストリクト (District) に分かれているが、その他に、図書館や教育の行政を担当する5つの教育図書館地域委員会 (Education and Library Boards) が存在し、図書館の設置主体になる。

図2-1 イングランドの地方政府と公共図書館の設置自治体



2-5-2. 公共図書館の設置数

以下は、2012年度におけるイギリスと日本の公共図書館の設置の基本状況を比較したものである(表2-3)。現在、イギリスの公共図書館の設置率は100%である。一方で、日本では全ての都道府県には公共図書館が整備されているが、市町村自治体における図書館設置率は75%である。イギリスにおける公共図書館を設置できる1自治体あたりの人口は日本より多いが、日本の1自治体(市町村)あたりの公共図書館数が2.4館であるのに対し、イングランドの1自治体の公共図書館数27.6館である。これは、例えば名古屋市の一区一館という公共図書館の整備とはかなり異なる図書館システムである。

表2-3 日本とイギリスの図書館設置数(2012年度)

| | イギリス (UK) ^{注1} | 日本 ^{注2} | | | |
|-------------------------------|----------------------------|------------------|---------|--------|---------|
| | | 都道府県 | 市区 | 町村 | 市町村総計 |
| 人口(千人) ^{注3} | 64,106 | 126,660 | 115,049 | 11,611 | 126,660 |
| 公共図書館を設置できる自治体数 | 211 | 47 | 812 | 930 | 1,742 |
| 公共図書館を設置した自治体数 | 211 | 47 | 802 | 504 | 1,306 |
| 公共図書館設置率 | 100% | 100% | 98% | 54% | 75% |
| 公共図書館を設置できる 1自治体あたり人口(千人) | 303.8 | 2,694.8 | 141.6 | 12.4 | 72.7 |
| 公共図書館数 ^{注4} (館) | 4,194 | 60 | 2,572 | 596 | 3,168 |
| 1館あたり人口(千人) | 15.3 | 2,111 | 44.7 | 19.5 | 39.9 |
| 公共図書館を設置した 1自治体あたりの図書館数(館) | 19.9 | 1.3 | 3.2 | 1.2 | 2.4 |

注1：2014年12月11日にイギリスのCIPFA(Chartered Institute of Public Finance and Accountancy)が公表したCIPFA Library Surveyを参照した。

<http://www.cipfa.org/about-cipfa/press-office/latest-press-releases/cipfa-library-survey#>を参照[2014.12.21, 17:26 確認]

注2：日本図書館境協会が毎年公表する図書館の図書館統計(公共図書館2013集計)を参照した。

注3：日本の人口は「全国市町村要覧[平成24年度]」(第一法規)を参照した。

イギリスの人口は2014年6月26日に公表された「Population Estimates for UK, England and Wales, Scotland and Northern Ireland - Mid-2013」を参照した。

<http://www.ons.gov.uk/ons/rel/pop-estimate/population-estimates-for-uk--england-and-wales--scotland-and-northern-ireland/index.html>[2014.12.21, 19:21 確認]

注4：イギリスの公共図書館数には週10時間以下に開館する図書館を含まない。

2-5-3. 公共図書館の利用実態

表 2-4 は、2010 年度から 2012 年度のイギリスと日本の公共図書館の利用実態を比較したものである。

日本の 1 人あたりの貸出数はイギリスより高いが、1 人あたりの来訪回数については、日本はイギリスより低い。また、日本の図書館総数と蔵書冊数は毎年増加しているが、イギリスの図書館整備は毎年減少している。2011 年度には 201 館が閉館され、2012 年度には 71 館が閉館された。

一方で、イギリスの公共図書館の利用も減少し、貸出数が毎年下降している。これは、インターネットや電子媒体による情報取得の影響もあるが、イギリス政府が公共図書館に対する財政削減が大きい理由として考えられる。それに対して、イギリスでは公共図書館サービスを守ろうとする動きが起き、各自治体も積極的に図書館利用を復興させることに努力している。

本研究の分析対象である TH 区は 90 年代にロンドン特別区の中で図書館利用率が最も低い特別区の 1 つであったが、2013 年度の CIPFA の公共図書館の統計によると 3 章以降で分析する TH 区の Idea Store Whitechapel の年間来訪者数はイギリス全国の公共図書館の 8 位であった。

表 2-4 日本とイギリスの公共図書館の利用実態

| 年度 | イギリス ^{注1} | | | 日本 ^{注2} | | |
|------------------------------|--------------------|---------|---------|------------------|---------|---------|
| | 2010 年度 | 2011 年度 | 2012 年度 | 2010 年度 | 2011 年度 | 2012 年度 |
| 人口 ^{注3} (千人) | 63,285 | 63,705 | 64,106 | 128,057 | 127,799 | 127,515 |
| 公共図書館数 ^{注4} (館) | 4,466 | 4,265 | 4,194 | 3,190 | 3,214 | 3,228 |
| 蔵書冊数(千冊) | 98,945 | 94,342 | 92,181 | 398,356 | 408,501 | 415,814 |
| 貸出冊数(千点) | 304,059 | 290,647 | 265,198 | 716,047 | 714,842 | 711,370 |
| 公共図書館来訪者数 ^{注5} (千人) | 313,987 | 306,591 | 288,044 | 308,391 | 303,393 | 309,867 |
| 1 人あたりの蔵書冊数(点/人) | 1.56 | 1.48 | 1.44 | 3.11 | 3.20 | 3.26 |
| 1 人あたりの貸出数(点/人) | 4.80 | 4.56 | 4.14 | 5.59 | 5.59 | 5.58 |
| 1 人あたりの来訪回数 | 4.96 | 4.81 | 4.49 | 2.41 | 2.37 | 2.43 |

注 1：2014 年 12 月 11 日にイギリスの CIPFA (Chartered Institute of Public Finance and Accountancy) が公表した CIPFA Library Survey を参照した。

注 2：日本図書館境協会が毎年公表する図書館の図書館統計(公共図書館 2013 集計)を確認したものである。

注 3：日本の人口は、国勢調査人口データである。イギリスの人口は National Statistics 「Population Estimates for UK, England and Wales, Scotland and Northern Ireland - Mid-2011 and Mid-2012」を参照した。

<http://www.ons.gov.uk/ons/rel/pop-estimate/population-estimates-for-uk-england-and-wales--scotland-and-northern-ireland/index.html> [2014.12.21, 19:42 確認]

注 4：イギリスの公共図書館数には開館時間が週 10 時間以下の図書館は含まない。

注 5：公共図書館への来訪者の延べ人数のこと

2-5-4. 公共図書館の基準

1) 日本

日本の図書館法は自治体が設置する公共図書館に対して数値的な基準を示していないが、日本図書館協会は「図書館システム整備のための数値基準」³⁹⁾を規定している。その基準は全国の市町村の公立図書館のうち、人口一人あたりの「資料貸出」点数の多い上位10%の図書館の平均値を算出し、それを人口階段ごとの基準値として整理した上で提案されたものである。

また、日本図書館協会は、以下に提案する数値はそれぞれの自治体において早急に達成されるべきものであると規定している(表2-5、2-6、2-7、2-8、2-9、2-10)。

「図書館が本文書で掲げるような図書館として機能し得るためには、蔵書が5万冊、専任職員数3名が最低限の要件となる。このとき、図書館の規模としては800㎡が最低限必要となる。これは地域館を設置する場合においても最低限の要件である。」³⁹⁾

39) 日本図書館協会図書館政策特別委員会：図書館システム整備のための数値基準,1989年1月確定公表,2004年3月改訂,日本図書館協会HPを参照

表 2-5 日本公共図書館の延床面積の基準

| 自治体人口 | 延床面積(加算) |
|--|------------|
| 6900人未満 | 1,080㎡が最低 |
| 18100人まで | 1人につき0.05㎡ |
| 46300人まで | 1人につき0.05㎡ |
| 152200人まで | 1人につき0.03㎡ |
| 379800人まで | 1人につき0.02㎡ |
| 【例】人口が50000人の自治体に必要な公共図書館延床面積： 1080+(18100-6900)×0.05+(46300-18100)×0.05+ (50000-46300)×0.03=1080+560+1410+111=3161(㎡) | |

表 2-7 日本公共図書館の開架冊数の基準

| 自治体人口 | 開架冊数(加算) |
|-----------|------------|
| 6900人未満 | 48,906冊が最低 |
| 18100人まで | 1人につき2.69冊 |
| 46300人まで | 1人につき2.51冊 |
| 152200人まで | 1人につき1.67冊 |
| 379800人まで | 1人につき1.68冊 |

表 2-9 日本公共図書館の年間増加冊数の基準

| 自治体人口 | 年間増加冊数(加算) |
|-----------|------------|
| 6900人未満 | 5.57冊が最低 |
| 18100人まで | 1人につき0.32冊 |
| 46300人まで | 1人につき0.30冊 |
| 152200人まで | 1人につき0.24冊 |
| 379800人まで | 1人につき0.17冊 |

表 2-6 日本公共図書館の蔵書冊数の基準

| 自治体人口 | 蔵書冊数(加算) |
|-----------|------------|
| 6900人未満 | 67,270冊が最低 |
| 18100人まで | 1人につき3.6冊 |
| 46300人まで | 1人につき4.8冊 |
| 152200人まで | 1人につき3.9冊 |
| 379800人まで | 1人につき1.8冊 |

表 2-8 日本公共図書館の資料費の基準

| 自治体人口 | 資料費(加算) |
|-----------|------------|
| 6900人未満 | 1,000万円が最低 |
| 18100人まで | 1人につき796円 |
| 46300人まで | 1人につき442円 |
| 152200人まで | 1人につき466円 |
| 379800人まで | 1人につき229円 |

表 2-10 日本公共図書館の職員数の基準

| 自治体人口 | 職員数(加算) |
|-----------|---------------|
| 6900人未満 | 6人が最低 |
| 18100人まで | 100人につき0.025人 |
| 46300人まで | 100人につき0.043人 |
| 152200人まで | 100人につき0.041人 |
| 379800人まで | 10人0につき0.027人 |

2) イギリス

2009年にイギリスの公共図書館全国基準(以下、全国基準)⁴⁹⁾が廃止されてから、公共図書館を整備する数値的な基準政策はなくなったが、図書館行政の政策諮問機関である Museums, Libraries and Archives Council(以下 MLA)は2008年に図書館発展を目指す新しい基準である「Public libraries archives and new development a standard charge approach」を発表した。これは法律的な規定性を持たなく、公共図書館が自発的に目指す図書館基準として位置づけられた。

2001年の図書館の「全国基準」は公共図書館の利用距離圏について数値的な基準を規定したが(表2-11、2-12)、その他の蔵書数や開館時間、職員数などについては数値的な基準を規定しなく、各自治体の事情に合わせて図書館を整備すべきだと指摘し、図書館サービスの利用者満足度基準を提示した(表2-13)。2008年にMLAが公表した図書館基準⁵⁰⁾では公共図書館の延床面積に対して1000人あたりに30㎡の延床面積の整備が望ましいと提案した。これは日本で基準とされた公共図書館の延床面積比べてかなり小さい数値になっている。また、図書館の建設費に関しては、1㎡に3514ポンドを投入することを提案した。

49) Department of Culture, Media and Sport: Comprehensive, Efficient and Modern Public Libraries – Standards and Assessment, 2001

50) Museums Libraries and Archives: Public libraries archives and new development-a standard charge approach, 2001

表2-11 「全国基準」が示した公共図書館の利用距離圏

| 公共図書館の利用距離圏 | |
|----------------------------|--|
| Inner London borough の場合 | 1 マイル ^{注1} 以内の利用距離圏を 100% 達成する |
| Outer London borough の場合 | 1 マイル以内の利用距離圏を 99% 達成する |
| Metropolitan Districts の場合 | 1 マイル以内の利用距離圏を 95% 達成する 或は 2 マイル以外の利用距離圏を 100% 達成する |
| Unitary Authorities の場合 | 1 マイル以内の利用距離圏を 88% 達成する |
| County Councils の場合 | 2 マイル以内の利用距離圏を 85% 達成する |

注1 1マイルは約1.6kmである。

表2-12 インナーロンドン特別区とアウターロンドン特別区

| Inner London boroughs | Outer London Boroughs |
|--|---|
| Camden Greenwich Hackney Hammersmith and Fulham Islington Royal Borough of Kensington and Chelsea Lambeth Lewisham Southwark Tower Hamlets Wandsworth Westminster | Barking and Dagenham Barnet Bexley Brent Bromley Croydon Ealing Enfield Haringey Harrow Havering Hillingdon Hounslow Kingston upon Thames Merton Newham Redbridge Richmond upon Thames Sutton Waltham Forest |

表 2-13 図書館サービスに関する利用者の満足度基準

| 図書館サービス | 3年間で達成すべき満足度 (2001年から) |
|----------------------------------|---------------------------|
| 特定の図書を手に入れた利用者 | 成人は65%、児童は65% |
| 質問や調査によって情報を取得できた利用者 | 成人は75%、児童は75% |
| 図書館員の知識に関して「良い」、「非常に良い」と評価した利用者 | 成人は95%、児童は95% |
| 図書館員の手伝いに関して「良い」、「非常に良い」と評価した利用者 | 成人は95%、児童は95% |

3) 日本と海外の図書館評価指標の比較

今まで日本では貸出数や来訪者数などの量的なデータで図書館サービスを評価した。現在、日本の図書館の貸出数は既に 2-5-3 の表 2-4 で示したように、英国の水準を追い越している。しかし、次のような指摘もある。

「図書館を住民 1 人当たりの貸出数で評価することそのものが国際的な慣行とは一致していない。確かにこれは一つの指標であるが、図書館サービスが貸出数のようにサービスのアウトプットの一つに過ぎないものだけで評価されるべきではないという考え方から、最近になって国際標準規格 ISO で図書館のパフォーマンス指標が定められ、多様なサービスの様態を示す指標 (アウトプット指標) とこれを利用者の側から評価した指標 (アウトカム指標) により構成されるようになった。また、質的な評価方法について議論が高まっている⁵¹⁾ つまり、国際的には図書館サービスを量的評価から質的評価を重視するようになってきている。

このような変化の中で、2002 年 10 月 20 日に日本工業規格 (JIS) は JISX0812 「図書館パフォーマンス指標」という図書館評価指標を規定した。これは、1998 年の国際規格 ISO11620 「図書館パフォーマンス指標」をもとにしており、基本的にはその翻訳である⁵²⁾。この図書館パフォーマンス指標は、貸出に限定されることなく、図書館の経営やサービスの様々な側面について指標化し、改善へのてがかりを見出すためのツールである^{注 2}。徳原直子⁵³⁾はその 29 項目の図書館パフォーマンス指標を各指標が評価する経営上の領域 (① Input(投入・入力)、② Process(過程・環境)、③ Output(産出・出力)、④ Outcome(成果・便益)) に着目して、各指標のもつ評価対象別に分類した (表 2-14、図 2-2)。図 2-2 の通りに、Outcome である利用者の満足度は図書館サービスの成果と効果を検討し、さらに図書館のサービスを改善する重要な参考内容になる。従来の図書館評価は Output の定量的な評価を取り上げることが多かったが、最近では Outcome のようなサービスの質の評価に関心が高まっていると言える。

しかし、徳原は「日本の図書館ではパフォーマンス指標が統計項目としてまったく取り上げられていない。恐らく、実験的にパフォーマンス

51) Department of Culture, Media and Sport: Comprehensive, Efficient and Modern Public Libraries – Standards and Assessment, 2001

52) 糸賀雅児：図書館評価の現状と課題－パフォーマンス指標の活用に向けて、現代の図書館, vol.40, No.3, pp.124-128, 2002

注 2 JISX0812 図書館パフォーマンス指標は日本工業標準調査会の HP(<http://www.jisc.go.jp/>) から閲覧できる。

53) 徳原直子：図書館パフォーマンス指標と図書館統計の国際標準化の動向 (特集：図書館パフォーマンス指標と経営評価の国際動向), 現代の図書館, vol.40, No.3, pp.129-143, 2002

指標を取り入れて検証している図書館はあるものの、現時点で本格的に導入している公共図書館はかなり少ないのがその理由と推測される。(中略) 英国・米国はすでにパフォーマンス指標が広く浸透しており、多くの指標が統計書に取り上げているわけだが」と指摘している⁵⁴⁾。今後の日本においても、単なる貸出数評価指標だけではなく、もっと多様な視点からみる図書館サービスの質的評価を考える必要がある。

54) 徳原直子：図書館パフォーマンス指標と図書館統計の国際標準化の動向(特集：図書館パフォーマンス指標と経営評価の国際動向), 現代の図書館, vol.40, No.3, pp.129-143, 2002

表 2-14 各パフォーマンス指標 (ISO11620) の目的別分類

| | Input (投入・入力) | Process (過程・環境) | Output (産出・出力) | Outcome (成果・効果) |
|---------------|---|--|---|--------------------|
| 資料収集・ 蔵書構築 | タイトル当たり目録費用 受入に要する期間(中央値) 整理に要する期間(中央値) | 要求タイトル所蔵率 | 資料利用率 蔵書回転率 | 利用者の満足度 |
| 利用・貸出 | 利用者当たり費用 来館当たり費用 貸出当たり費用 職員当たり貸出数 | タイトル利用可能性 要求タイトル利用可能性 要求タイトル一定期間内利用 可能性 タイトル目録探索成功率 主題目録探索成功率 閉架書庫からの資料出納所要 時間 (中央値) 開架からの資料探索所要時間 (中央値) (レファレンスサービス)正答 率 | サービス対象者の利用率 人口当たり来館回数 人口当たり館内利用数 人口当たり貸出数 人口当たり貸出中資料数 | |
| 図書館協力 活動 | | 図書館間貸出のスピード | | |
| 施設・設備 | | 設備利用可能性 コンピュータシステムの利用 可能性 | 設備利用率 座席占有率 | |

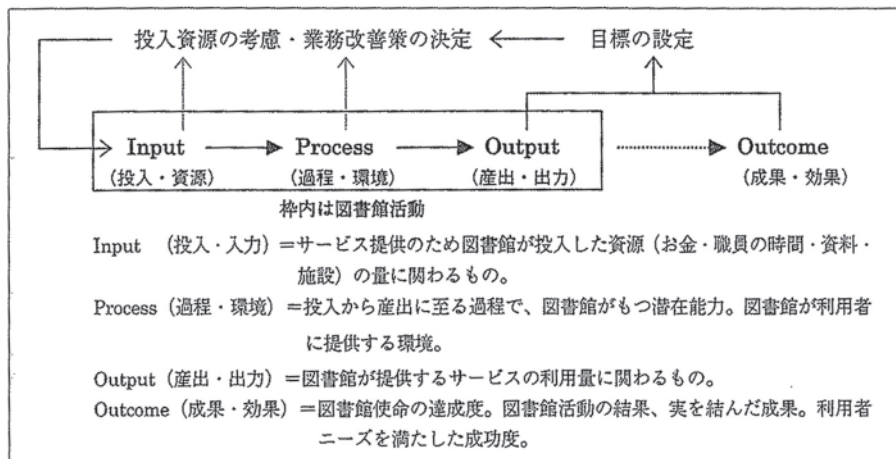


図 2-2 図書館評価指標の四領域の相互関係

2-6. 既往研究と本研究の位置づけ

2-6-1. 図書館建築に関する既往研究

1) 公共図書館の利用圏に関する研究

・栗原嘉一郎、他：分館の利用圏域：公共図書館の設置計画に関する研究・5, 日本建築学会論文報告集 (194), pp.45-52, 1972.4

この研究は地域住民の身近な場所で貸出サービスを提供する公共図書館の分館の利用圏域を把握し、今後の分館の配置計画について知見を得ることを目的とした。著者は名古屋市と日野市の分館を研究対象に、各地区ごとの来訪者の人口に対する割合を来館率とし、図書館の利用圏域を調査した結果、住民の生活拠点が図書館に近いほど、図書館をよく利用されることが分かった。また、図書館を中心に都心の方へ向って1kmも離れば、来館率は急激に減少するが、逆方向に向えば緩やかに減少し、図書館利用圏域は住民の通勤・買物などの動線を主軸として卵形になることが明らかになった(図2-3)。

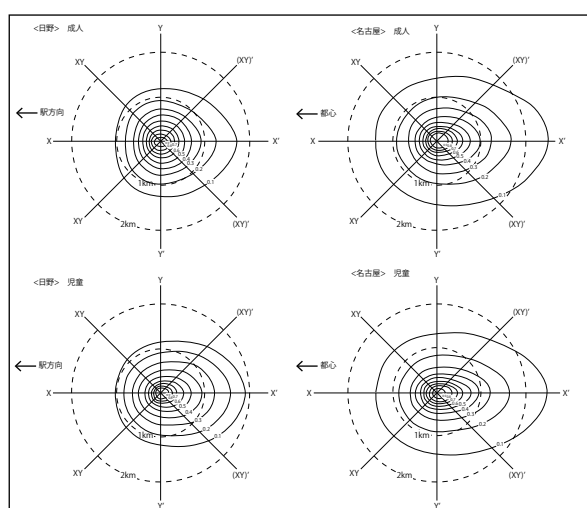


図 2-3 公共と図書館の利用圏域図

・中井孝幸：地方都市における図書館の利用圏域の二重構造—疎住地の地域施設の設置計画に関する研究・1, 日本建築学会計画系論文集, 第482号, pp.75-84, 1996.4

この研究は、栗原の研究で分析対象となった密住地とは異なって、人口分布の疎らな疎住地において図書館の来館率と来館地区までの距離の関係を分析した。その結果、図書館を中心に2kmまでは来館率が急減するが、その後は町部は8km、市部は12km付近までに来館率が緩やかに減少し、0人に収束していくことを明らかにした。つまり、施設密度が引く地域での図書館利用圏域は「館近傍の距離の影響を受けて図書館に引き寄せられる利用」と「距離の影響をあまり受けない基礎的な図書館に対する需要からくる利用」の2つの利用者層に分けられる「二層構造」となることが明らかになった。

2) 公共図書館の施設選択と利用内容に関する研究

・丁園、今井正次、中井孝幸：複数図書館の選択利用の諸要件に関する研究—施設の選択利用を促す地方都市における図書館計画に関する研究 1, 日本建築学会計画系論文集, 第 557 号, 173-179, 2002.7

この研究は三重県の津地区と大垣地区の図書館において、住民の複数図書館の利用に関してその選択理由と利用内容についてアンケート調査注³を行った。また、選択された図書館を蔵書規模と来館距離で比較し、選択行動を類型化した結果、より遠い図書館への利用は必ずしも図書を求めるばかりではなく、過ごしやすい図書館空間を求めてより遠く出かけるケースがあった。つまり、利用者には「読書の場」、「勉強の場」、「交流の場」などを求める多様な要望があり、蔵書規模の大きさが、広範の利用需要をカバーするとは言えないことが明らかになった。

注3 この研究の調査では、調査館そして同時期に普段で最も利用される他の1館名、その利用理由を調べる方法で普段の複数館利用の用数を捉えた。

3) 公共図書館の滞在型利用に関する研究

図書の閲覧と貸出のみを目的としない図書館の滞在利用や図書館の物理的空間の使い方について考察した研究としては、建築学の建築計画分野に既往研究が多く確認できる。

・中井孝幸、今井正次、他：図書館利用者の館内行為と滞在場所から見た居場所の形成—滞在型利用からみた公共図書館の施設計画に関する研究 その1, 日本建築学会大会学術講演梗概集, 2001, pp. 395-396, 2001.7.31

・中井孝幸、今井正次、他：他者との関係に見る居場所形成の要因—滞在型利用から見た公共図書館の施設計画に関する研究 その2, 日本建築学会大会学術講演梗概集, 2001, 397-398, 2001.7.31

その1では公共図書館における来訪者の行為内容と滞在場所を分析し、利用者の属性(児童、学生、成人、高齢者など)によって異なる行動内容が読み取れ、滞在場所の使い分けがなされる実態が確認できた。

その2では、人と人の関係の視点から利用者が公共図書館において滞在場所を選択する要因を幾つ(①個体間距離、②視線、③音、④館内動線、⑤領域性)取り上げ、他者との関係を良好に保つ空間構成には①空間の選択性、②空間の許容力、③空間の分節化が必要であると結論づけた。

・古田大介、小島悠暉、小松尚：市民の多目的利用の視点からみた全国の公共図書館の空間と運営の傾向, 日本建築学会計画系論文集 84(759), 1057-1065, 2019

全国の公共図書館の空間整備と運営状況を調査し、整理した。特に来館者の多目的利用に影響する空間整備と運営状況を分析すると、多目的利用を考慮した図書館は比較的に面積が大きく、広域から利用されていることと、滞在型の運営方針をとっている図書館が多いことが明らかになった。また、その約3割が計画段階から空間整備と運営の両面で市

民参加が実施されており、空間と運営の両面から市民の多目的利用を考慮している傾向が確認できた。

一方、図書館学では、2000年以降、これまで図書館情報学が「場としての図書館」という研究テーマを看過してきたのは大きな損失であったと指摘されてきたが⁵⁵⁾、近年は、滞在型図書館や課題解決型図書館が増加する中、「場としての図書館」の重要性についての議論や研究が進められるようになった。2013年に日本図書館協会施設委員会が主催した第34回図書館建築研修会では「にぎわい・ふれあい空を考える」をテーマに、事例を紹介しながらにぎわい・ふれあいを促す図書館空間の作り方について議論がなされた。また、場としての図書館について考察した論文も以下のように確認できる。

・久野和子：「第三の場」としての図書館，京都大学生涯教育学・図書館情報学研究(9), P109-121, 2010

久野は、オールデンバーグが提唱した「サードプレイス」^{注4}の概念から、図書館について「第三の場」を用いて考察したアメリカの図書館情報学の研究文献をレビューし、公立図書館には、学習室、閲覧室、児童室、情報検索コーナー、プログラム室、ホールなどの多様なスペースがあり、多様な人々のニーズへの対応が行われていることを指摘した。また、「各スペースを利用する人々の間に、その物理的な場が接触や交流をもたらし、社会的なつながりが創出され、(中略)社会的に、私的スペースとしての「第三の場」が生み出されている可能性は高く、これからのさらなる研究が期待される。」と指摘した。

・植松貞夫：デジタル情報時代の図書館建築、その可能性と課題，情報の科学と技術 63(3), P216-220, 2013

「ペーパーレス時代」の到来とともに、建築的の図書館の消滅論が確認される中、市民の「第三の場」となる海外の図書館事例を取り上げながら、物理的な図書館の必要性について言及し、これからの図書館建築は「…資料と情報提供によって、地域と住民の課題解決を支援できる図書館」として、①来館を促す建築であるべき、②レファレンスサービスの場を提供し、③職員が利用者支援に専念できる環境を整備すべきだと、植松は指摘している。

4) 公共図書館の複合化に関する研究

近年、利用者が図書館に求める施設機能が多様化するなか、2-1-5でも紹介したように、図書館を他の公共施設や商業施設と複合して整備する事例も各地で確認できる。

図書館の複合施設に関する建築計画の既往研究も以下の文献が確認できる。

55) Wiegand, Wayne A.(2003) : "To Reposition a Research Agenda: What American Studies Can Teach the LIS Community About the Library in the Life of the User," *The Library Quarterly*, 73(4) p.369-382

注4 オールデンバーグによると、都市生活者には「第一の場」である家庭と「第二の場」である職場の他に、「たまり場、お気に入りの場所」つまり「第三の場」がある。彼は「第三の場」は「堅苦しくない公共的ば集まりの場」であり、住民がいつでも、誰でも自由に出入りができ、おもしろく陽気に会話を楽しめる場所であると定義した。

・耿旭、齊尾直子：公共図書館を含む複合公共施設の機能構成と空間計画，日本建築学会大会学術講演梗概集 2018, P1035-1038, 2018

「近年の傾向として、複合型図書館は以前の文化施設としての複合施設を担うよりも、生涯にわたる学びを支えている教育施設を担う例が多い。」という現状認識から、この論文では、公共図書館を含む複合公共施設の物理的な形態について分類している。

・芳賀瑞穂、佃悠、小野田泰明：1990年代以降の図書館施設整備実態の変化と複合型図書館の空間構成－近年の公共図書館施設整備における計画プロセスとその特徴その1，日本建築学会大会学術講演梗概集 2019, P109-110, 2019

・小野田泰明、芳賀瑞穂、佃悠：1990年代以降の複合型図書館における運営手法と計画プロセスの特徴－近年の公共図書館施設整備における計画プロセスとその特徴その2，日本建築学会大会学術講演梗概集 2019, P111-112, 2019

1990年代以降の複合型図書館整備を調べると、近年の複合型図書館は「ホール機能は減少傾向にあり、商業施設・オフィスなどの割合が増加している。」また、「民間事業者が単独で運営を行う事例では壁式書架の割合が高く、入口にカフェと「生活に関連が深いテーマ」の蔵書を配置する、来館の敷居を下げる空間構成であると考えられる一方で、直営およびそれ以外の運営方式では独立書架の割合が高いものが多く、入口にオープンスペースを接続させてアクセスを容易とする特徴が見られる。」などの点を指摘している。

また、複合型図書館の計画プロセスでは、「直営及びそれ以外の運営方式」の事例は基本構想や基本計画において運営も含めた検討を行う様子がみられる一方で、「民間事業者による単独指定管理」を行う事例は、選定された事業者が運営、建築双方の整備を一括して行っていた。」点について、指摘している。

建築学の他、図書館学でも、複合化については注目されており、2016年4月の「図書館雑誌」では、「複合施設の潮流－図書館からのアプローチ」をテーマとした特集が掲載され⁵⁶⁾、複合施設として図書館のあり方について議論が広がっている。

また、2017年日本図書館研究会の第58回研究大会では、図書館の連携サービスの可能性と課題が大会テーマとなった⁵⁷⁾。

56) 特集－複合施設の潮流：図書館からのアプローチ，図書館雑誌 110(4), P222-225, 2016

57) 《討論》図書館の連携サービスの可能性と課題（特集・第58回研究大会シンポジウム），図書館界 69(2), P106-117, 2017

2-6-2. イギリスの図書館計画と Idea Store に関する既往研究

1) イギリスの図書館計画に関する研究

イギリスの図書館政策に関しては、須賀がイギリスの保守党政権と労働党政権における公共図書館経営の改革策について論じた研究が確認できる。この研究は保守党政権において策定された「モデル基準」と労働党政権において策定された「全国基準」の比較が中心になっている⁵⁸⁾。

また、須賀は図書館の運営や管理における中央政府と地方政府の役割についても論じており⁵⁹⁾、公共図書館・博物館法が成立された1965年から2009年までの中央と地方の行政制度の変化について論じているが、本研究で分析する90年代から現在までの個々の図書館政策の内容については、あまり詳しく論じられていない。

58) 須賀千絵：英国における公共図書館経営改革策：『モデル基準』と『全国基準』の比較を中心に、Library and Information Science, 45号, pp.1-29, 2001

59) 須賀千絵：英国の公共図書館・博物館法と中央政府の役割の変容, 情報の科学と技術, 第59巻, 第12号, pp.579-584, 2009.12

2) Idea Store に関する研究

図書館学ではISに関する事例報告⁶⁰⁾、⁶¹⁾が幾つか確認できる。さらに、公民館学の分野からISの事例を取り上げた既往研究も確認できる⁶²⁾。

また、ISの利用実態と住民認識について分析した研究にはイギリスのシェフィールド大学の図書館学専攻の学生 Jo Hartley の修士論文⁶³⁾がある。その中で、ISはソーシャルインクルージョンに貢献しており、地域のコミュニティにとって重要な存在であると住民に認識されている論じた。

こうした、ISの紹介レポートや論文は確認できるが、あくまで事例紹介と施設の概要説明に留まる文献が多く、現在の5つのISの整備に至った詳しい経緯やISの配置、建築空間および提供プログラムまで含めた施設再編プロセスについて分析し、考察した論文は確認できない。

60) 荒井広明：新構想図書館「アイデアストア」(ロンドン・タワー・ハムレット区)の10年, <http://ameblo.jp/booksharing/day-20130715.html> を参照 [2013.10.18 9:11 確認]

61) 須賀千絵：英国公共図書館訪問記3(タワー・ハムレット), みんなの図書館(312), pp.51-62, 2003

62) 関直規：ロンドンにおけるコミュニティ教育施設の戦略・発展と成果：タワー・ハムレット区の「アイデア・ストア」の事例, 日本公民館学会年報10, P116-124, 2013

63) Jo Hartley: Tower Hamlet' Idea Store: Are They Working, 2005.9

2-6-3. 本研究の位置づけ

2-6-1 で述べたように、90年代までには公共図書館の利用圏に関する研究が多かった。2000年以降からは、滞在型図書館が増加し、図書館内における行動監察やアンケート調査による図書館の利用実態に関する研究が数多くなされた。これらの研究は図書館来訪者の滞在行為や利用意図を分析し、来訪者の滞在行為に応える本棚や家具の配置について考察している。近年は、公共図書館の多目的利用や複合化の増加により、その空間構成や利用実態を調べた研究が確認できる(表 2-15)。

表 2-15 図書館建築に関する既往研究

| | |
|--------|---------------------------------------|
| 90年代 | ・公共図書館の利用圏、図書館の設置計画 |
| 2000年代 | ・居場所としての公共図書館 ・滞在型図書館に関する研究 |
| 近年 | ・公共図書館の多目的利用 ・複合型公共図書館の空間構成および利用傾向 |

こうして、人口減少や少子高齢化による生活と社会構造が大きく変わっている中で、公共図書館を取り巻く環境も大きく変化している。住民は図書の利用だけではなく、学習や交流の目的で図書館を利用し、また、近年には余暇時間を過ごすために図書館で滞在している高齢者も多く見かけるなど、利用者は従来の図書館の貸出サービスの提供には満足できず、より多様なサービスを求めている。

こうした問題意識の下で、筆者は公共図書館が提供するサービスの本質について考え直す時期が来ていると考えており、公共図書館としての新しい在り方について考察する必要があると思う。

そのような視点から見ると日本の公共図書館も徐々にかわりつつあるが、その多くはまだ来訪者数と貸出数の増加を目的とする取り組みに留まっている。また、最近では武雄市立図書館のように、民間のアイデアや手法、主体を導入したコストパフォーマンスの高い図書館経営を志向する動きや、それに対する関心が高くなっている。しかし、公共図書館は政府が設置し、無料で全ての市民に開放する公共施設であり、市民の誰も排除しなく、誰もが利用しやすい図書館サービスを提供するためには、政府から如何に公平な公共サービスを提供すべきかを考えることがもっと重要であると思う。

このような思いから、筆者は図書館の今日的な役割に着目し、海外で都市や地域計画に基づいて、政府から量的かつ質的に図書館を再整備し、成果を遂げている TH 区の IS の分析から、今後の公共図書館の再編に関する知見を得たい。

2-2 で述べた海外の公共図書館の取り組みの多くは規模の大きい中央

図書館が多く、ほとんどは単館として整備されたものである。しかし、TH 区の IS はまちの中でよく見かける商業施設や店舗と同じスケールの建物として整備され、斬新で独特な建築よりも地域住民が使い慣れた店舗のような建築デザインを採用した。さらに、IS は単館だけではなく、TH 区の区立図書館が全体的に再編されてから面的に整備された図書館である。同時に、IS の提供プログラムも地域計画と連動しながら、地域のニーズと課題に応じて再編された。

このように、図書館の空間とプログラムの両方を再編し、かつ都市や地域計画と連動しながら面的に整備された図書館事例は海外においても珍しい事例である。IS の図書館再編プロセスを分析し、その建築空間と配置及び提供プログラムを考察することは今後の日本においても必ず必要になってくる公共図書館の「空間とプログラム」の再編において大変有意義な参考内容になると考えている。そして、その点に、本研究の独創性があると考えている。

第3章 Tower Hamlets 区と Idea Store の概要

この章では、TH区とISの概要として、TH区の歴史、地域特性を紹介し、その中でISが開館された理由やISの整備に関わった戦略の内容を論じる。また、ISという新しいTH区立図書館の特徴とISの開館後の成果をまとめる。

3-1. Tower Hamlets 区の概要

THはロンドン市の中心地であるシティ・オブ・ロンドン (city of London) の東に隣接するロンドン特別区 (London Borough) である (図 3-1)。2011年のTH区の人口は25万人を超え、2001年からの10年間、ロンドン特別区の中でも最も人口増加が大きい特別区である (図 3-2、3-3)。また、高齢化が低く、若い年齢層の人口が多い (図 3-4、3-5、3-6)。

TH区はかつてイギリスの最大の港湾であるロンドン・ドックランズ (London Docklands) の中心地であり、ロンドンシティと海をつなぐロンドンの大事な港湾埠頭であり、19世紀には造船業や海運による貿易がとて盛んだ。しかし、その後は空輸の発達と港湾産業の衰退により、沿岸埠頭はすべて閉鎖となった。19世紀後半にはロンドンの人口拡大により、多くの貧困層と移民層がこの地区に集中され、今もTH区はロンドンの中でも移民が多い特別区であり、低所得者が多く、区の平均就業率はロンドン特別区の中でも最後尾に並んでいる (図 3-7、3-8、3-9)。

一方で、TH区には世界遺産であるロンドン塔 (London Towers) があり、2012年にはTH区の一部のエリアが2011年のロンドンオリンピックの開催場所となった。また、かつて埠頭地だったカナリー・ワーフ (Canary Wharf) は1981年のロンドン・ドックランズ再開発公社 (the London Docklands Development Corporation, LDDC) の設立以降、大規模な再開発を経て、現在は超高層ビルが立ち並ぶビジネス金融街となっている。

このようにTH区は昔から貧困層が多いイーストエンド・オブ・ロンドンと呼ばれる下町のイメージを持つ一方、カナリー・ワーフ (Canary Wharf) の再開発により、新しいビジネスの発展とインフラの整備を行い、TH区の中でも場所によって全く異なる地域特性を見せている。

3-2. Tower Hamlets 区の人口構成および地域課題

TH区の人口の半分以上は移民が占めている、特にバングラデシュ系の住民が多い (図 3-10)。TH区の多くの移民は英語の読み書きができなく、区民の就業率が低いことがTH区の大きな地域課題となっている (図 3-11)。

また、健康問題もTH区の深刻な地域課題の一つである。TH区民の癌による死亡率はロンドン特別区の中で最も高く、喫煙者の数はイギリスの中でも高い割合を占めている。さらに、糖尿病や肥満症の患者の数も増え続けている¹⁾。

1) Tower Hamlet Partnership, Tower Hamlets Community Plan 2020 vision, 2008,

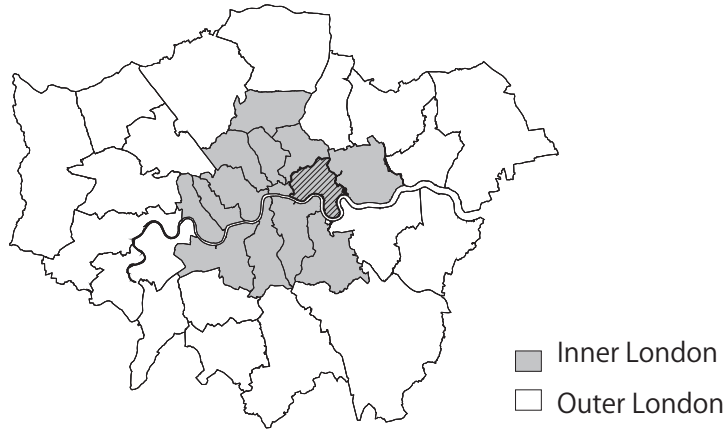


図 3-1 ロンドン特別区中の TH 区

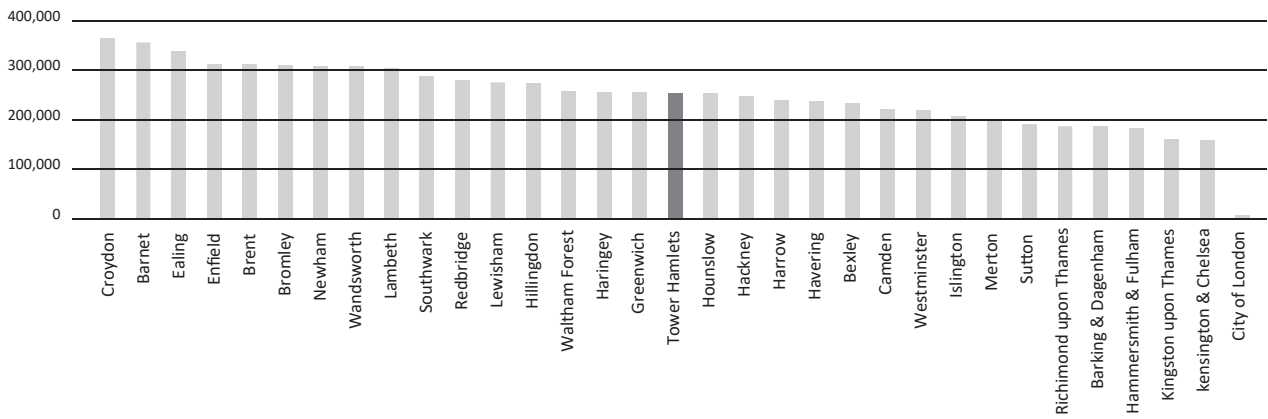


図 3-2 各ロンドン特別区の総計人口 (2011)
(データは 2011 Census, Office for National Statistics)

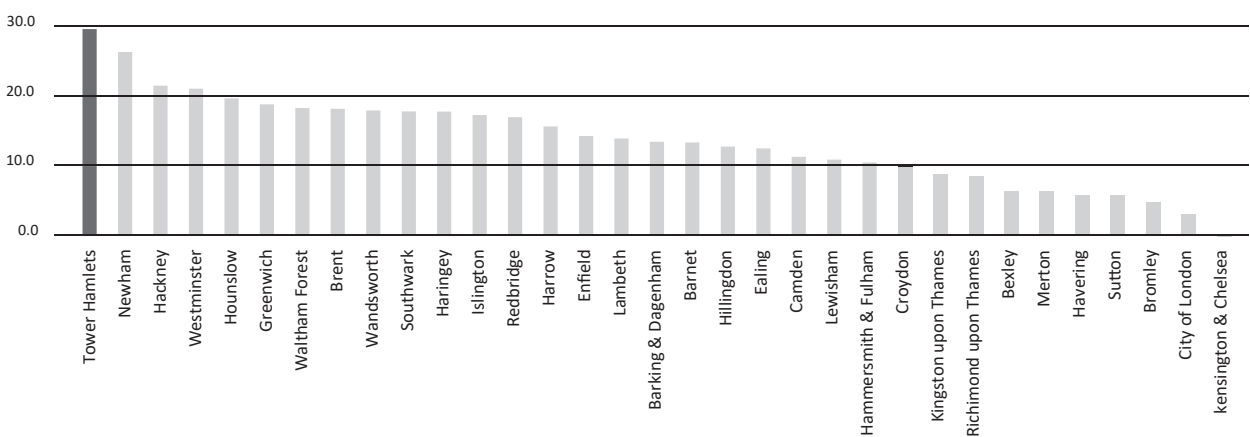


図 3-3 各ロンドン特別区の人口増加 (2001-2011)
(データは 2011 Census, Office for National Statistics)

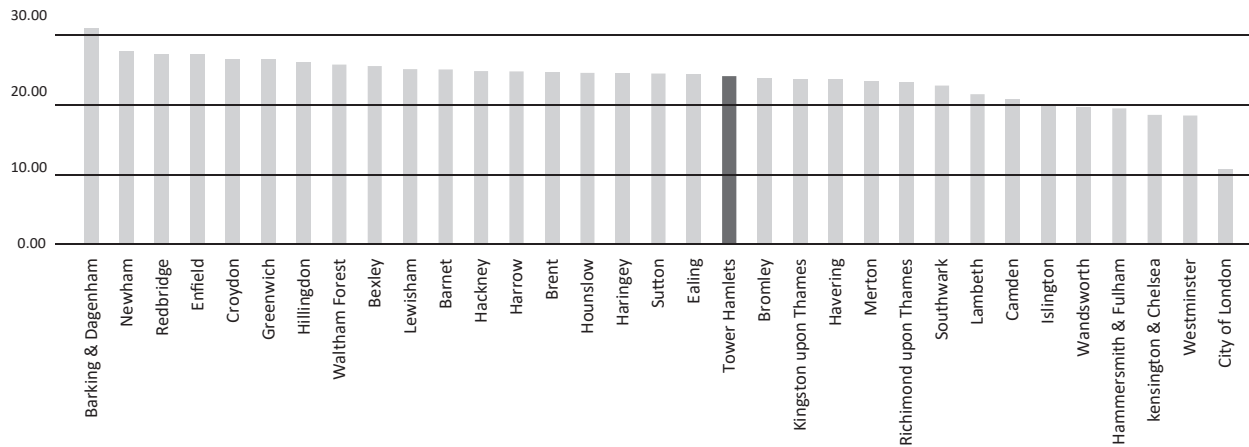


図 3-4 各ロンドン特別区 1-19 歳の人口割 (2011)

(データは Annual Population Survey, Office for National Statistics, <https://www.ons.gov.uk/>)

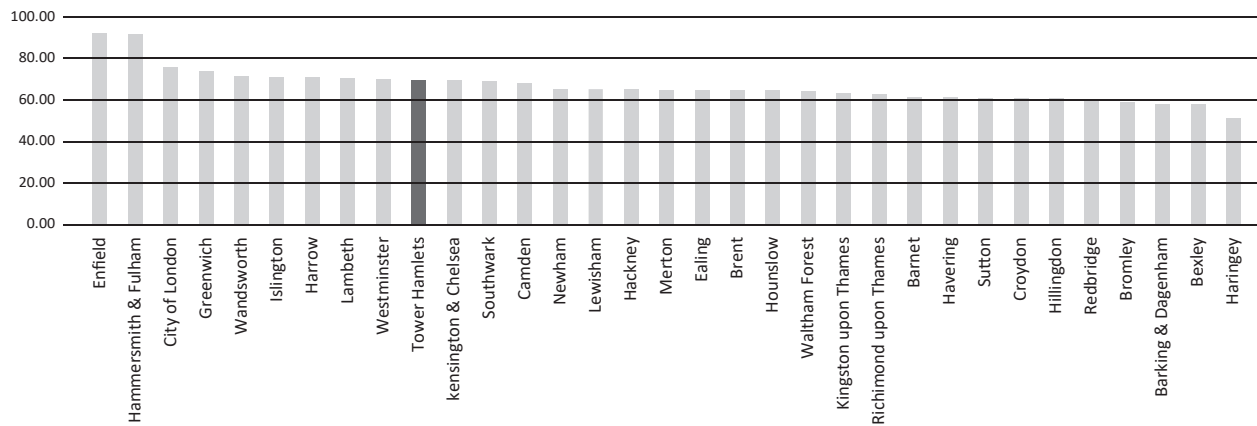


図 3-5 各ロンドン特別区 20-64 歳の人口割 (2011)

(データは Annual Population Survey, Office for National Statistics, <https://www.ons.gov.uk/>)

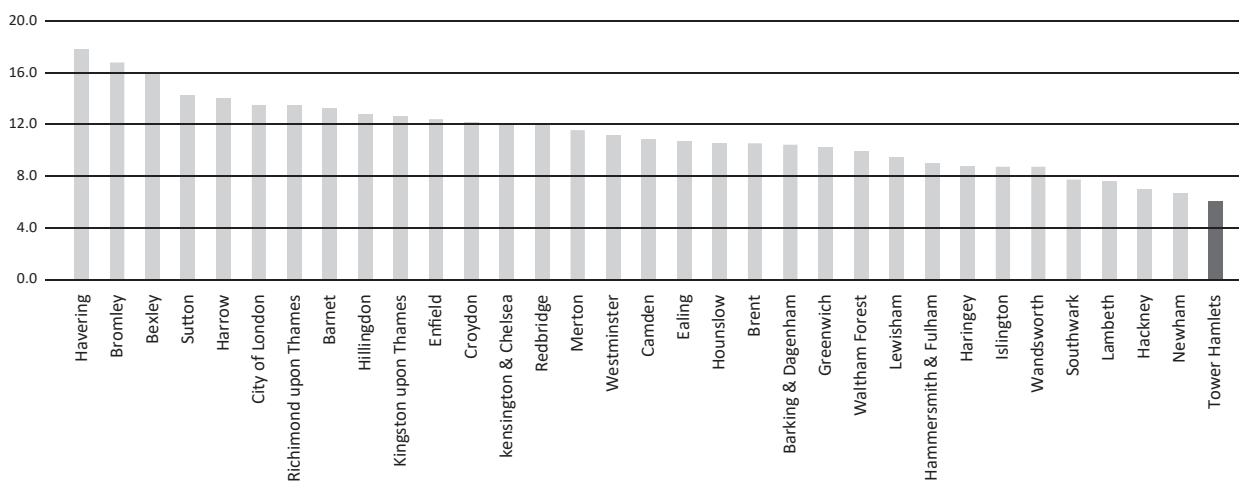


図 3-6 各ロンドン特別区 65 歳以上の人口割 (2011)

(データは Annual Population Survey, Office for National Statistics, <https://www.ons.gov.uk/>)

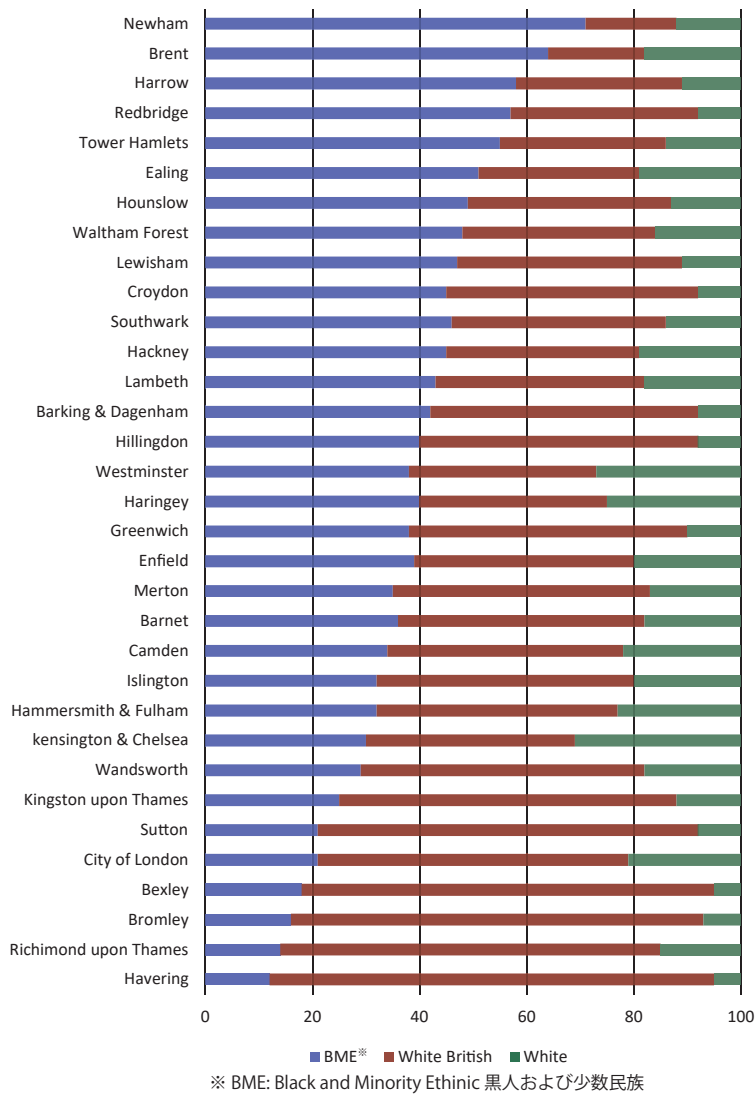
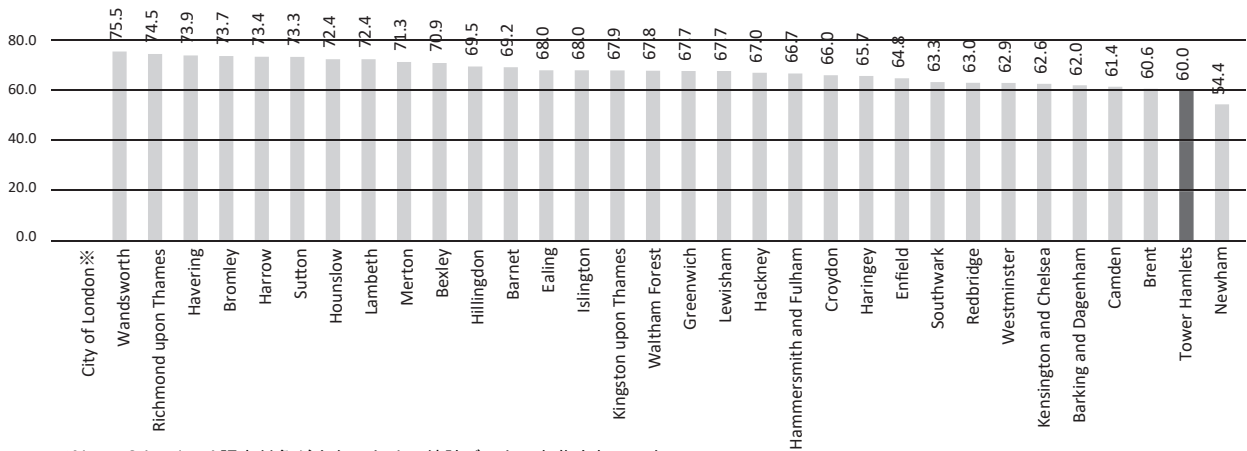


図 3-7 各ロンドン特別区の民族人口割 (2011)
 (データは Annual Population Survey, Office for National Statistics, <https://www.ons.gov.uk/>)



※City of Londonは調査対象が少ないため、統計データに収集されていない。

図 3-8 各ロンドン特別区平均就業率 (2011)
 (データは Annual Population Survey, Office for National Statistics, <https://www.ons.gov.uk/>)

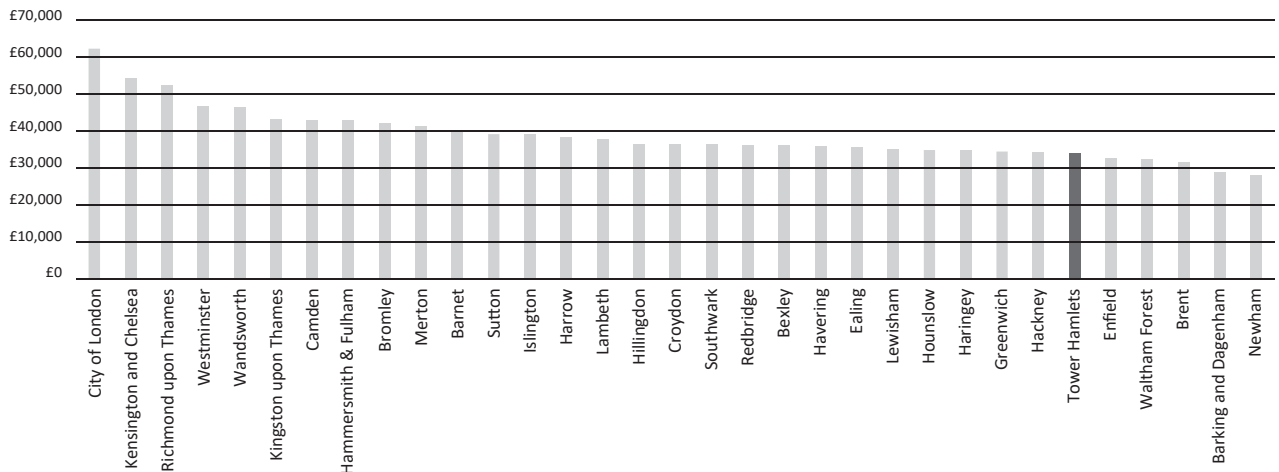


図 3-9 各ロンドン特別区の家帯ごとの平均収入 (中央値)(2011)
 (データは Greater London Authority ホームページから
<https://data.london.gov.uk/dataset/household-income-estimates-small-areas>)

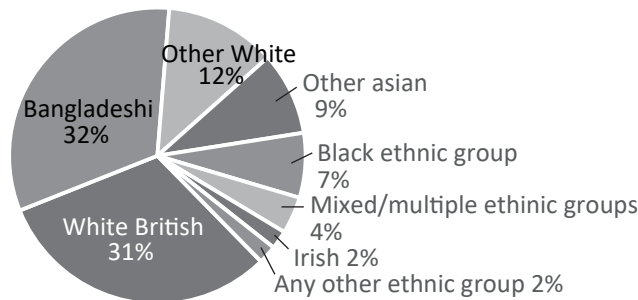


図 3-10 TH 区の人口構成 (2011 Census, Office for National Statistics)

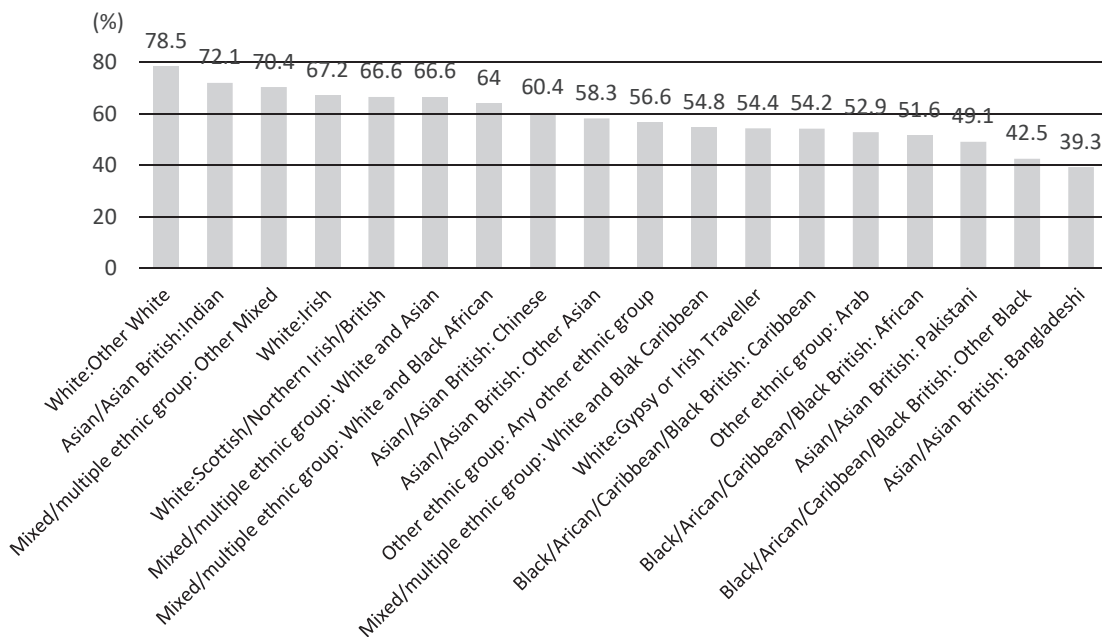


図 3-11 TH 区各民族ごとに見た平均就業率 (2011)
 (データは 2011 Census, Office for National Statistics)

3-3. Idea Store の開館に至る経緯

3-2 で述べたように、TH 区は人口の半分以上を移民が占め、低所得者が多く、ロンドンの中で最も貧しい地域の 1 つである。多くの移民は英語の読み書きができず、高等教育を受けていない人が多い。そのため、英語の図書を主に扱う区内の区立図書館は移民によってほとんど使われていなかった。また、当時 13 館の既存図書館を有する TH 区は、図書館の 1 館あたりの対応人口は 13212 人であり、ロンドンの中でも公共図書館の整備が最も充実していた区である。しかし、1998 年にイギリス全体の公共図書館の平均利用率が 50% だったのに対し、TH 区のそれは 18% であり、さらにその利用率は年々低下している状況であった²⁾。

この時期、イギリスではデジタル情報の利用増加などが理由に公共図書館の利用率が全国的に低下している状況であった。さらに、地方財政の圧迫や図書館経費の削減により、各地で図書館の開館時間が短縮され、スタッフが削減されるなど、自治体によっては図書館が相次ぎ閉館していた³⁾。こうした中、イギリスの図書館界ではこの危機的な状況に対して、市民に図書館利用の復興を呼びかけるように、これからの公共図書館ビジョンを示す「Reading the Future」という図書館政策が公表された⁴⁾。これに関しては、4 章で詳しく説明する。

TH 区では図書館利用率が低下していることに対して、既存図書館が住民にとって本当に必要なのかについて考え直すことを決め、住民に対して図書館利用に関するアンケート調査を行った。その結果、区民の約 70% が図書館をほとんど利用していないことがわかったが、驚くことに、ほとんどの住民は図書館が地域にとってとても重要な存在であると認識しており、区の社会的な教育に重要な役割を持っていると考えていた⁵⁾。

そして、TH 区は既存図書館が区民に利用されない理由を明らかにするために、路上取材や自宅訪問、また紙によるアンケートを区の全世代に配るなど、1 年をかけて徹底的な調査を行った。その結果、既存図書館が利用されない理由として以下のことが明らかになった⁵⁾。

- ① 利用する時間がない。
- ② 開館時間が短い。
- ③ 興味があるものが少ない。
- ④ 選書に問題がある。
- ⑤ 利用したい雰囲気ではない。

一方で、公共図書館を利用するためにあってほしいサービスに関しては、以下の内容が確認できた⁵⁾。

- ① 開館時間が延長
- ② 買物施設と隣接すること
- ③ 行政サービスの提供

2) 荒井広明：新構想図書館「アイデアストア」(ロンドン・タワーハムレッツ区)の 10 年, <http://ameblo.jp/booksharing/day-20130715.html> を参照 [2013.10.18 確認]

3) 古川浩太郎：イギリス地方財政と公共図書館, 図書館に関する情報ポータル, 1992.6.20, <https://current.ndl.go.jp/ca810>, [2020.12.07 確認]

4) Department of National Heritage 「Reading the Future」1997.2

5) Tower Halets Council: A library and Lifelong Learning Development Strategy for Tower Hamlets, 1999.4

- ④ 祝日の開館
- ⑤ アートや芸術の展示
- ⑥ ビデオレンタルサービス
- ⑦ 質の高い図書の所蔵

この調査結果をまとめると、TH区の既存図書館には以下の再編項目が必要だったと考えられる(表3-1)。

表3-1 住民意向調査からわかるTH区立図書館に必要な再編項目

| | 再編項目 | 既存図書館の問題点 | 改善すべき点 |
|---|-----------|--|--|
| 1 | 立地の再編 | ①利用する時間がない (利用しやすい場所がない) | ②買物施設と隣接すること |
| 2 | 提供サービスの改善 | ②開館時間が短い ③興味があるものが少ない (提供プログラムに魅力がない) ④選書に問題がある | ①開館時間の延長 ③行政サービスの提供 ④祝日の開館 ⑤アートや芸術の展示 ⑥ビデオレンタルサービス |
| 3 | 建築的な空間整備 | ③興味があるものが少ない (空間的に魅力がない) ⑤利用したい雰囲気ではない | ③行政サービスの提供 (行政サービスを行う空間の整備) ⑤アートや芸術の展示 (展示空間の整備) |

①立地の問題

市民が既存図書館の改善項目の中で最も優先順位が低かったのが、既存図書館の現在地での継続であった⁵⁾。既存図書館の多くはアクセスにくい場所、商業施設や公共交通機関から遠く離れた辺鄙な場所に立地していること、また区民は時間的にも物理的にもわざわざ図書館を単独的に利用するのではなく、買物や他の日常活動のついでに図書館が利用することを求めていることが明らかになった。つまり、TH区の既存図書館は数的に不足しているのではなく、立地する場所に問題があった。

②提供サービスの問題

区民は既存図書館の開館時間延長を望み、夕方以降と祝日の開館を望んでいた。また、通常の図書の貸出の他に、行政サービスやアートの展示品など、従来の図書館サービス以上に多様なサービスの提供を求めている。

③建築空間の問題

既存図書館の多くはバリアフリーに対応できず、古い石造の建物となっており、外から中の様子が確認できず、入りにくい施設であった。また、ほとんど本棚だけが立ち並ぶ内部空間は読書の習慣が少ない移民にとっては行きたくない場所ではなかった。

6) 関直規: ロンドンにおけるコミュニティ教育施設の戦略・発展と成果 - タワー・ハムレット区の「アイデア・ストア」の事例, 日本公民館学会年報 10, P116-124, 2013

この調査結果に基づいて、TH区は住民が求める図書館のあり方を再検討し、3-2で述べる戦略に基づいてTH区立図書館を再編し、ISとして開館することを決定した。

「Idea Store」の命名に関しては、「取材したところ、'library'を勉強の場であり、自分たちと無縁の世界だと受け止めていた非利用者のイメージを変える必要があり、また、ラテン語やゲルマン語等のあらゆる言語に存在する'Idea'は、最も好奇心に駆られる言葉の一つで、学習及び情報サービスを幅広く展開する施設の役割に合致する、という根拠をあげた。また、'Store'について、「店舗」と「倉庫」の両義があり、日常的に使われる用語で、親しみやすさがある、という理由を述べている。」

6)

'Idea Store'は実際登録商標でもあり、ISの職員は、胸に'Idea Store'のロゴが入った揃いのTシャツを着用している。「これは英国では極めて異例のことである。政府は労働者階級の人々が着るものであって、ミドルクラスの職業と見なされている図書館員は制服を着ないものと考えられているからだ。他の自治体では、図書館員はいずれも私服であった。」

7)

7) 須賀千絵：英国公共図書館訪問記3(タワー・ハムレット), みんなの図書館(312), pp.51-62, 2003

8) Tower Hamlets Council: A library and Lifelong Learning Development Strategy for Tower Hamlets, 1999.4

9) Tower Hamlets Council: Idea Store Strategy 2009, 2009

3-4. Idea Store の戦略

TH区は1999年にISの開設に向けた最初の戦略書である「A Library and Lifelong Learning Development Strategy for Tower Hamlets」⁸⁾(以下、IS戦略1999、図3-12)を発表した。これは、3-3でも説明した既存図書館の立地や開館時間と提供サービスの現状問題に対して、図書館の配置を再計画し、生涯学習プログラムの導入するなど、新しい図書館の空間と提供プログラムを整備する具体的な方策を示すものであった。

さらに、TH区は2009年にISの10年間の成果に基づいて次の10年を展望する「Idea Store Strategy 2009」⁹⁾(以下、IS戦略2009、図3-13)を発表した。ここでは、ISが提供する学習プログラムを個人の生涯学習支援に加えてTH区の地域課題である就業・健康支援にも対応する方針を示した。

そこで3-5では、この2つの戦略に基づいてTH区が行ったISの配置、空間整備とその提供プログラムの再編内容について詳しく分析する。

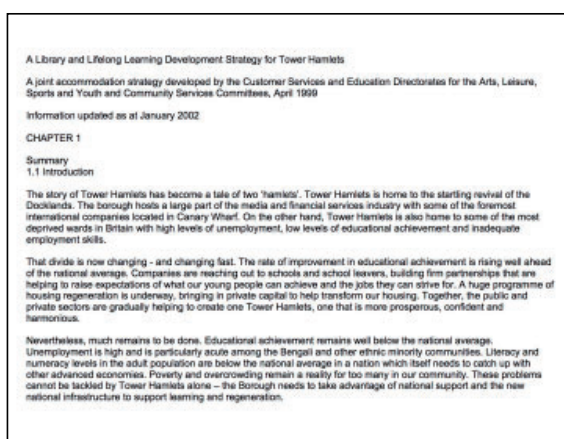


図 3-12 IS 戦略 1999

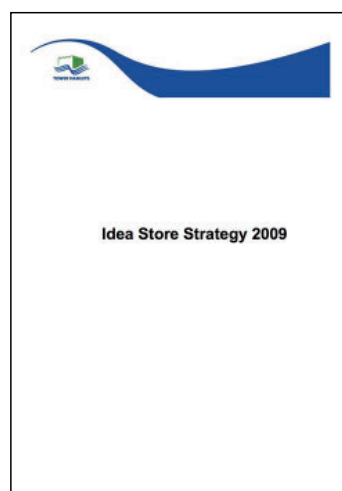


図 3-13 IS 戦略 2009

3-5. Idea Store の特徴

3-5-1. Tower Hamlets 区立図書館の配置再編計画

1990年代におけるTH区の一人あたりの区立図書館数の比率はロンドン特別区(London Borough)の中で最も高かったが、前述のように利用率はとても低く、加えて多くの図書館は住民がアクセスしにくい場所に立地していた。図書館の数より立地に問題があると判断したTH区注¹は、住民が徒歩で20分以内に到着できることを前提に、13のTH区立図書館を最終的に7館に集約する再配置計画を行った。

具体的には公共交通機関でアクセスしやすい場所や買物施設や屋外マーケット、通学路など区民の日常的な活動拠点に図書館を立地させ、特別に図書館まで足を運ぶことがなく、図書館利用が区民の日常生活活動の中の一部になることを目的とした。

現在TH区には2002年から2013年までに順次開館した5つISと2つの既存図書館が開館している(表3-2、図3-15)。なお、閉館された2つの既存図書館の建築情報及び今の施設状況は、収集した文献等から確認できなかった。

注1 IS戦略1999では、TH区の既存図書館は数的には充実しているが、その多くは住民がアクセスしにくい場所に立地しているため、利用率がとても低くなっていることが指摘された。この課題認識については、2014年2月に筆者が実施したヒアリング調査でも確認された。

表3-2 TH区のISと既存図書館の概要

| | 区立図書館 | 開館期日 | 延床面積 (m ²) | 蔵書数(点) (2012.3現在) | 年間貸出数 (2012年度)注 ¹ | 年間訪問者数 (2013年度)注 ² |
|---|---------------------------------|---------------|---------------------------|----------------------|---------------------------------|----------------------------------|
| 1 | Idea Store Bow (ISB) | 2002.5(改築) | 1,350 | 42,273 | 131,748 | 286,958 |
| 2 | Idea Store Chrisp Street (ISCS) | 2004.7.19(改築) | 1,240 | 53,695 | 157,366 | 431,600 |
| 3 | Idea Store Whitechapel (ISW) | 2005.9.22(新築) | 3,700 | 82,380 | 253,813 | 689,381 |
| 4 | Idea Store Canary Wharf (ISCW) | 2006.3.16(新築) | 940 | 33,927 | 124,985 | 298,055 |
| 5 | Idea Store Watney Market (ISWM) | 2013.5.14(新築) | 1,270 | 21,463 | 87,896 | 319,652 |
| 6 | Bethanl Green Library (BGL) | (既存図書館) | 不明 | 42,980 | 96,224 | 147,184 |
| 7 | Cubit Town Libray (CTL) | (既存図書館) | 不明 | 24,784 | 66,106 | 75,422 |

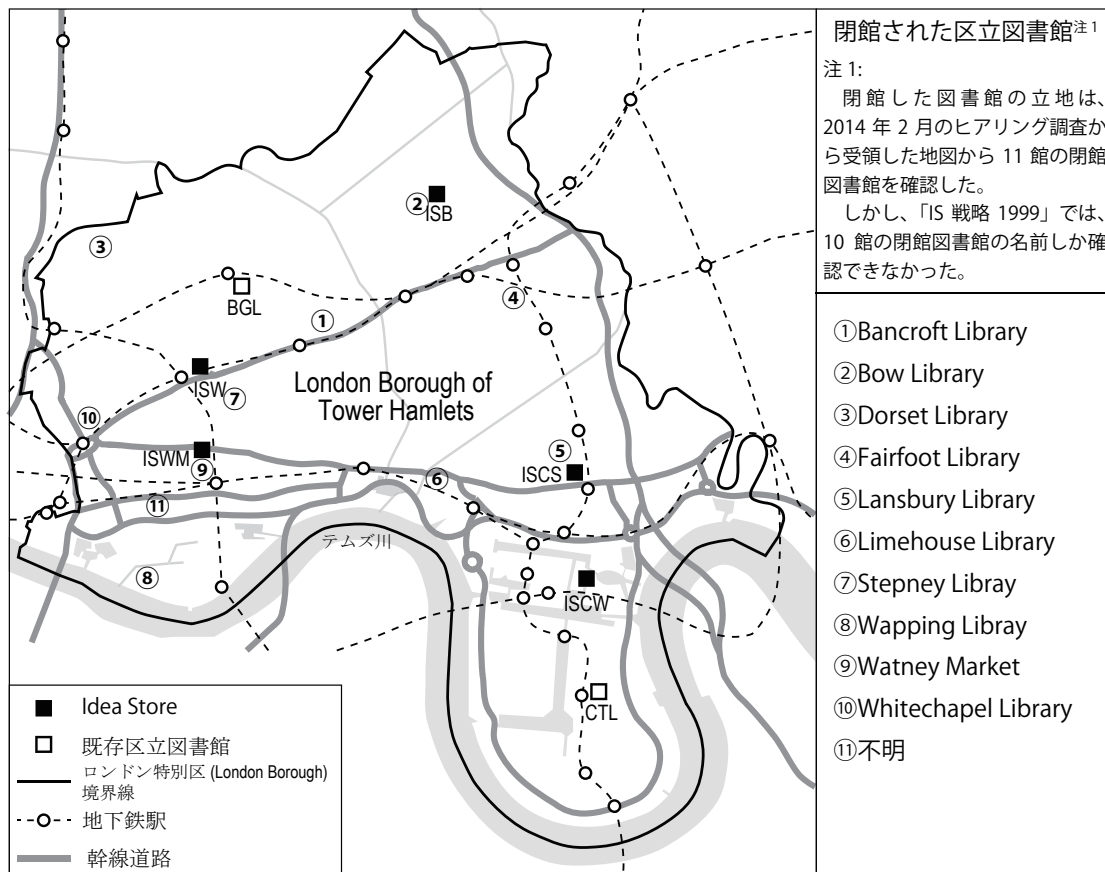


図 3-14 TH 区の区立図書館の配置

3-5-2. 成人学習センターとの連携と多様な学習プログラムの導入

3-3-1 で述べたように TH 区の既存区立図書館の多くはアクセスしにくい場所に立地し、老朽した石造の建物を使用している図書館は外から中の様子が見えなく、入りにくい空間になっていた。それと同様に、TH 区の成人学習センター (Adult Learning Centre) もとてもアクセスしにくい場所に立地し、旧校舎の建物を使用している施設が多く、教室で学習コースを提供している。しかし、学校システムに苦手な人、或は基本的な読み書きもできない人びとにとってはとても入りにくい施設になっていた。

そこで、TH 区は英語の読み書きができない移民や高度教育を受けていない住民に対する学習支援を実施するにあたって、「図書館と成人学習の間には、かなり相乗効果があるように思われる。共通課題に直面しているだけでなく、同じ潜在的利用者を擁している。お互いのサービスを組み合わせることで、双方が利益を得ることができるだろう」¹⁰⁾と判断した。そこで、IS では従来の公共図書館機能である図書の収蔵と閲覧、貸出、学習などだけではなく、TH 区の学習センターと連携し、図書館員と学習センターの職員を共有しながら、多様な学習プログラムを提供している。1999 年まで TH 区には 5 つの成人学習センター (① Bethnal Green Centre、② Tredegar Centre、③ Shadwell Centre、④

10) 関直規: ロンドンにおけるコミュニティ教育施設の戦略・発展と成果 - タワー・ハムレッツ区の「アイディア・ストア」の事例, 日本公民館学会年報, 第 10 号, pp.116-124, 2013

Wessex Centre、⑤ Whitechapel Centre)があったが、建物の老朽化や立地が悪い理由で、現在は Shadwell Centre のみが IS と連携しながら、学習プログラムを提供していることが IS 学習コースのガイドブック (Idea Store Learning Course Guide)^{注2}から確認できる。また、Bethnal Green Centre は 2013 に閉館され、建物は取り壊されたが、2014 年 4 月に、その敷地に会議室や展示スペース、ホールなどを貸し出すコミュニティ・センター (Professional Deveopment Centre) が新築された。

旧来の 5 つの成人学習センターの詳しい住所と図面や写真による建築情報はいままで収集した文献では確認できなかったが、簡単な立地と建物の情報は IS 戦略 1999 から確認できる (表 3-3)。

IS が提供する学習コースには、雇用に必要な外国語やコンピューター技術の習得、健康を維持するためのフィットネスなどが開設され、IS は住民ニーズに応じたテーマごとに多様な学習コースを提供している (表 3-4)。

注2 2009 年度から 2014 年度までの IS 学習コースのガイドブックは Idea Store が公式的に各種パンフレットを展示するオンライン文書共有サイトで確認できる。

(<http://issu.com/ideastores>)

表 3-3 旧成人学習センターの建築概要^{注3}

| 成人学習センター | 立地と建物の特徴 |
|----------------------|--|
| Bethnal Green Centre | Bethnal Green Road の商店街から少し距離が遠い。一番大きい学習センターであるが、旧校舎の建物を使っていた。 |
| Tredegar Centre | 施設はパウ地区 (Bow) の人口密度が低い住宅地に立地している。建物はヴィクトリアン様式であり、内部空間は少し狭く、特に障害者には利用しにくい。 |
| Shadwell | TH 区の南にある高速道路 The Highway 沿いに立地し、アクセスしやすい場所に位置している。障害者に利用しにくい施設になっている。 |
| Wessex Cetnre | TH 区の東西に貫く高架鉄道沿いに立地し、中学校 Cambridge Heath Sixth Form に近いが、まちの活動拠点から離れた場所に位置している。電車が通る音は施設内の講義に妨害を与える。また、建物はバリアフリーになっていない。 |
| Whitechapel Centre | Whitechapel Centre は学校の空き校舎を利用しており、使用できる屋内空間が限られている。なお、施設の建物と敷地は学校の開発で販売される予定である。 |

注3 この表は Tower Hamlets Council: A library and Lifelong Learning Development Strategy for Tower Hamelsts, p.26, 1999.4 の内容に基づいて作成。

表 3-4 2013-2014 年度[※]の IS の学習コース

| テーマ | 就業支援 | | 健康支援 | | 子育て支援 | 趣味・生涯学習 | | | | | | | | | |
|------|----------------|------------|--------|-------|-------|------------|--------------|-----------|----|------|------|------|-----|------|------|
| | 生活・仕事 ための準備 | 有資格 コース | フィットネス | 健康&福祉 | 家族学習 | ビジネス 金融 | ファッション 織物 | 外国語 翻訳 | 料理 | 健康福祉 | IT技術 | 公演芸術 | 撮影術 | 技術教育 | 視覚芸術 |
| ISB | | | ○ | | | ○ | ○ | | | | | | ○ | ○ | ○ |
| ISCS | ○ | | | ○ | ○ | | ○ | ○ | ○ | | ○ | | ○ | ○ | ○ |
| ISW | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | |
| ISCW | ○ | | | | | ○ | ○ | | | | | | ○ | | ○ |
| BGL | | | | | | | ○ | | | | | | | | |
| SHC | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |

※ 2013 年 4 月から 2014 年 3 月まで

3-5-3. 建築デザイン上の配慮

新しく開館したISは商店街や屋外マーケットと近く、加えて公共交通によりアクセスしやすい場所に立地している。また、伝統的なイギリスの公共図書館建築とは異なり、ガラス張りの外壁や鮮やかな色を使ったインテリア・デザインにより、外部からの視認性を高め、図書館の入口付近にカフェを設けるなど、読書を目的としない人も入りやすい空間づくりを行っている。館内には、書架が並ぶ読書スペースだけではなく、学習コースを行う教室やPC室、子どものためのスペース、行政サービスを提供する (One Stop Shop) も設置している。

館内では「禁止標識」をほとんど使わない。ISでやってはいけないことは、職員から利用者に伝える工夫を行い、職員はカウンターの後ろにかたまっているのではなく、常に散らばって館内を歩き回っている。



ガラス張りのカラフルな外観 (ISW)



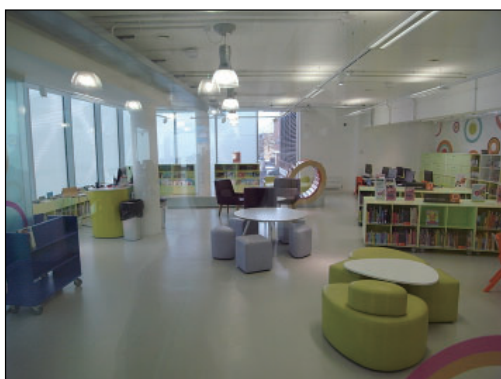
鮮やかな色を使ったインテリアデザイン (ISB)



ショッピングモールの中に位置する ISCW



カフェ (ISB)



子どもの図書館 (ISWM)



閲覧室 (ISCS)

3-5-4. Idea Store の建設の資金提供者

ISの建設における建設資金はTH区からEUまで様々な機関から提供されたが、その中にはTower Hamlets College(THC)などの地域の教育機関も含まれる(表3-5)。ISは学生に職場体験を提供するApprenticeshipプログラムを取り組んでおり、THCはISで移民向けの英語講座を開催していた。しかし、2010年に資金問題からTHCはISとの協力関係を終えた。

表3-5 ISの建設の資金提供者

| Idea Store | 資金提供者 |
|---------------------------------|---|
| Idea Store Bow (ISB) | <ul style="list-style-type: none"> • Tower Hamlets Council • UK Online • Bow People's Trust • The Big Lottery Fund |
| Idea Store Chrisp Street (ISCS) | <ul style="list-style-type: none"> • Tower Hamlets Council • UK Online • Leaside Regeneration • Lloyds of London Charities Trust |
| Idea Store Whitechapel (ISW) | <ul style="list-style-type: none"> • Tower Hamlets Council • Tower Hamlets College • UK Online • Sure Start Partnership • Sainsbury Families Charitable Trusts • London Development Agency • Cityside Regeneration • European Regional Development Fund |
| Idea Store Canary Wharf (ISCW) | <ul style="list-style-type: none"> • Tower Hamlets Council • Canary Wharf Group • Tower Hamlets College • Learning and Skills Council • Barclays • London Metropolitan University |
| Idea Store Watney Market (ISWM) | <ul style="list-style-type: none"> • Tower Hamlets Council • Big Lotttery Fund |

3-6. Idea Store の成果

2011年度におけるTH区の図書館訪問者数(TH区歴史資料館を含む)はISの設立前の2001年に比べ240%増加し(図3-15)、貸出数(オンライン図書館、成人学習センターの貸出数も含む)は28%増加した(図3-16)。2009年のIS戦略によると、2009年のTH区における図書館利用率は住民全体の56%に至った^{注4}。TH区の2014年の年次住民調査によると、抽出された対象住民の61%が区立図書館のサービスに対して高い評価を示している^{注5}。

このような変化から、TH区立図書館の再編は一定の成果を収めていると評価できる。そこで、次章からは、この再編の背景にあるイギリスの公共図書館に関する政策やロンドン及びTH区の都市・地域計画に関する政策に着目し、ISの再編との関係について分析する。

注4 IS戦略2009で引用されている2009年に公表されたイギリスの各公共サービスを評価する全国評価指標(National Indicators)における公共図書館利用の評価指標(NI9)のデータを参照した。

注5 2014年に行われたTH区の年次住民調査によると、TH区の住民から抽出された1147人の調査対象の61%がTH区の区立図書館サービスを「良い」「とても良い」「非常に優れている」のいずれかで評価していた。

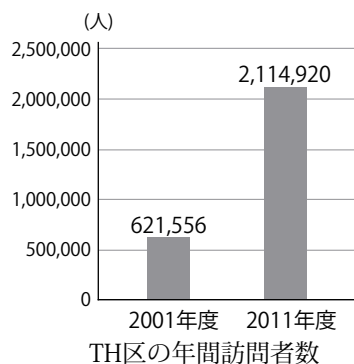


図 3-15 IS 設立前後の TH 区立図書館の年間訪問者数

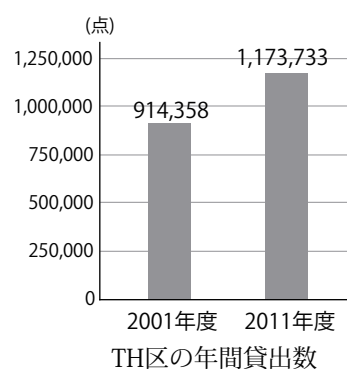


図 3-16 IS 設立前後の TH 区立図書館の年間貸出数

第4章 Idea Store の整備に関する図書館計画及び都市・地域計画

この章では、今のISの整備に至った経緯を明らかにするために、イギリスの図書館計画とロンドン及びTH区の都市・地域計画に関する政策の内容を分析し、それらの政策とISの整備の関係を明らかにする。

4-1. イギリス及びロンドンの図書館行政

イギリスの公共図書館の所管官庁は中央政府の文化・メディア・スポーツ (Department for Culture, Media and Sport、以下DCMS) 省であり、ロンドンではロンドン特別区 (London Borough Councils) とシティ (City of London Corporation) が図書館行政を担当する。

4-2. Idea Storeの整備に関する政策及び事業の分類

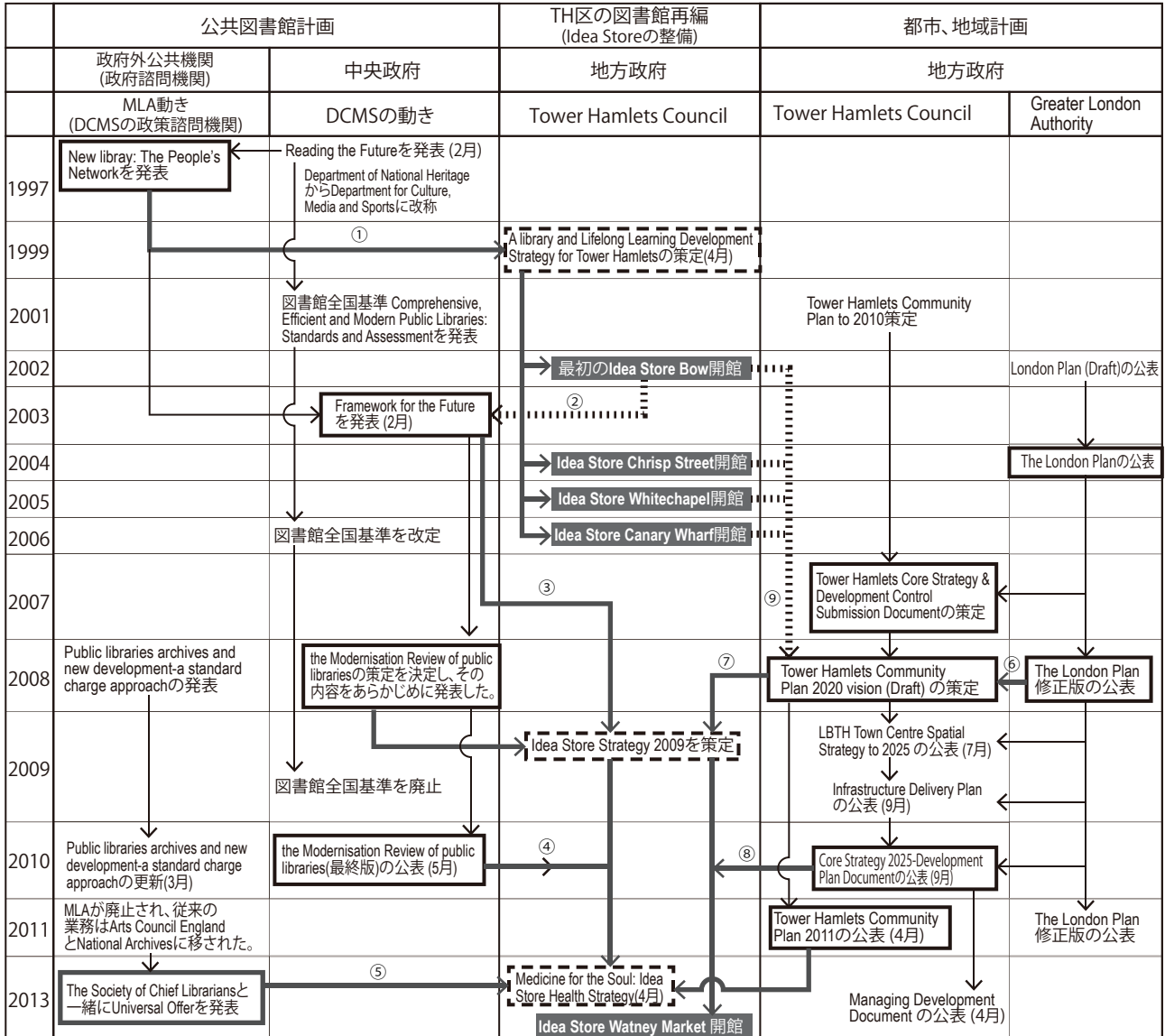
「IS戦略2009」によると、ISの整備は多くの政策や事業内容と関連しているが、それらを分析した結果、以下の3つに分類することができる(表4-1)。

- ①公共図書館計画に関する政策
- ②公共サービスの展開に関する政策および事業
- ③都市・地域計画に関する政策

これらの政策を時系列的に整理したものが図4-1であり、この図を基にISの整備と関連政策の関係について分析する。

表4-1 ISの整備に関する政策及び事業の分類

| 策定機関 | 公共図書館計画に関する政策 |
|---|---|
| Department for Culture, Media and Sport | <ul style="list-style-type: none"> • Reading the Future (1997/2) • Annual library Plan (1998) • Comprehensive, Efficient and modern public libraries: Standards and Assessment (2001) • Framework for the Future: libraries and information in the next decade (2003/2) • the Modernisation review of public libraries (2010/5) |
| Museums, Libraries and Archives Council | <ul style="list-style-type: none"> • New library: The people's Network (1997) • Public Libraries Archives and New Development: A Standard Charge Approach (2010/3) • Universal Offer (2013) |
| 策定機関 | 公共サービスの展開に関する政策および事業 |
| 多機関 | <ul style="list-style-type: none"> • Making Health Choices Easier(2004) • Skilled for Health Programme (2009) |
| 策定機関 | 都市・地域計画に関する政策 |
| Greater London Authority | <ul style="list-style-type: none"> • London Plan(2004, 2008修正, 2011修正) |
| Tower Hamlets Council | <ul style="list-style-type: none"> • Tower Hamlets Community Plan to 2010 (2001) • Tower Centre Spatial Strategy to 2025 (2009/7) • Infrastructure delivery Plan (2009/9) • Tower Hamlets Community Plan to 2020 (2008 草案, 2011/4最終版) • Core Strategy Development Plan Document to 2025 (2010/9) • Managing Development Document (2013/4) |



- ① The People's Networkの公表は、中央政府がITサービスの普及に取り組む出発点になり、IS戦略1999はITサービスの提供を図書館サービスの中心の一つにした。
- ② ISは「Framework for the Future」の中で図書館再編の成功事例として紹介され、ISの建築的な空間整備と学習プログラムの提供を高く評価した。
- ③ 読書と非公式学習の促進、デジタル・サービスの向上、地域ニーズへの対応という3つをテーマにした「Framework for the Future」の内容に基づき、IS戦略2009は「読書、校外学習の提供」「健康支援サービスの提供」「就業支援サービスの提供」「地域コミュニティの結束の強化」をのTH区立図書館の果たすべき役割とした。
- ④ 「The Modernisation Review of public libraries」が示した21世紀の公共図書館の革新の54項目の1つが健康支援サービスである。
- ⑤ 「Universal Offer」により発表された公共図書館の共通サービスの1つが健康支援サービスであり、これはISの健康支援戦略書「Medicine for the Soul: Idea Store Health Strategy」の策定を促した。
- ⑥ ロンドン・プランはTown Centreをベースに公共サービスを提供するThe London Town Centre Networkを提案し、「IS戦略009」はロンドン・プランに基づいてTown Centreに図書館を配置する方針も示した。
- ⑦ コミュニティ・プランはLondon PlanとTH区のLDFに基づき、区のTown Centreに公共サービスを充実させる計画を示した。また、「IS戦略2009」はTH区のコミュニティ・プランに反映された地域課題である就業支援と健康支援に対し、図書館で就業に必要な学習プログラムと健康に関する情報を提供する戦略を示した。
- ⑧ Core Strategy 2025はTown Centreに公共施設を集中させる地域計画に基づいて5番目ISを配置させる方針を示した。
- ⑨ コミュニティ・プランはISが提供する学習プログラムを高く評価し、その後もISで地域課題に応じた就業と健康支援の学習プログラムを展開する方針を示した。

凡例:
 —————> 政策および事業の関連
 ◻ ISの整備に影響が大きかった政策
 ◻ Idea Storeの戦略
 ◻ ISからの示唆
 ◻ ISが施設を再編した背景、間接的要因
 ◻ Idea Storeの開館

図 4-1 ISの整備と関連政策及び事業の相互関係(1997~)

4-3. イギリスの公共図書館計画に関する政策と Idea Store の関係

イギリスでは1980年から全国的に公共図書館の利用率が低下したため、DCMSは公共図書館の復興を目指して、中央政府の公共図書館ビジョンとして3つの政策を順次策定した。それが「Reading the future」(1997)¹⁾、「Framework for the Future」(2003)²⁾、「The Modernisation Review of Public Libraries」(2010)³⁾である。この3つの政策を中心に、イギリスの公共図書館政策の変遷とISの関係进行分析する。

4-3-1. Reading the Future

DCMSの前身であるDepartment of National Heritage(DNH)は1997年に初めて中央政府の公共図書館ビジョンを「Reading the Future」として発表し、公共図書館におけるITサービスの充実、成人学習の支援などを強調した。同年、DCMSの政策諮問機関である図書館情報委員会(Library and Information Commission: 2000年にMuseums, Libraries and Archives Councilとして統合、以下MLA)は「新しい図書館—市民のネットワーク」⁴⁾というレポートを公表した。その中でも図書館におけるITサービスによる情報提供が重視された。須賀⁵⁾によると、これは中央政府がITサービスの普及に取り組む出発点になった(図4-1中の①)。さらにこのレポートは公共図書館は社会的な教育施設として市民の生涯学習を支援し、さらに市民の就業支援も行うべきだと指摘している。

こうして中央政府から示された一連の図書館政策は、IS戦略1999の策定に重要な影響を与え、TH区は区内の図書館再編においてITサービスの提供と生涯学習支援を図書館サービスの中心として位置づけた。

さらに、2001年には図書館の「全国基準」(Comprehensive, Efficient and Modern Public Libraries: Standard and Assessment)⁶⁾が発表され、DCMS各自治体における公共図書館の整備数や、図書館の開館時間、蔵書数とインターネットにアクセスできるコンピュータの整備台数などに対して、詳しい基準値を提示したが、この基準は2009年に廃止された。

4-3-2. Framework for the Future

2003年にDCMSは中央政府の2番目の図書館ビジョンとして「Framework for the Future」を発表した。この政策は①読書と非公式学習の促進②デジタル・サービスの向上③地域ニーズと課題への対応の3つを今後の公共図書館の使命とした。この中で、ISは図書館再編の先進事例として紹介され、ISの図書館の再配置や地域課題に対応した学習プログラムの導入などの再編手法が高く評価された(図4-1中の②)。

「IS戦略2009」は「Framework for the Future」に提示された図書館サービスを基に、今後のTH区立図書館において①読書、学校外での学習、ITサービスの提供、②健康支援サービスの提供、③就業支援サービスの提供、④地域コミュニティーの結束の強化への貢献に積極的に取

1) Department of National Heritage: Reading the Future, 1997.2

2) Department for Culture, Media and Sport: Framework for the future, 2003.2, http://www.healthlinklibraries.co.uk/pdf/Framework_for_the_Futures.pdf [2014.4.28 11:05 確認]

3) Department for Culture, Media and Sport: The modernisation review of public libraries: a policy statement, 2010.3, <https://www.gov.uk/government/publications/the-modernisation-review-of-public-libraries-a-policy-statement> を参照 [2014.4.23 19:14 確認]

4) 英国図書館情報委員会情報技術ワーキング・グループ 著、永田治樹と他3名 訳:新しい図書館—市民のネットワーク, 日本図書館協会, 2001.7

5) 須賀千絵: 英国の公共図書館・博物館法と中央政府の役割の変容, 情報の科学と技術, 第59巻, 第12号, pp.579-584, 2009.12

6) Department of Culture, Media and Sport: Comprehensive, Efficient and Modern Public Libraries – Standards and Assessment, 2001

り組む方針を示した(図4-1中の③)。

一方で、「全国基準」は2009年に廃止され、DCMSは3番目の公共図書館ビジョン「The Modernisation Review of Public Libraries」の先行して2008年に発表し、2010年に最終版を公表された。

4-3-3. The Modernisation Review of Public Libraries

これは「Framework for the Future」に基づき、その内容をさらに充実させたものであり、公共図書館の新しい6つの目標を定めた。それは①図書館サービスの質の向上、②図書館利用の復興、③公共サービスの集約と資金収集、④開館時間の延長、⑤ITサービスの充実、⑥図書館の重要性の確保である。そして、この6つの目標を達成するための54項目の望ましい図書館サービスを発表した。TH区は「IS戦略2009」において、これらの内容に基づく図書館サービスを展開するという計画を示した。

7) Museums, Libraries and Archives: Public Libraries, Archives and New Development-A standard Charge Approach, 2010

一方で、2008年にMLAは「Public Libraries, Archives and New Development: A standard Charge Approach」⁷⁾を発表した。これは公共図書館の必要空間、標準面積や建設費用などを詳しく示したが、施行上の法律性を持つものではなく、公共図書館が各地域のニーズと課題を踏まえた上で自発的に目指す図書館計画の政策として位置づけられた。

4-4. 公共サービスの展開に関する政策及び事業と Idea Store の関係

図書館関連の行政旗艦だけでなく、医療や保健を所管する行政機関も公共図書館による情報の発信力を高く評価している。

2004年に、イギリスの保健省 (Department of Health、以下 DH) は「Choosing Health: Making Health Choices Easier」⁸⁾を策定し、公共図書館は健康を維持するための重要な情報源として認識された。さらに、Skilled for Health Programm^{注1}により MLA は先行的に5つのロンドン特別区^{注2}の区立図書館において、健康に関する学習コースを開催した。このような背景の中で、「IS戦略2009」も健康支援におけるISの可能性をさらに追究する方針を示した。

2010年に公表された「the Modernisation Review of Public Libraries」が示した21世紀の望ましい公共図書館サービスの54項目の1つが健康支援サービスであった(図4-1中の④)。MLAは2011年に解散し、従来の業務はArts Council EnglandとNational Archivesに移された。Arts Council Englandは2013年にThe Society of Chief Librarians、The Reading AgencyとともにUniversal Offerを発表し、①読書、②情報提供、③デジタル提供、④健康支援という4つを今後の公共図書館の共通提供サービスとして定義した。これは、2013年のISの健康支援戦略書である「Medicine for the Soul: Idea Store Health Strategy」⁹⁾の策定を促した(図4-1中の⑤)。

注1 社会的弱者に向けた健康支援プログラムであり、食事会や運動などの活動を通して、健康を維持するための教育を行った。イギリス保健省 (Department of Health) とイノベーション、大学、職業技能省 (Department of Innovation, Universities and Skills) が資金を提供した。

注2 各々はBarking、Dagenham、Ealing、Newham Islington、Haringey 特別区である。

8) Department of Health: Choosing Health-Making Health Choices Easier, 2011.04, <http://www.smokefreeengland.co.uk/files/choosing-health.pdf> [2014.9.21 18:44 確認]

9) Tower Hamlets Council: Medicine for the Soul-Idea Store Health Strategy, 2013

4-5. 都市・地域計画に関する政策と Idea Store の関係

図書館計画の関連政策とともに、ISの整備はロンドン及びTH区の都市・地域計画にも深く関連している。そこで最も重要と考えられる政策を3つ取り上げて、その関連性を分析する。

4-5-1. ロンドン・プラン (The London Plan) と Idea Store の関係

ロンドン・プラン¹⁰⁾は大ロンドン行政庁 (Greater London Authority) がロンドンの15～20年の都市計画を示す政策である。最初のロンドン・プランは2004年に公表され、2008年と2011年に改正された。現在のロンドン・プランは2031年までを対象期間としている。ロンドン・プランはロンドンの中心地であるインナーシティの活性化を重視し、コンパクトシティの実現を推奨している。また、地方、都市部と都市中心部の立地とや公共交通利便性を軸に、その場所に整備する住戸数や駐車スペースを規制している (表4-2)。

10) Greater London Authority: The London Plan, 2004.2

表4-2 ロンドンプランが示すデンシティマトリックス¹⁾

table 4B.1 Density location and parking matrix (habitable rooms and dwellings per hectare)

| | | Car parking provision | High 2 – 1.5 spaces per unit | Moderate 1.5 – 1 space per unit | Low Less than 1 space per unit |
|--|---------------------|--------------------------|--|---|--------------------------------------|
| | | Predominant housing type | Detached and linked houses | Terraced houses & flats | Mostly flats |
| Location | Accessibility Index | Setting | | | |
| Sites within 10 mins walking distance of a town centre | 6 to 4 | Central | 650 – 1100 hr/ha 240 – 435 u/ha Ave. 2.7hr/u | | |
| | | Urban | 200 – 450 hr/ha 55 – 175 u/ha Ave. 3.1hr/u | 450 – 700 hr/h 165 – 275 u/ha Ave. 3.0hr/u | |
| | | Suburban | 200 – 300 hr/ha 50 – 110 u/ha Ave. 3.7hr/u | 250 – 350 hr/ha 80 – 120 u/ha Ave. 3.0hr/u | |
| Sites along transport corridors & sites close to a town centre | 3 to 2 | Urban | 200 – 300 hr/ha 50 – 110 u/ha Ave. 3.7hr/u | 300 – 450 hr/ha 100 – 150 u/ha Ave. 3.0hr/u | |
| | | Suburban | 150 – 200 hr/ha 30 – 65 u/ha Ave. 4.4hr/u | 200 – 250hr/ha 50 – 80 u/ha Ave. 3.8hr/u | |
| Currently remote sites | 2 to 1 | Suburban | 150 – 200 hr/ha 30 – 50 u/ha Ave. 4.6hr/u | | |

注： hr(habitable room) は居室のこと
u(unit) は住戸のこと
ha(hectare) ヘクタールのこと

2004年に公表されたロンドン・プランはロンドンの居住、職場、交通、自然などの様々な側面の空間計画を提示し、さらに図4-2に示すロンドンの5つの区域(sub-region)における実施方法を示した。ロンドン・プランによると、ロンドン区域の今後の発展予測は表4-3の通りである。2001年から2016年までの間にTH区を含めたEast区域が最も発展すると予想されている。

またEast区域は2012年のロンドンオリンピックの開催地にもなっていて、大規模な都市インフラの整備とビジネスや商業の投資が見込まれる地域になっていた。4-5-3でも述べるが、2012年ロンドンオリンピックの開催に伴い、その開催敷地の一部となったTH区の東エリアも多くの公共施設やオフィス、商業施設などを含む都市インフラの整備が見込まれるエリアではあった。しかし、その都市計画とISの配置計画の直接な関係性は特に確認できなかった。

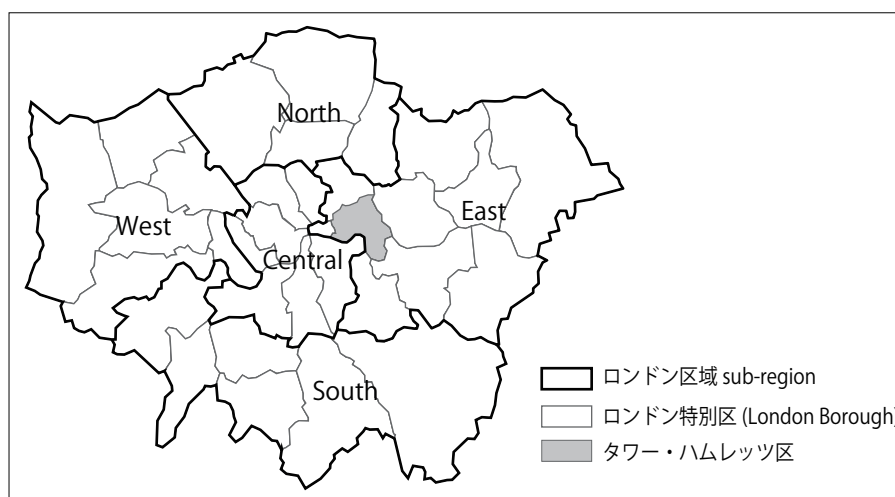


図4-2 2004-2008年のロンドン区域とロンドン特別区

表4-3 2001-2016年のロンドン区域の発展※

| 区域 | 人口 | | | 住宅 毎年増加 最低目標値 (千戸) | 就業者 | | |
|---------|---------------|---------------|---------------|-----------------------------|---------------|---------------|---------------|
| | 2001年 (千人) | 2016年 (千人) | 毎年増加数 (千人) | | 2001年 (千人) | 2016年 (千人) | 毎年増加数 (千人) |
| Central | 1525 | 1738 | 14.2 | 7.1 | 1644 | 1883 | 15.9 |
| East | 1991 | 2262 | 18.1 | 6.9 | 1087 | 1336 | 16.6 |
| West | 1421 | 1560 | 9.3 | 3.0 | 780 | 866 | 5.7 |
| North | 1042 | 1199 | 9.0 | 3.1 | 386 | 412 | 1.7 |
| South | 1329 | 1380 | 3.4 | 2.8 | 587 | 623 | 2.4 |

※ この表は London Plan 2004, p.224 により作成

一方で、ロンドン・プランでは今後発展が見込まれるエリアが Opportunity Area^{注2}として指定されている。TH区では Whitechapel と Isle of Dogs (Canary Wharf を含む) が指定されているが(図4-3)、現在 Whitechapel に立地する ISW は IS の旗艦的な図書館になっており、最も充実した学習プログラムを提供している。一方、Canary Wharf に位置する ISCW はビジネス・エリアに立地した特性を活かしながら、主に英語学習コースを介した就業支援を行っている。このことから、TH区の2つの Opportunity Area に立地している ISW と ISCW ではロンドン・プランの都市計画の方針を反映した整備が行われていると考えられる。

注2 ロンドン・プラン(2004)は大量な新入居者と就職者を収容し、大規模な発展が期待できるエリア(5000個以上の職、2500個以上の住戸を提供し、便利な公共交通機関を整備した場所)を Opportunity Area として定義した。

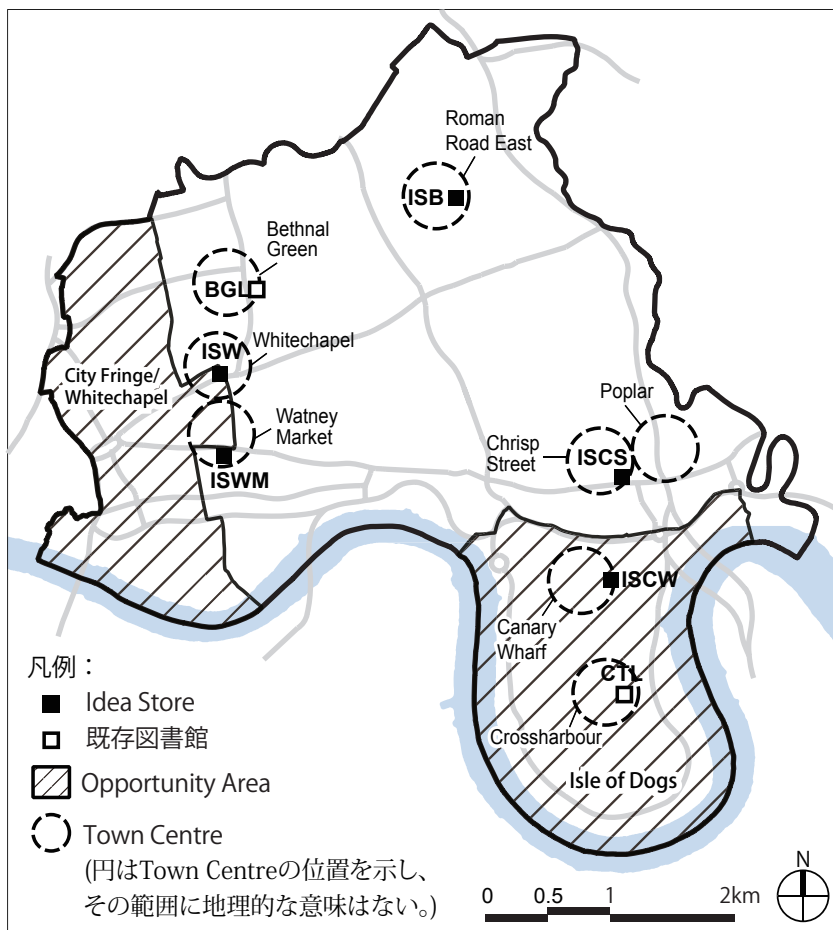


図4-3 TH区のTown CentreとOpportunity AreaとISの配置

4-5-2. Town Centre Network と Idea Store の関係

ロンドン・プランでは The London Town Centre Network が提案され、現在の Town Centre をベースに公共サービスを提供する地域拠点ネットワークの構築を各ロンドン特別区に求めている。具体的には、Town Centre に積極的に商店や住宅、職場、公共施設を立地させ、持続的な発展を求めている。現在、5つ IS と既存の BGL 及び CTL はすべて TH 区の Town Centre^{注3} に立地している。

IS の配置計画については、最初のロンドン・プランが策定される前の IS 戦略 1999 において、地域住民が日常的に利用する商業施設と近い場所に IS を配置させることを既に決定しており、4つの IS はこの方針に基づいて開館した。しかし、2009年の TH 区のインフラ整備計画書である「Infrastructure Delivery Plan」¹¹⁾ と IS 戦略 2009 においては、5番目の IS をどこに配置するかはまだ決定しておらず、Town Centre に公共施設を集中させる TH 区の地域計画 (4-5-4 で詳述する Tower Hamlets Local Development Framework) などに基づきながら決定する方針が示された (図 4-1 中の⑥)。実際に、5番目の IS である ISWM はこの方針に基づいて、2013年に Town Centre である Watney Market に開館した (図 4-3)。

注3 2004年のロンドン・プランで指定された TH 区の Town Centre は① Bethnal Green、② Crisp Street、③ Polar、④ Whitechapel、⑤ Roman Road East、⑥ Watney Market、⑦ Canary Wharf の7つであり、2008年のロンドン・プランでは Crossharbour も追加された。

11) Tower Hamlets Council: Tower Hamlets Infrastructure Delivery Plan, 2009.09

4-5-3. Tower Hamlets Community Plan

コミュニティ・プランはイギリスの地方政府が地域の経済や、環境、社会の改善に関する今後10年の発展方針を示した計画書であり、イギリスの全ての地方政府に策定義務がある。また、ロンドンの各特別区がコミュニティ・プランを策定するにあたっては、前述したロンドン・プランの内容が重要な指針になる。

TH区では地域の戦略的であるパートナーシップであるTower Hamlets Partnership(以下THP)によりコミュニティ・プランが策定される。THPは以下の三つの機関から構成されるが、各機関の詳しい役割に関してはタワー・ハムレッツ区の地域戦略パートナーシップ(Local Strategic Partnership)について研究した中西の研究¹²⁾が参考できる。ここでは、中西の研究を引用して、THPの構成機関について説明する。

① Local Area Partnership(LAP)：住民の代表者で構成される運営委員会が設けられ、地域の問題点やニーズを自治体に反映する機関である。TH区はLAPは8つの地域に分離され、各LAPは2、3つの選挙区(Ward)から構成される(図4-4、4-5)。

② Community Plan Action Groups：後で述べるコミュニティ・プランが示す地域戦略のテーマごとに運営委員会が作られ、各テーマに対応するサービスの提供において、サービスの質や機関など相互的な決定を行う。また、中央政府の政策と地域の戦略を付き合わせて調整し、コミュニティ・プランの戦略的なマネージメントを担う機関である。

③ The Partnership Management Group: コミュニティ・プランが示した目標が達成されているか、各パートナーシップが十分に機能しているかなど、地域戦略の実現を監査する団体。

12) 中西典子, ロンドン・インナーエリアにおけるコミュニティ・ガバナンスの実相—タワー・ハムレッツ区の地域戦略パートナーシップを事例として、地域創成研究年報(4), pp.182-230, 2009

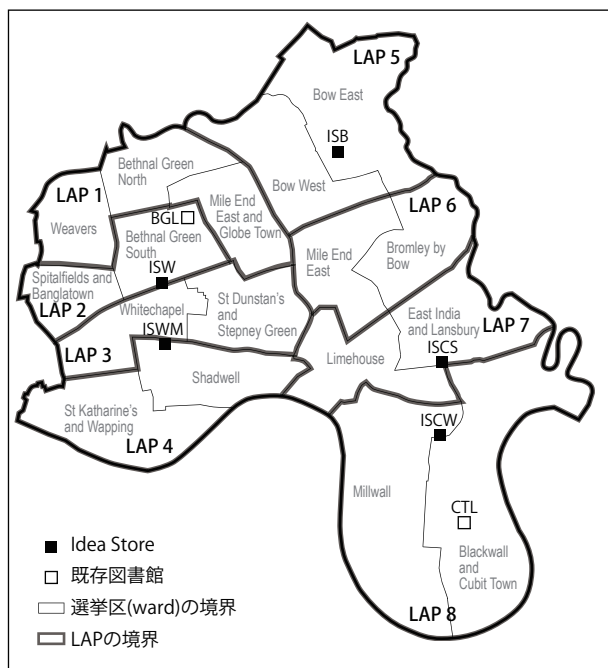


図4-4 2002-2014年のTH区のWardとLAP

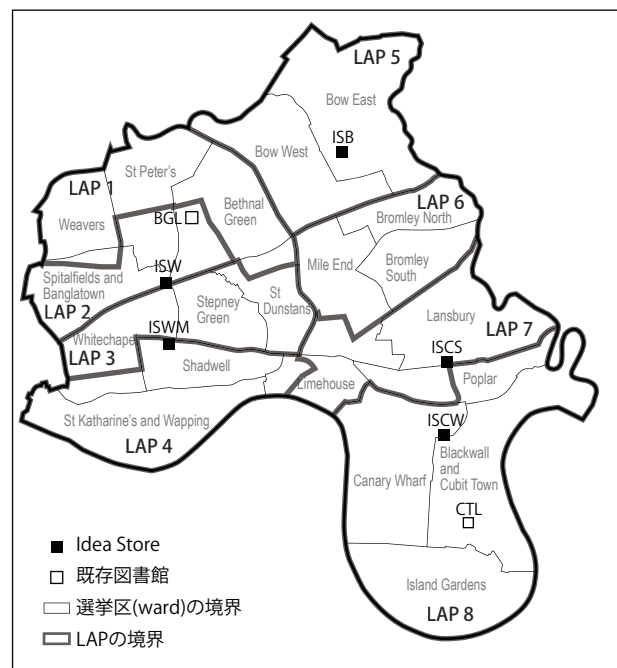


図4-5 2014年-現在のTH区のWardとLAP

TH区は2001年に「Tower Hamlets Community Plan(以下、THCP to 2010)」¹³⁾を策定した。2008年には次の10年の計画の草稿である「THCP 2020 Vision」¹⁴⁾が公表され、2011年にはその最終版である「THCP 2011」¹⁵⁾が公表された。コミュニティ・プランは幾つのテーマごとに地域戦略を示すが、図4-6は「THCP to 2010」と「IS戦略2009」に影響を与えた「THCP 2020 vision」の戦略テーマをまとめたものである。

「THCP to 2010」ではISをレジャー施設として位置づけ、住民に余暇時間を過ごせる場所を提供し、さらに生涯学習プログラムを図書館に導入する戦略を示した。ここまで、TH区は図書館を社会的な教育施設として位置づけ、ISにはあくまでも生涯学習を支援する役割が与えられたのみであると考えられる。

しかし、「THCP 2020 Vision」では、ISに学習プログラムを通じて地域雇用を改善し、さらに情報発信による健康支援を行う役割が新たに加えられた。その背景には、区民の就業に必要なスキルアップや学習能力を向上させるためには、学校単独だけではなく、その延長の教育施設である図書館が重要な役割を持っていると判断したためである。また、CanaryWharf地域の継続的な発展と2012年のロンドン・オリンピックの開催にともない、今後も多くの職場が提供され、経済的な投資が見込まれる中^{注4}、学校だけではなく、図書館という社会的な学習の場を介して、区民に新たな知識やスキルを取得させる必要があった。

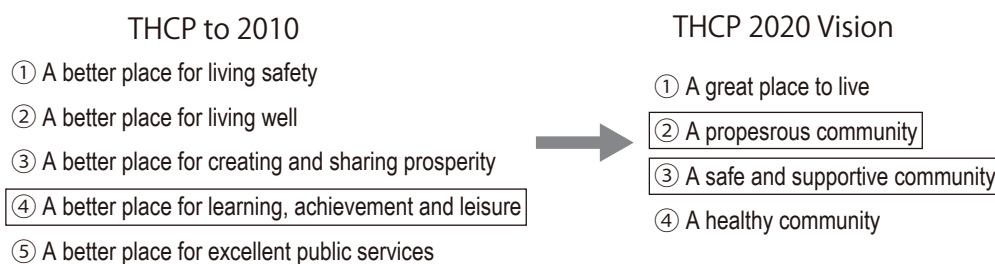
つまり、TH区のコミュニティ・プランから読み取れるISの役割は、当初の生涯学習支援から就業・健康支援に変化したと言えるが、これは「IS戦略1999」年と「IS戦略2009」が示したISが提供するサービスの変化とも一致している(図4-7、図4-1中の⑦)。

13) Tower Hamlets Partnership: The Community Plan 2002-2003 (The Community Plan to 2010), [https://democracy.towerhamlets.gov.uk/Data/Cabinet/20020619/Minutes/\\$Revised%20Community%20Plan%20-%20draft%2012%20June_Appendix_CAB_EX_190602_AT.doc.pdf](https://democracy.towerhamlets.gov.uk/Data/Cabinet/20020619/Minutes/$Revised%20Community%20Plan%20-%20draft%2012%20June_Appendix_CAB_EX_190602_AT.doc.pdf) [2014.6.25 15:15 確認]

14) Tower Hamlets Partnership: Tower Hamlets Community Plan 2020 vision, 2008

15) Tower Hamlets Partnership: Tower Hamlets Community Plan 2011, 2004.11

注4 「THCP 2020 Vision」によると、ロンドンオリンピックの開催により、TH区内には概ね3万人の新たな仕事が提供され、37万㎡の商業スペースの整備が見込まれる。



凡例：□ ISが貢献する項目

図4-6 TH区のコミュニティ・プランの変遷

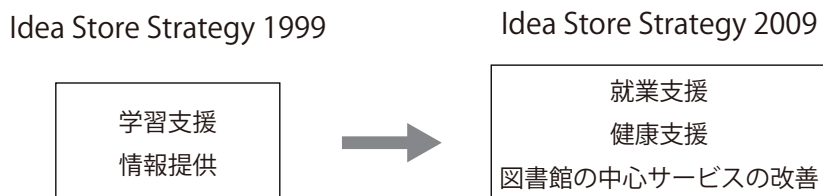


図4-7 IS戦略が示したISの提供サービスの変化

4-5-4. Tower Hamlets Local Development Framework

TH区のコミュニティ・プランに基づいて策定された地域計画が Local Development Framework(以下LDF)である。LDFは次の2つの政策から構成される。

① Core Strategy 2025 - Development Plan Document¹⁶⁾(以下、Core Strategy 2025)

TH区の空間計画を示す政策であり、LDFの中の主要な政策である。2010年9月に公表された「Core Strategy 2025」は居住環境の向上、就業・学習支援、交通改善を向けたTH区のマスタープランを提示し、ロンドン・プランが求めるTown Centreネットワークの構築方針を示している(図4-1中⑧)。

16) Tower Hamlets Council: Core Strategy 2025-Development Plan Document, 2010.09

17) Tower Hamlets Council: Managing Development Document-Development Plan Document, 2013.04

18) Tower Hamlets Council: London Borough Tower Hamlets Town Centre Spatial Strategy to 2025, 2009.7

② Managing Development Document¹⁷⁾

「Core Strategy 2025」を構成する住宅、オフィス、公共施設の配置計画や各選挙区(ward)ごとの発展方針を具体的に示している。

この2つの政策はTH区の公共施設の全般の立地に対して影響を与えるものであり、ISの配置計画においても極めて重要な政策だと考えられる。

さらに、2009年には上記の「Core Strategy 2025」に基づいた「Town Centre Spatial Strategy to 2025」¹⁸⁾が公表され、TH区のTown Centreに対して、それぞれの地域特性の分析を踏まえた各Town Centreの空間計画を示した。この計画は今後のISの開設やISと他の公共施設との連携構築などに大きな影響を与えるものと考えられる。

4-6. 小結

4-6-1. 関連政策とISの整備の相互関係

本章での分析を通じて、TH区立図書館は主に次の3つの考え方によって再編され、地域再生の拠点として位置づけられていることが分かる。

- ①中央政府の公共図書館に関する政策に基づいて、ITサービスを充実し、さらに生涯学習、健康支援などをTH区立図書館サービスに導入したこと。
- ②このように再編された図書館サービスを多くの住民が享受できるように、都市・地域計画の政策と連携しながらTH区立図書館を再配置したこと。
- ③さらに、ISの取り組みや成果は公共図書館政策と都市・地域計画にフィードバックされ(図4-1中の②③)、それが加味された新たな政策がその後のISの整備に影響を与えたこと。

つまり、これまでのTH区立図書館の再編としてのISの整備は、地域の課題とニーズに対応した政策と実空間の計画・整備がスパイラル・アップの構築プロセスとして展開されてきたと見ることができる(図4-8)。

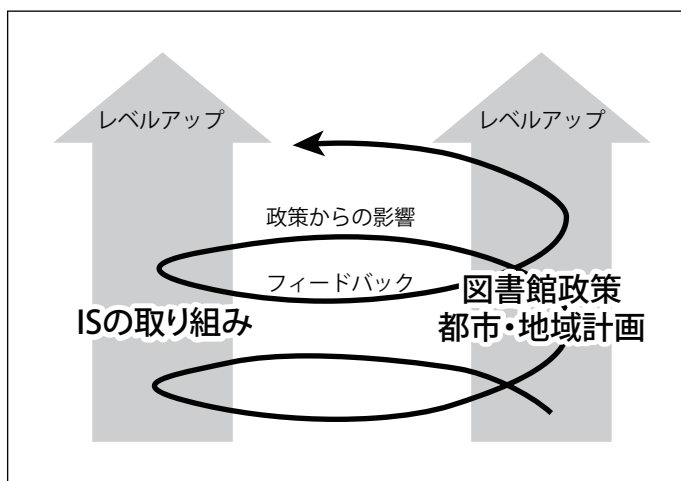


図4-8 ISの整備と関連政策のスパイラル・アップの構築プロセス

次章からはこれらの政策を背景に、TH区が行ったISの空間整備と配置及び提供プログラムの再編について詳しく分析し、それらの関係性について考察する。

第 5 章 Idea Store の建築空間及び配置

5-1. Tower Hamlets 区の地域特性と Idea Store の配置

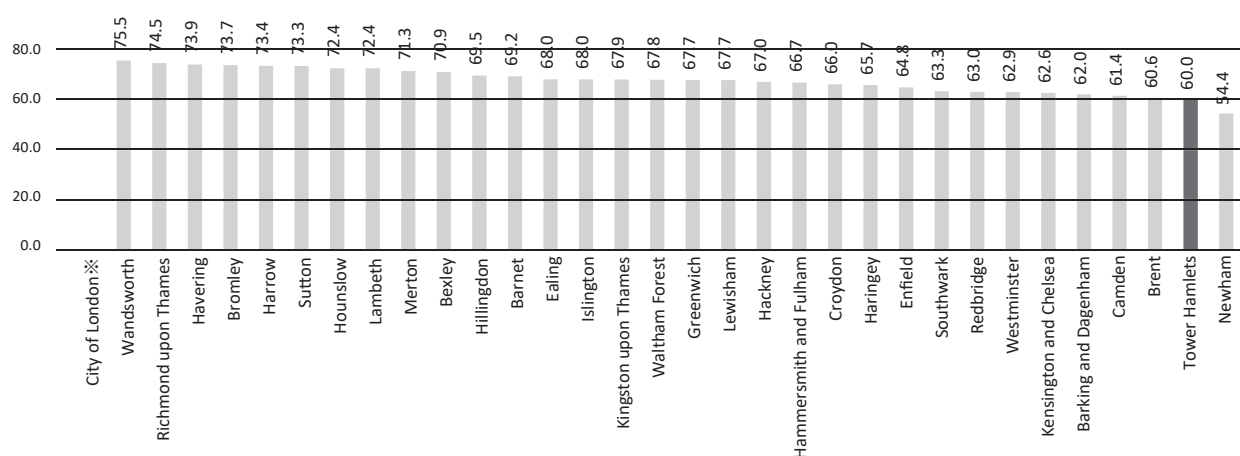
5-1-1. 居住者の地域特性と Idea Store の配置

TH 区の就業率は約 60% であり、ロンドン特別区の中で 2 番目に低い (図 5-1)。また、住民平均寿命は全国平均より低く、癌による死亡率はロンドン特別区の中で最も高い。これは区民の半数以上を移民が占めることが影響している。そこで、TH 区内の各選挙区 (Ward) の人口、15 歳以下および 65 才以上の人口率、BAME の人口率、就業率、健康に問題があると感じる人口率に着目し、各 IS との関係を見るために各指標の数値分布を考慮して各々を 5~7 段階で区分した (図 5-2) 注 1。TH 区の地域課題である就業と健康問題に関する状況は選挙区によって差がある。就業率については、特に TH 区の中中部で 50% 前半と低く、健康に問題があると感じる人口率については、TH 区の北側が全般に高いが、特に ISWM と ISW および ISCS 周辺が最も高くなっている。

さらに、各 IS とその周辺地域に注目すると、その特性は IS 毎に異なることが読み取れるが、それは次のように整理できる。

- ① ISB 周辺は移民や子どもの人口が少ないが、高齢者人口は多い。これは、TH 区の東北エリアには昔から Lea Valley 地区の工場で働いていた住民が多く、現在は定年した高齢者が多いためである。就業率は TH 区の中では比較的高い。
- ② ISCS 周辺は TH 区の中で最も貧困な地域であり、移民が多く、子どもの人口も多い。また健康問題が深刻であり、就業率も低い。
- ③ ISW 周辺は人口が多く、また ISW の東のエリアに移民と高齢者の人口が多い。一方で、健康と就業率も地域の問題になっている。
- ④ ISCW 周辺は人口が比較的少なく、子どもと高齢者の人口率も低い。また、就業率が高く、健康状態も良好である。
- ⑤ ISWM 周辺は人口が多く、子どもと高齢者、移民の人口が多い。しかし、ISWM の東に位置する St Dunstan's and Stepney Green Ward では住民の健康状態が深刻になっている。

注 1 各図は TH 区のウェブサイトに掲載された各選挙区の各年データを参照して作成した。なお、BAME とは Black Asian Minority Ethnic の略語であり、黒人やアジア人などのマイノリティエスニック集団を意味する。



※City of Londonは調査対象が少ないため、統計データに収集されていない。

図 5-1 各ロンドン特別区就業率 (2011)

(データは Annual Population Survey, Office for National Statistics, <https://www.ons.gov.uk/>)

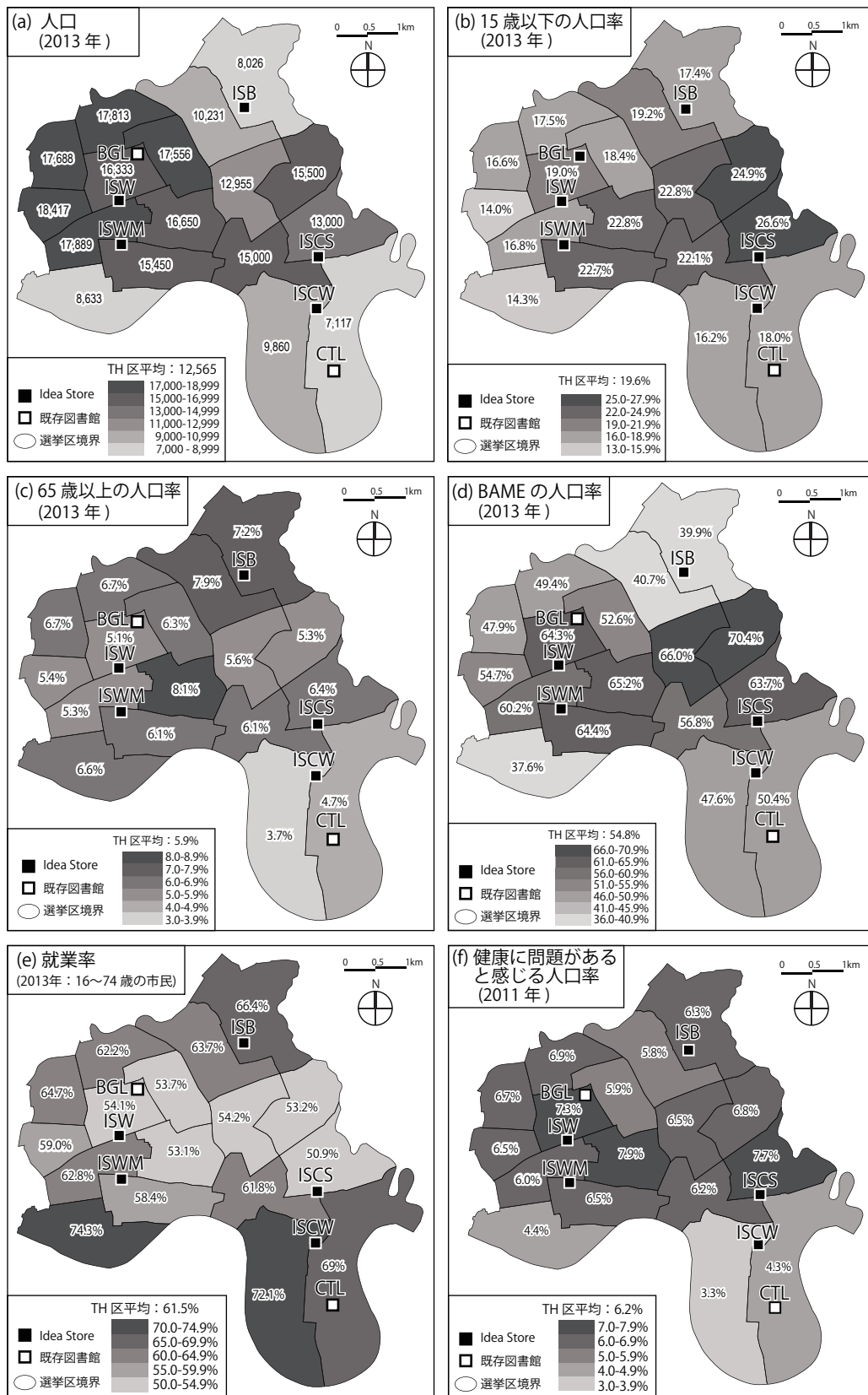


図 5-2 TH 区内の選挙区 (ward) 毎の特性と TH 区立図書館の配置

5-1-2. Tower Hamlets 区の商業集積や公共交通拠点と Idea Store の配置

1998年に実施されたTH区の住民意向調査^{注2}では、区民が他施設の利用、特に買物のついでに図書館を利用したいこと、また図書館に情報の提供だけでなく教育面の支援をより求めていることが確認された。そこで、TH区は1999年にISの開設に向けた最初の戦略書であるIS戦略1999を発表し、住民が徒歩20分で到達でき、商店街や屋外マーケットなど商業集積のある場所の近く、かつ公共交通によりアクセスしやすい場所にISを配置する計画を示した。この方針に従って、ISB、ISCS、ISW、ISCWが順次開館した。特に、PTALs^{注3}によればISWは公共交通の利便性がTH区の中で最も高い場所に立地している(図5-3)。

注2 住民意向調査の実施およびその結果の概要はIS戦略1999を参照した。この調査は当時イギリスで行われた最も包括的な公共図書館の調査分析の一つと評され、その結果からISの創設につながる考えが生まれたとされる。

注3 PTALs(Public Transport Accessibility Levels)はイギリスにおいて、公共交通の利用しやすさを評価する指標。利用できる公共交通機関までの徒歩距離などを評価基準とし、1から8までの指標レベルを用いる。

5-1-3. Tower Hamlets 区 の Opportunity Area および Town Centre と Idea Store の配置

TH区はIS戦略2009において、今後はTown Centreに公共施設を集中させるTH区の空間計画であるLDFに基づいて図書館を配置する方針を示した。2004年のロンドン・プランで指定されたTH区のTown Centreは、① Bethnal Green、② Crisp Street、③ Poplar、④ Whitechapel、⑤ Roman Road East、⑥ Watney Market、⑦ Canary Wharfの7つであったが、2008年のロンドン・プランではCrossharbourもTown Centreに追加された(図5-4)。また、2009年のTH区のインフラ整備計画書であるIDPでは、5番目のISを開館させるために4つの候補地(Crossharbour、Watney Market/Shadwell、Bethnal Green、Bromley-by-bow)が挙がり、結果として2013年5月にTown CentreであるWatney Marketに5番目のISとなるISWMが開館した(図5-4)。

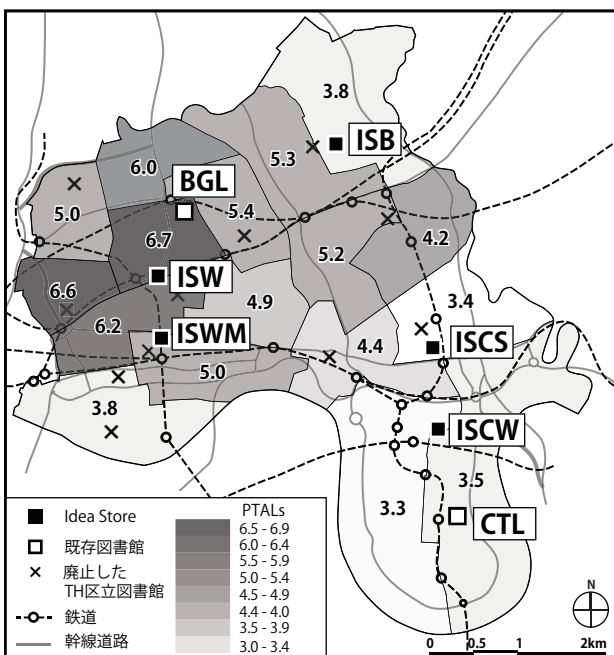


図5-3 PTALsに基づくTH区の公共交通アクセスビリティ(2012)

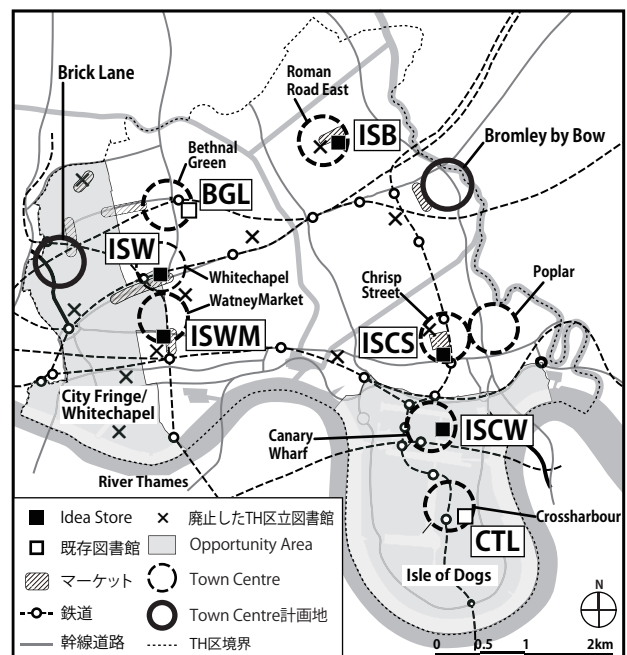


図5-4 TH区立図書館配置と各種将来計画

5-1-4. 公立学校の再整備と Idea Store の関係

IS 戦略 2009 では図書館を Town Centre に配置し、TH 区は図書館と学校の連携をさらに展開することを求めていた※ 1。これに対して、TH 区では Building Schools for the Future (BSF) と Primary Capital Programme (PCP) というイギリスの小・中・高等学校の物理的再整備を行うプログラムに従い、特に PCP によって 2010 年から 2011 年に Town Centre に近い 8 つの小学校を新築、増築、改修により再整備して、連携強化を支援した (図 5-5、5-6)。

※ 1 Tower Hamlets Council: Idea Store Strategy, p46, 2009

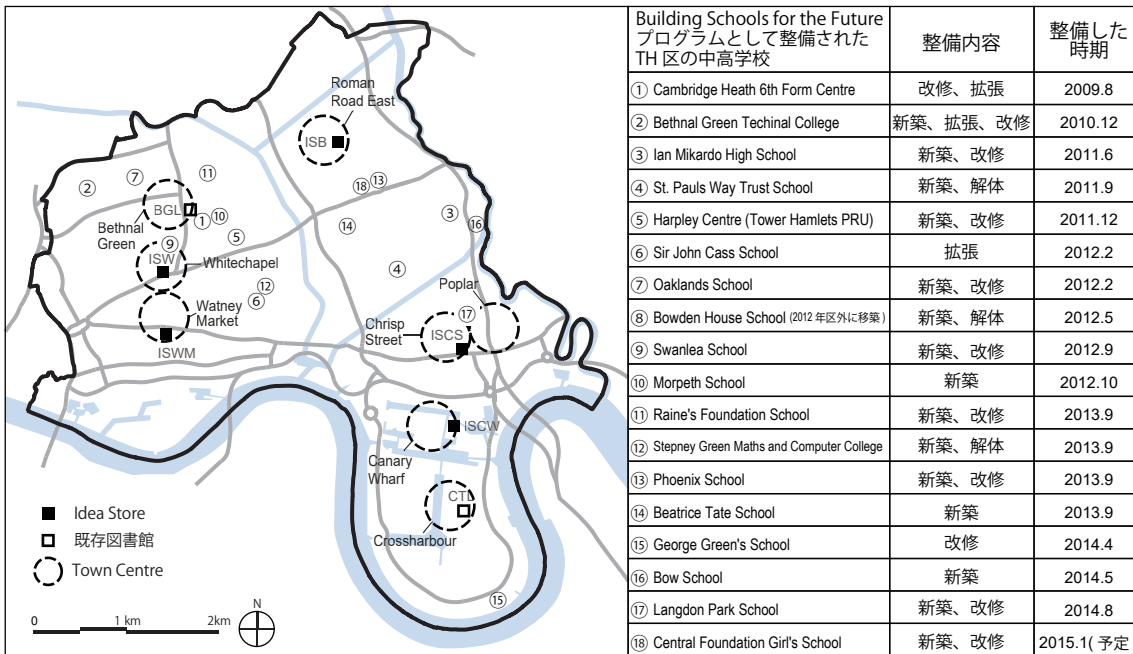


図 5-5 BSF として整備された TH 区の中高等学校

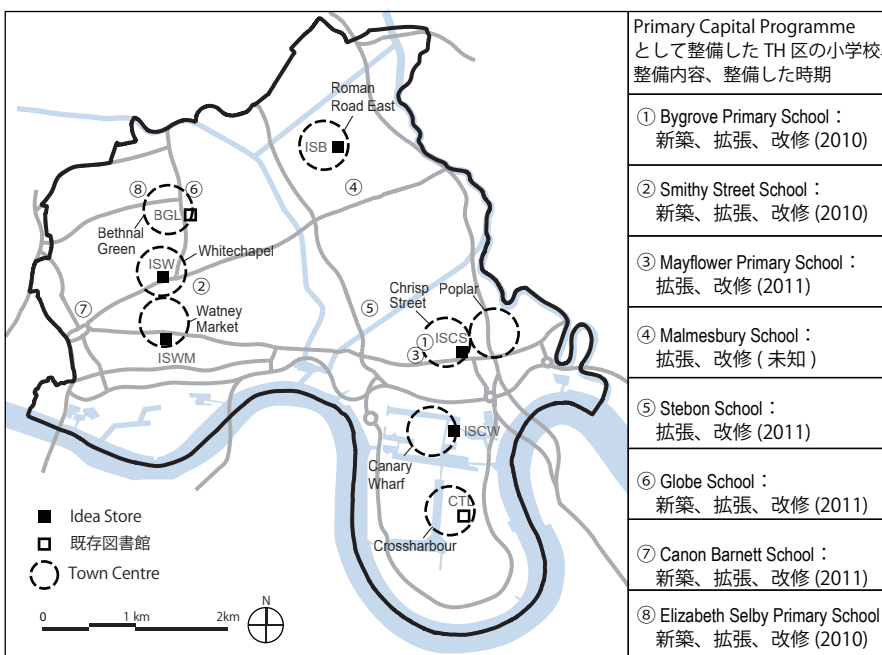


図 5-6 PCP として整備された TH 区の小中学校

5-1-5. 今後の Idea Store の配置

2012 年の IDP では既に着手された ISWM の建設を踏まえて、今後の IS を配置させる候補地として① Bishopsgate Godds Yard/Brick Lane、② Broomley-by-Bow、③ Wood Wharf/Canary Wharf、④ Crossharbour が取り上げられた。その内、Canary Wharf と Crossharbour は TH 区の既存の Town Centre であるが、Brick Lane と Bromley-by-bow は今後の TH 区の Town Centre として戦略的に計画されている場所であることが「Town Centre Spatial Strategy to 2025」¹⁾において確認できる(図 5-7)。つまり、今後の IS の配置も Town Centre をベースに公共サービスを提供する都市・地域計画に基づいて実施されていくと考えられる。

1) Tower Hamlets Council : London Borough Tower Hamlets Town Centre Spatial Strategy to 2025, 2009.7

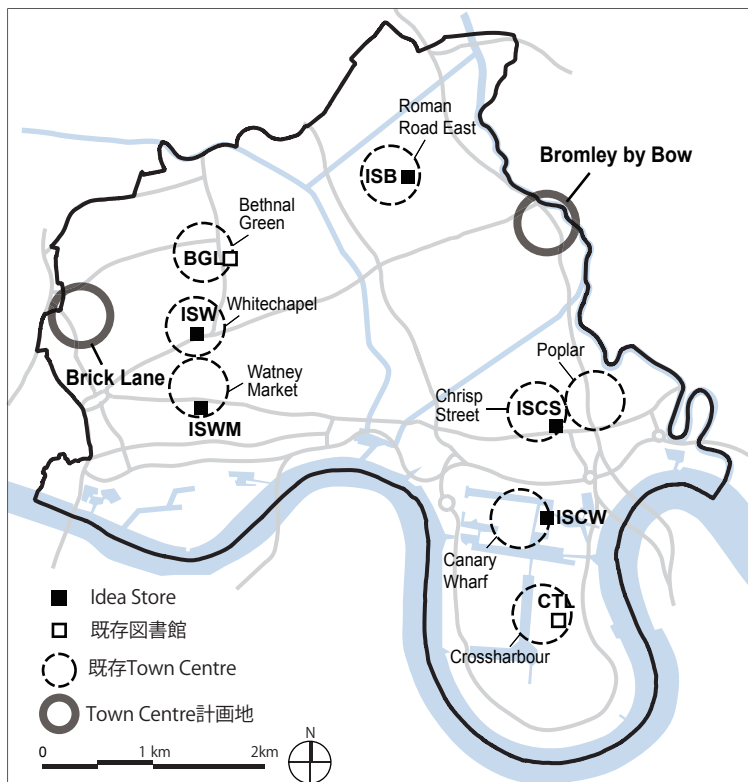


図 5-7 TH 区の既存 Town Centre と計画中の Town Centre

5-2. Idea Storeの立地と建築空間の概要

各ISの蔵書数と建物の概要を表5-1に整理した。IS 5館の規模はISWが3,700m²で8.2万冊と最も大きく、ISCSが1,000m²弱で3.4万冊と最も小さい。その他のISは1,300m²前後で4～5万冊である。ISの建築空間については、ISBとISCSは増築も伴う既存建物を改修して整備されているが、その他は新築の建物である。ただし、ISCWは複合ビルにテナントとして入居している。このような違いが生まれている理由の一つとして、立地や周辺の地域特性を重視したためと考えられる。

5-2では、各ISの立地と建築空間の特性を詳述するが、共通して、ブックディテクションシステム（Book Detection System。以下BDS）は建物入口に設置されている。開館日については、ISは平日だけでなく週末も開館している。開館時間は館毎に若干異なるが、ISWを例に挙げると、開館時間は月～木曜日は9時～21時、金曜日と土曜日は9時～18時、日曜日は11時～17時となっている。

表5-1 ISおよびTH区立図書館の建築概要

| 図書館 | 開館年 | 延床面積 (m ²) | 蔵書数(点) (2012.3現在) | 年間貸出数 (2012年度) ^{※1} | 年間訪問者数 (2013年度) ^{※2} |
|---------------------------------|----------|---------------------------|----------------------|---------------------------------|----------------------------------|
| Idea Store Bow(ISB) | 2002(改修) | 1,350 | 42,273 | 131,748 | 286,958 |
| Idea Store Chriss Street (ISCS) | 2004(増築) | 1,240 | 53,695 | 157,366 | 431,600 |
| Idea Store Whitechapel (ISW) | 2005(新築) | 3,700 | 82,380 | 253,813 | 689,381 |
| Idea Store Canary Wharf (ISCW) | 2006(新築) | 940 | 33,927 | 124,985 | 298,055 |
| Idea Store Watney Market (ISWM) | 2013(新築) | 1,270 | 21,463 | 87,896 | 319,652 |
| Bethnal Green Library (BGL) | (既存図書館) | (不明) | 42,980 | 96,224 | 147,184 |
| Cubitt Town Libray (CTL) | (既存図書館) | (不明) | 24,784 | 66,106 | 75,422 |

※1 ISWMについてはその前身であるWatney Market Librayのデータ。

※2 ISWMについては開館した5月以降のデータ。

5-2-1. Idea Store Bow

【立地】

ISB は TH 区の東北にある選挙区 Bow East に位置し、小さい店舗が並んでいる商店街 Roman Road East 沿いに立地している。公共交通機関から少し離れているが、近くに新しいスーパーマーケット Tesco Metro が現在建設中である。今までの Bow には大きい買物先がなく、住民たちは遠いスーパーまで出かけないと行けなかったが、この新しいスーパーの建設により、多くの住民が買物で Roman Road に集まると考えられる。さらに、これは ISB のついで利用も促進することが期待できる (図 5-8)。

【建物構成】

ISB は 2002 年に一番最初に開館した IS であり、3 階建ての既存建物の 1 階のインテリアを改装して図書館として利用している。建物は図書館と One Stop Shop という 2 つの空間からなる。それぞれに専用玄関が設けられ、建物の内部では繋がっていない。

商店街沿いに立っている ISB では、図書館の玄関ホールにカフェが設けられ、読書や本の貸出を目的としない来訪者もアクセスしやすい空間になっている。特に、昼には高齢者たちが集まって多く滞在していることが見られた。建物の南側に奥行き長い閲覧室が配置され、その奥に子どもの図書スペースが設置されている (図 5-9)。

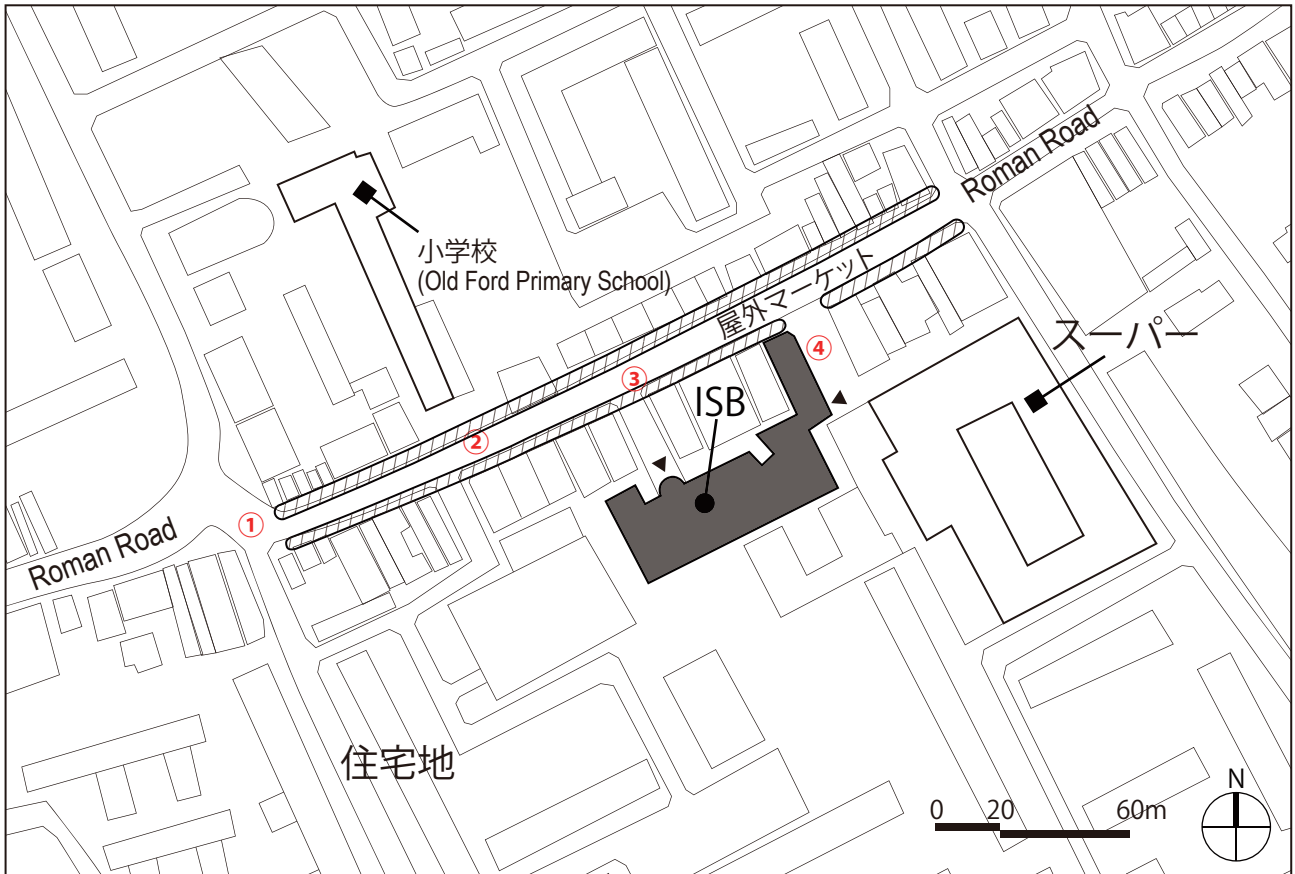


図 5-8 ISB の配置図



① 商店街であるRoman Road



② 道路沿いに設置された屋外マーケット



③ 屋外マーケットには地元の住民が野菜や果物またエスニック食品などを販売している。



④ ISBの図書館玄関前のオープンスペース

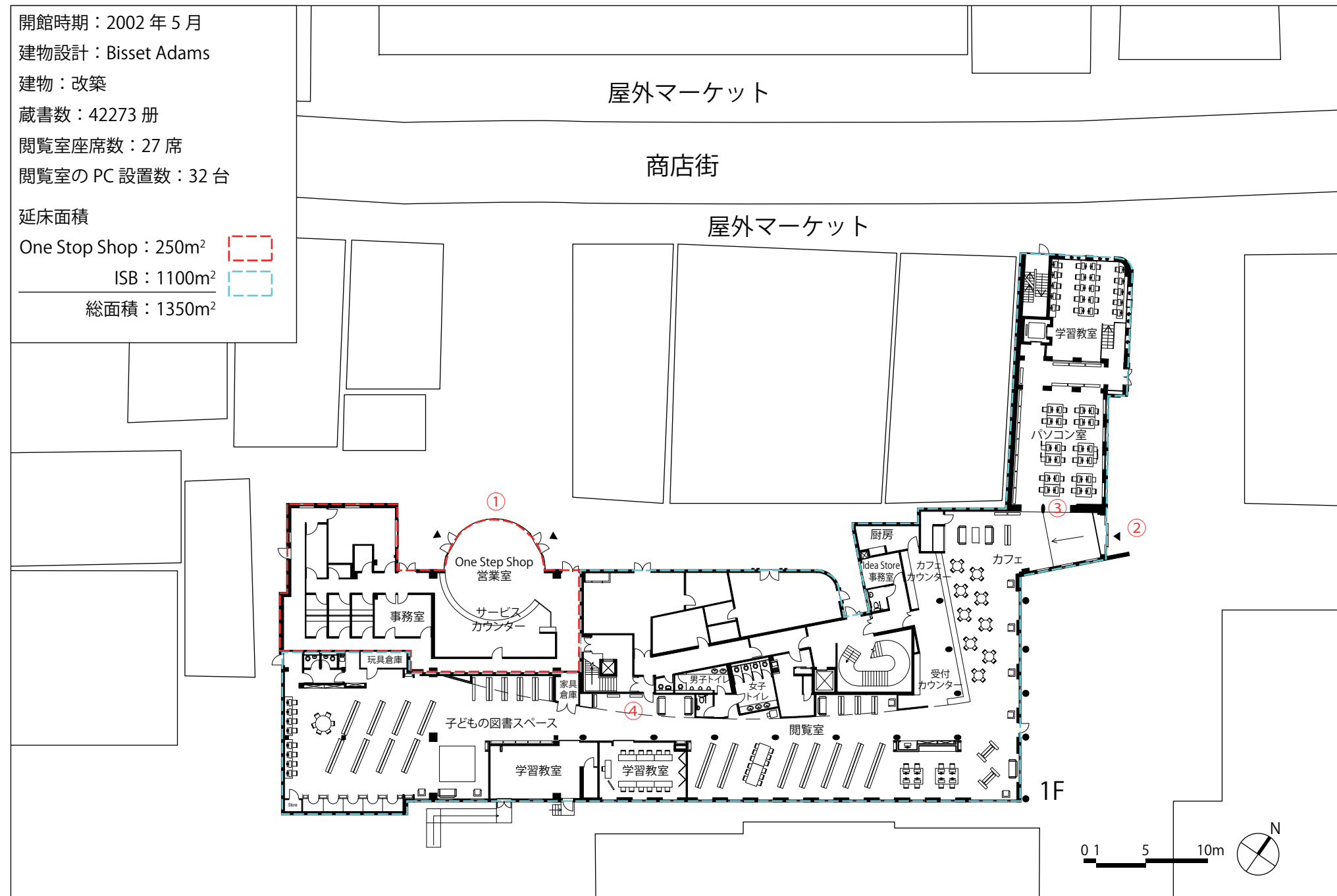


図 5-9 ISBの平面図



① One Stop Shopの専用玄関



② ISBの図書館玄関



③ ISBのPC室とその奥にある学習教室



④ ISBの鮮やかな色を使ったインテリア・デザイン

5-2-2. Idea Store Chrisp Street

【立地】

ISCSはTH区の東部にあるLansbury選挙区(元East India and Lansbury Ward)に立地している。ここはTower Hamletsの中で最も移民が多く、収入が低い住民が多いエリアである。

しかし、ISCSは現在、ISWの次に最も来訪者が多い図書館である。

ISCSの建物はDocklands Light Railway(以下DLR)の駅であるAll Saints駅から100mほど離れ、公共交通機関を利用によってアクセスしやすい場所に立地している。また、北には屋外マーケットであるChrisp Street Marketがあり、買物のついでに図書館を訪ねる利用者が多いと考えられる。その他、ISCSの近くには小学校が多く、さらに定収入家庭の就学前の子どもに対して育児・保育の支援サービス提供する子どもの施設Sure Start Children's Centreがあるため、子どもの利用者も多いと考えられる(図5-10)。

【建物構成】

ISCSの建物はエスニック商品を販売する小店舗が並ぶ建物の端部に増築されたものである。建物の全面には緑色と青色の垂直ガラス帯が交互に張られたファサードデザインが採用され、カラフルな外壁が外部からの視認性を高めている。

建物の1階に子どもの図書スペース、2階に閲覧室と学習コースを行う学習教室が設置されている。特に2階ではトイレ、階段や学習教室を住宅地に面する西側に配置し、閲覧室を商店街沿いに配置させる空間構成になっている。これは従来の図書館建築デザインにおいて閲覧室の静粛を極力確保する平面計画とは異なる設計行為である。つまり、ISの閲覧室では読書だけではなく、人びとの会話やコミュニケーションの活動も促していると考えられる(図5-11)。

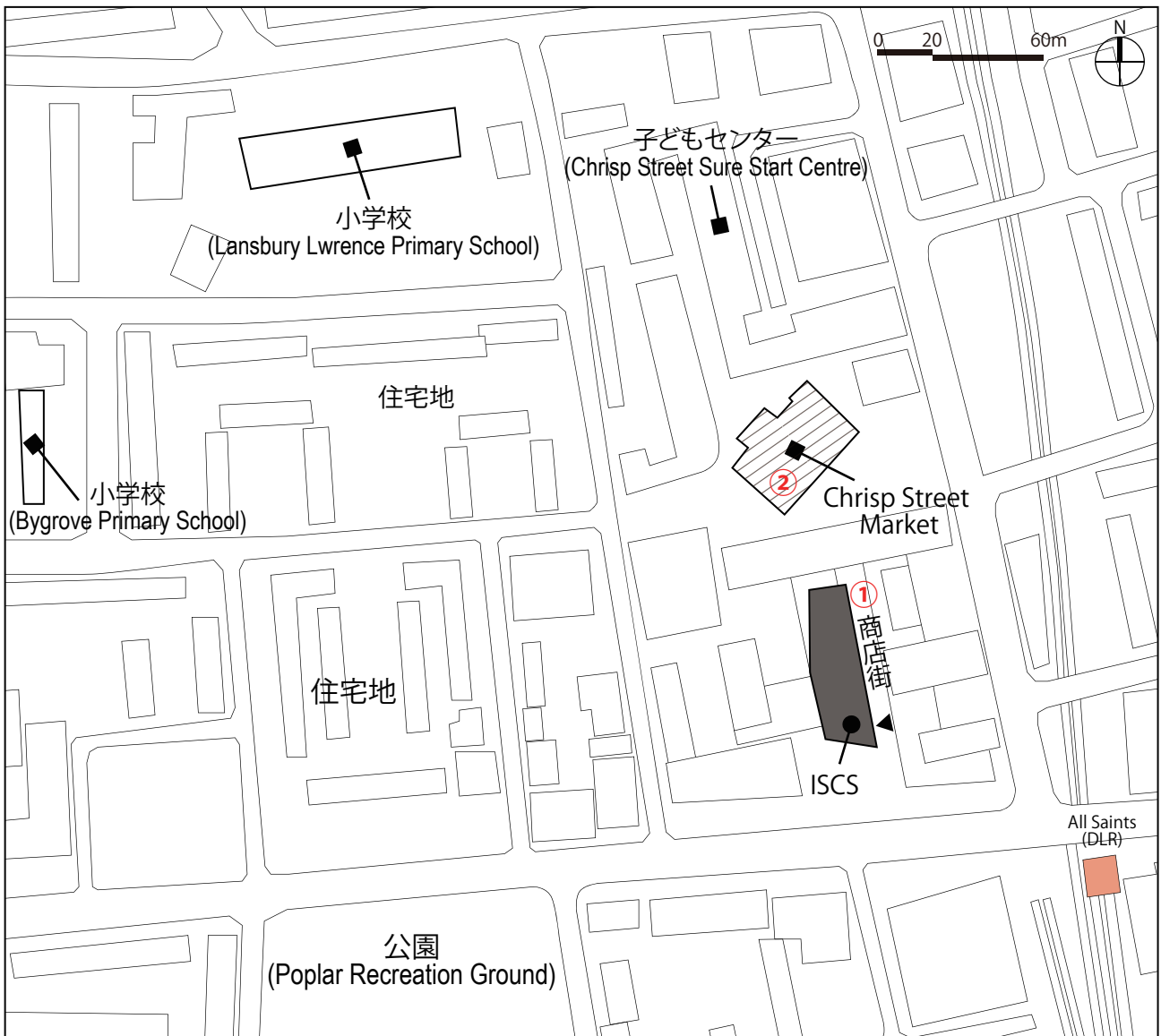


図 5-10 ISCS の配置図



① ISCSが面している商店街



② 近くの屋外マーケットChrip Street Market

開館時期：2004年7月 蔵書数：53695冊
 建物設計：Adjaye Associates 閲覧室座席数：43席
 建物：改築 閲覧室のPC設置数：32台
 延床面積：1240m²



① 商店街を面する閲覧室



カラフルな外観を持ち、認識性が高いISCS

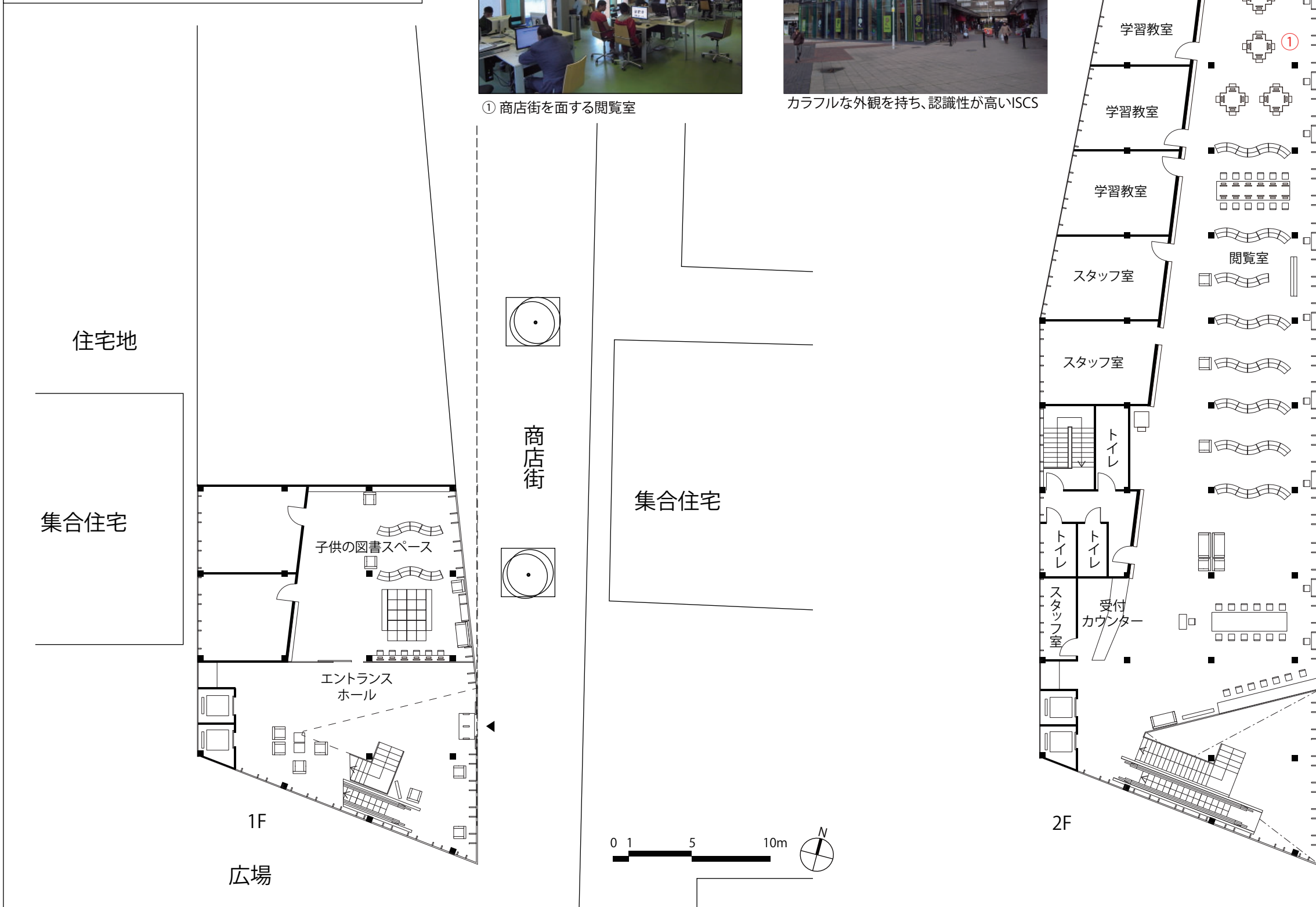


図 5-11 ISCS の平面図

5-2-3. Idea Store Whitechapel

【立地】

ISWが立地するWhitechapelはロンドンの中心部と東部を接続する結節点であり、3つの地下鉄線が通っており、公共交通がとても便利なエリアである。さらに、ロンドンの東西をつなぐ新しい鉄道線Crossrailの駅もWhitechapelに建設される予定である。

Whitechapelを東西に貫く幹線道路であるWhitechapel Roadには主にエスニック商品を販売する屋外マーケットであるWhitechapel Street Marketが毎週の月曜日から土曜日までに開催されている。また、Whitechapel駅から東に400mほど離れて場所にイスラム教の礼拝堂であるThe London East Mosqueがあり、毎週にイギリスで最大人数の礼拝者がそこに集まる。

その他、ISWの近くには大規模なスーパーSainsbury'sがあり、買物のついでに図書館を訪ねる利用者が多いと考えられる(図5-12)。

【建物構成】

ISWはISの中で最も規模が大きい図書館であり、提供プログラムも一番充実している図書館である。Whitechapel Roadに面する建物の正面にはISCSと同じく緑色と青色の垂直ガラスが交互に張られ、さらに、Idea Storeという大きい看板も張られている。

建物は5階建てになっており、真ん中に機械室や水回りや階段で構成されたコアを配置し、その周りに閲覧室や学習教室を配置させた。垂直動線を実現しているのはコアにある階段だけではなく、建物の正面に設置されたエスカレーターもあり、1階から3階まで続いている。

ISWには読書をする図書館の閲覧室だけではなく、1階に子どもの図書スペース、2階に情報センター、5階にカフェ、各階に学習教室などが設置されている。特に2階の情報センターはWhitechapel地域の空間計画を展示する場所であり、地域の将来像を示すポスターや模型などが展示されている。つまり、ISは過去の文献や情報を所蔵する図書館機能を乗り越えて、「まちの将来」を地域住民とともに展望し、共有している(図5-13)。

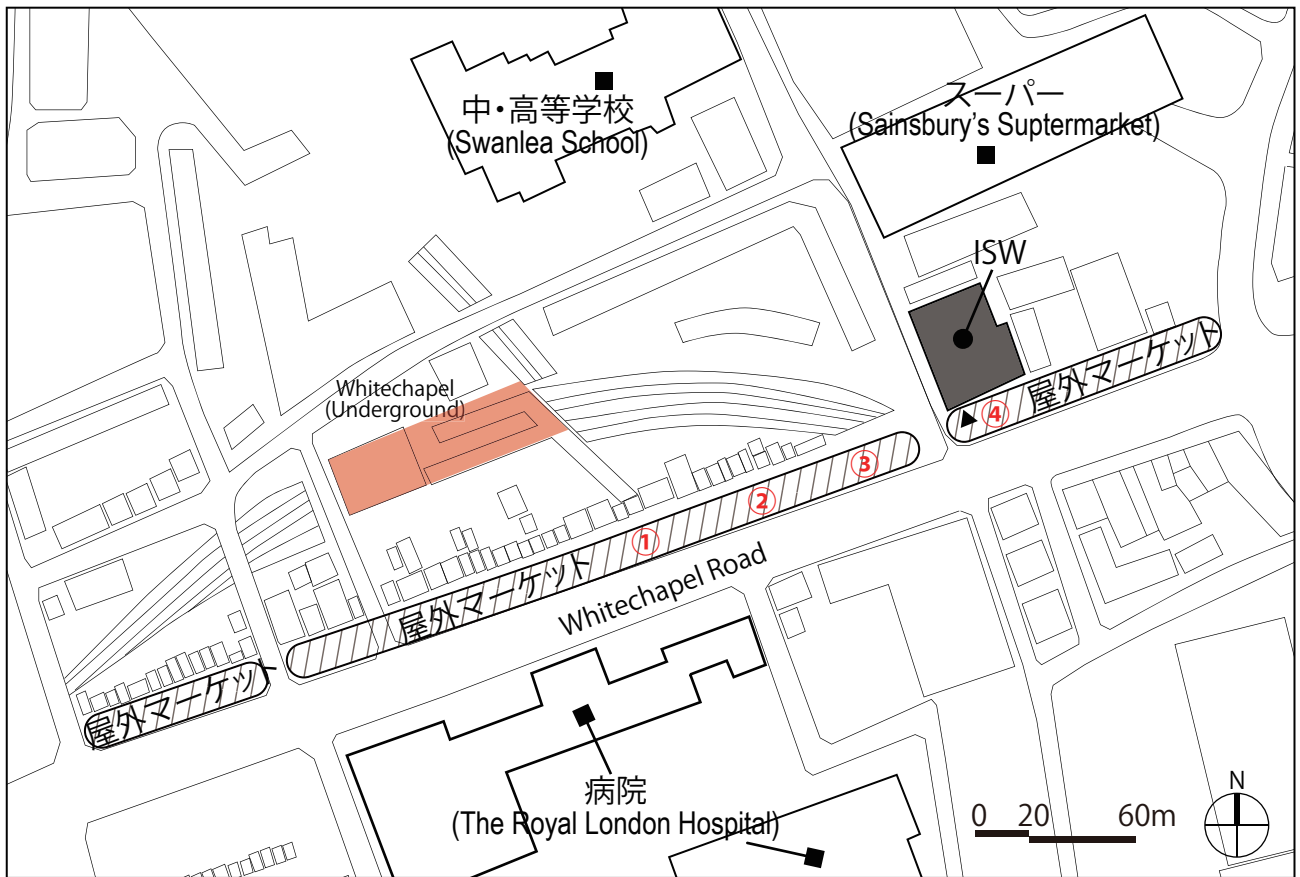


図 5-12 ISW の配置図



① Whitechapel駅の出口



② 商店街沿いに設置されているオープンマーケット



③ マーケットから見えるISWの建物



④ ISWの玄関前に並んでいるオープンマーケット

開館時期：2005年9月
 建物設計：Dearle & Henderson
 建物：新築
 延床面積：3700m²

蔵書数冊：82380冊
 閲覧室座席数：133席
 閲覧室のPC設置数：55台

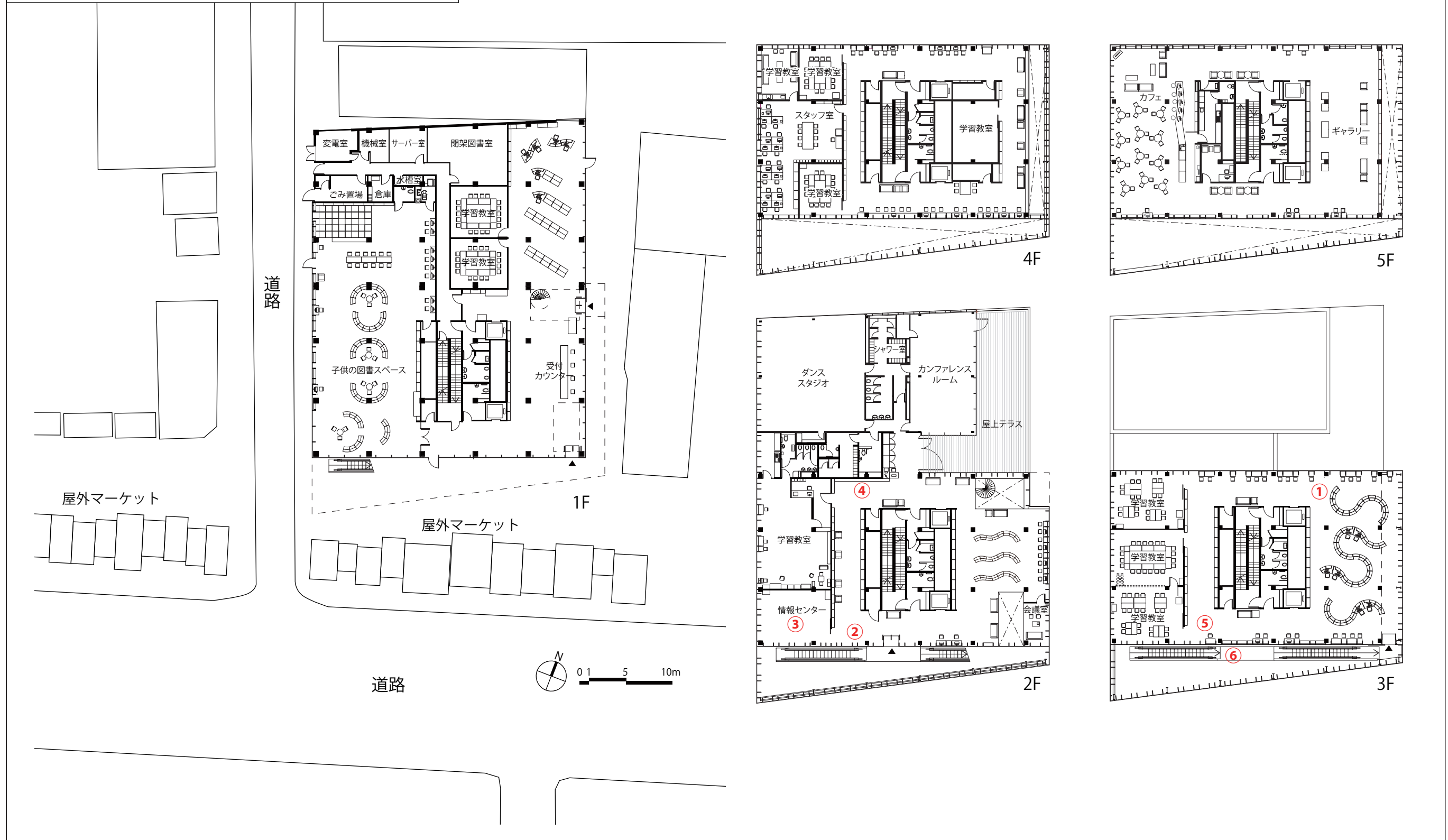


図 5-13 ISW の平面図



ガラス張りでカラフルな外観



① 水回りや階段で構成された建物のコアを囲む閲覧室



② Whitechapel地域の都市計画を展示するISWの情報センター



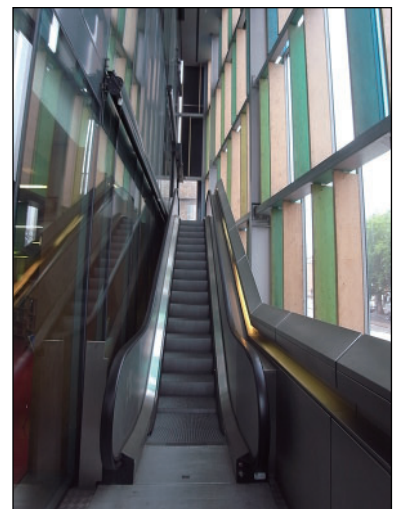
③ 情報センターに展示されたWhitechapel地域の未来像を示す模型



④ ファッションデザインの学習コースの内容を紹介するショーケース



⑤ 英語以外の言語の図書を配架した本棚



⑥ 3階まで続く建物の正面のエスカレータ

5-2-4. Idea Store Canary Wharf

【立地】

Canary WharfはCity of Londonの次にあるロンドンの金融街であり、超高層のオフィスビルや大規模なデパートが多く立ち並ぶビジネス・エリアである。そこで、ISCWはショッピング・モールであるChurchill Placeの中に配置され、商業施設の中で公共サービスを提供している(図5-14)。

【建物構成】

ISCWはChurchill Placeの半円形のエントランスホールに配置されている。エントランスホールにあるスターバックスのカフェではコーヒーを飲みながらISCWの本を読んでいる人もいた。

ISCWの玄関から入るとすぐソファが置いてある閲覧室があり、そのスペースを歩いて中に入り続けると、本棚が並べられた場所の隣に学習室が配置され、図書館の一番奥に子どもの図書スペースがある。

ヒアリングの時に受領した資料によると、ISCWの利用者の37%は本を借りるため、35%はコンピューターを使用するために図書館を利用している。これは、ISCWの次にコンピューター使用を目的とする利用者が最も多い図書館である。ISCWの閲覧室には読書できる椅子と机だけではなく、コンピューター端末にアクセスできる座席も多く整備されている。つまり、ISCWでは図書館利用者の来訪目的に対応した空間整備が行われたことだと言えよう(図5-15)。



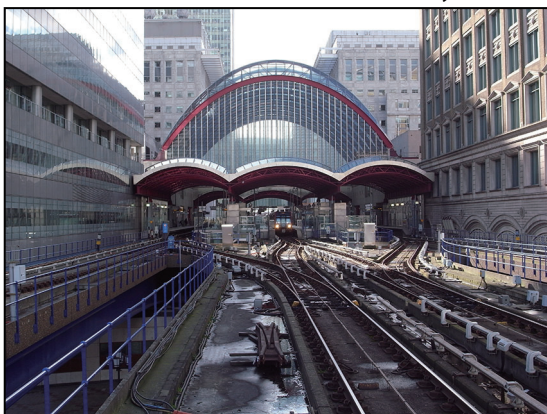
図 5-14 ISCW の配置図



超高層オフィスビルが立ち並ぶCanary Wharf



① 川沿いのショッピングモールであるChurchill Placeの中に位置するISCW



② 近くにあるDocklands Light Rialway(DLR)の駅 Canary Wharf



③ 近くにある地下鉄駅であるCanary Wharf

開館時期：2006年3月
 延床面積：940m²
 閲覧室座席数：55席
 建物設計：Adjaye Associates
 蔵書数冊：33927冊
 閲覧室のPC設置数：20台
 建物：新築

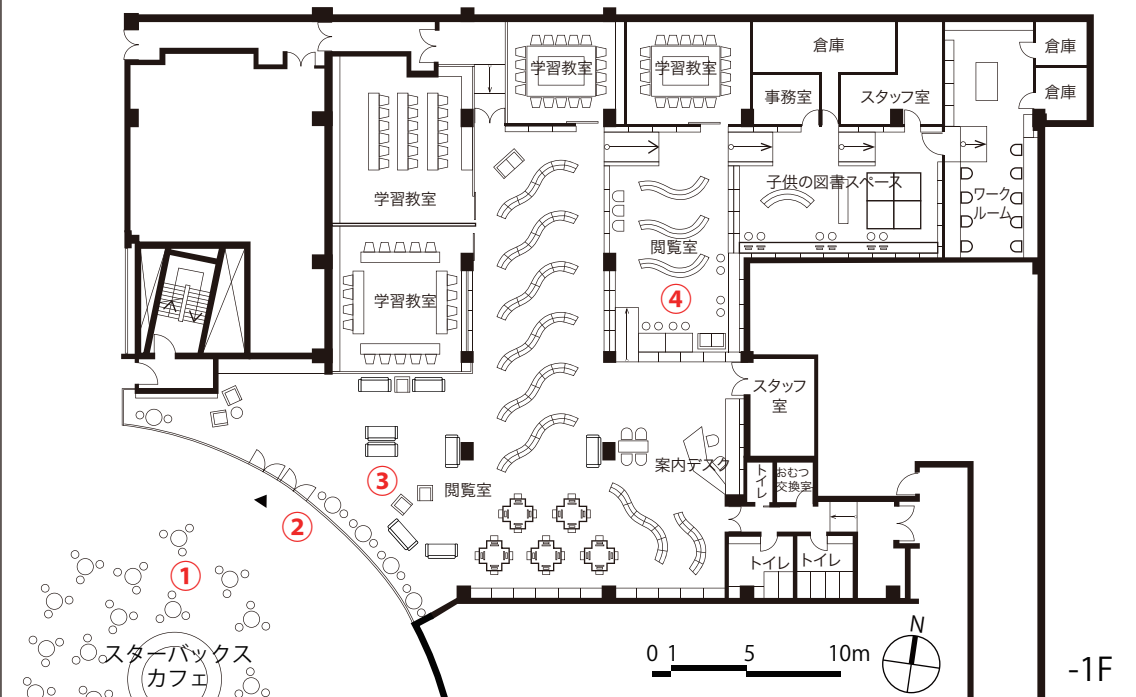


図 5-15 ISCW の平面図



① ISWが面するショッピングモールのエントランスホールにあるスターバックス、そこにはコーヒーを飲みながらISCWの本を読んでいる人もいる。



② ショッピングモールの中に立地するISCW



③ ISCWの閲覧室のソファ



④ 閲覧室の本棚と一緒に配置されているPC

5-2-5. Idea Store Watney Market

【立地】

ISWMはTH区の西南にあるShadwell選挙区に立地し、幹線道路であるCommercial Road沿いに建っている。図書館から南に300mほど離れた場所に南北に走る鉄道(Overground)と東西に走るDLRのShadwell駅があり、ここは公共交通を利用してとてもアクセスしやすい場所に立地している(図5-16)。

近くの屋外マーケットであるWatney Marketには旧Watney Market図書館があったが、2013年に閉館され、その代わりにマーケットの北入口に現在のISWMが新築された。

【建物構成】

3階建てのISWMでは1階にOne Stop Shop、2階に子どもの図書スペースが配置され、学習教室は設けられていない。ISWMはISの中で唯一に学習教室が整備されていない図書館である。現在、ISWMで提供する学習コースはわずかしかないが、主に3階の閲覧室で行っている(図5-17)。

ISWMでは静かな住宅地に面する南側にトイレや階段が配置され、Commercial Roadの道路に面する北側に閲覧室が配置された。これは建築設計者が異なるISCSの平面計画と同様の考え方である。つまり、ISCSとISWMを見ると、ISは従来の図書館にある静粛な閲覧室ではなく、会話や人びとのコミュニケーションを促す閲覧室を積極的に創出していると言える。



図 5-16 ISWM の配置図



① 屋外マーケットであるWatney Marketの隣に立地するISWM



② 集合住宅の下に並べられた屋外マーケットであるWatney Marketでは主にエスニック商品を販売する。

開館時期：2013年5月
 蔵書数冊：47378冊
 建物設計：Bisset Adams
 閲覧室座席数：100席
 建物：新築
 閲覧室のPC設置数：19台
 延床面積：1270m²



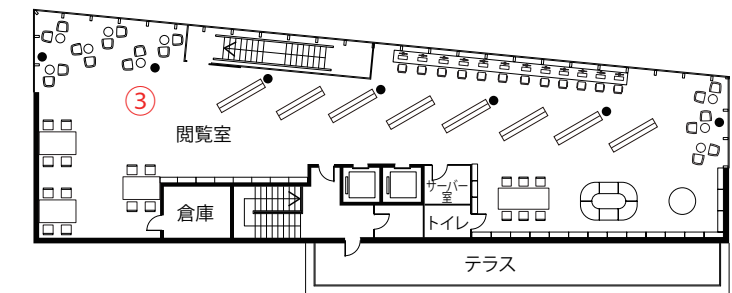
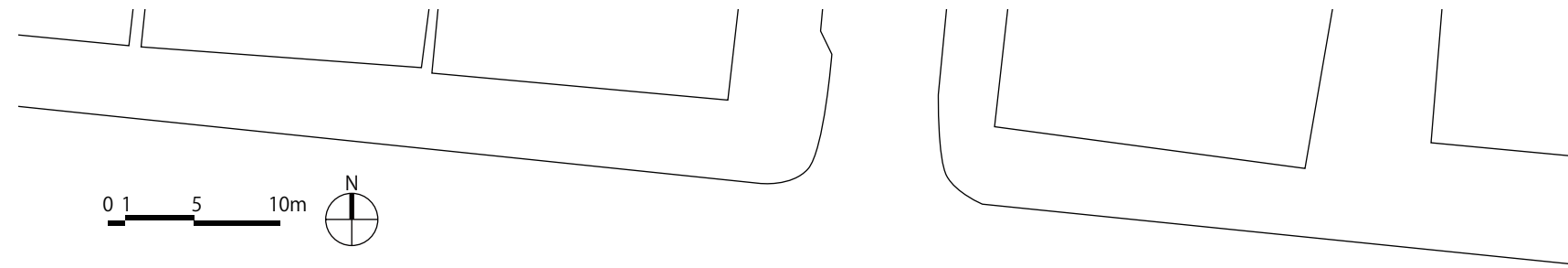
① ISWMの1階にあるOne Stop Shopの待合室



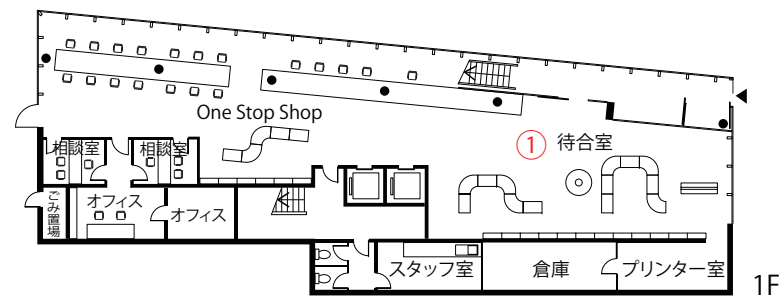
② 2階の閲覧室



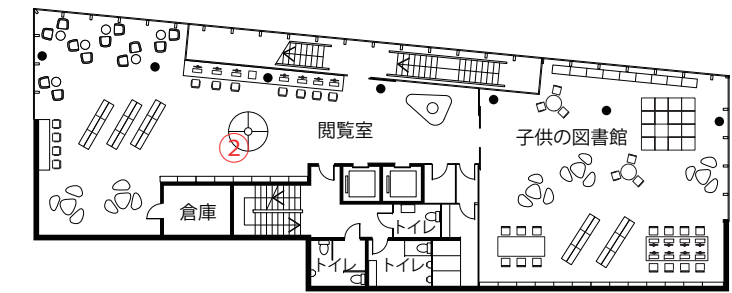
③ 外を眺めながら読書やPCで作業をする利用者



3F



1F



2F

住宅地

集合住宅

集合住宅

屋外マーケット

図5-17 ISWMの平面図

5-3. 利用者が来館して滞在するためのスペース

2002年から順次に開館したISはイギリスの伝統的な図書館建築とは異なり、ガラス張りの外壁や鮮やか色を使ったインテリア・デザインにより、外部からの認識性を高め、入りやすい空間づくりを行った。館内には、書架が並ぶ読書スペースだけではなく、従来の公共図書館には見られない幾つの空間が整備され、本を借りたり読書をすることを目的としない市民も来館し、滞在できる空間が整備されている。それらは①学習教室、②子どもの図書スペース、③One Stop Shop、④カフェである(表5-2)。ここでは、これらの部屋ごとでその空間的な特徴と整備について分析する。

表5-2 各ISにおける特徴的なスペースの概要

| | 延床面積 (m ²) | 閲覧室 | | ① 学習教室 | | ② 子どもの図書スペース | | | ③ One Stop Shop | ④ カフェ | |
|------|---------------------------|------------|------------|-----------|---------------------------|--------------|------------|---------------------------|-------------------------|------------|---------------------------|
| | | 座席数 (席) | PC数 (台) | 室数 (席) | 合計面積 (m ²) | 座席数 (席) | PC数 (台) | 合計面積 (m ²) | 面積 (m ²) | 座席数 (席) | 合計面積 (m ²) |
| ISB | 1,350 | 27 | 32 | 3 | 112 | 18 | 8 | 180 | 250 | 40 | 72 |
| ISCS | 1,240 | 43 | 32 | 4 | 140 | 11 | 6 | 119 | (なし) | (なし) | (なし) |
| ISW | 3,700 | 133 | 55 | 12 | 650 | 36 | 10 | 345 | (なし) | 55 | 180 |
| ISCW | 940 | 55 | 20 | 4 | 199 | 6 | 6 | 81 | (なし) | (なし) | (なし) |
| ISWM | 1,270 | 100 | 19 | (なし) | (なし) | 29 | 8 | 151 | 407 | (なし) | (なし) |

5-3-1. 学習教室

ISが提供している学習コースはラーニング・ラボ (Learning Lab) と称する学習教室で行っている (表 5-3)。また、会議や講義などの使用目的で有料で部屋を貸出すこともできる。

【部屋の配置と隣接関係】

教室は基本的に図書館の閲覧室の隣に配置され、近くには学習内容と関連する本を並べた本棚が設置されている (図 5-18)。そして、コースの開始は図書館内の音声アナウンサーで知らせられ、コースの参加者は閲覧室で待ち合いをしている。学習教室と閲覧室はほとんど窓のない壁で仕切られ、閲覧室からの視線や音が気にならない静かな空間になっている。なお、ISCWの学習教室だけはガラスで仕切られ、外から中の活動が見える。

【部屋の設備・仕様】

学習教室には椅子、机や投影機などが整備され、家具のレイアウトは学習コースの内容によって変更されている (図 5-19)。

表 5-3 各 IS の学習教室の整備

| | 学習教室の 平均面積 (m ²) | 室数 | 総計面積 (m ²) |
|------|---------------------------------|----|------------------------|
| ISB | 37.3 | 3 | 112 |
| ISCS | 35 | 4 | 140 |
| ISW | 54.1 | 12 | 650 |
| ISCW | 49.7 | 4 | 199 |
| ISWM | 無い | 無い | 無い |

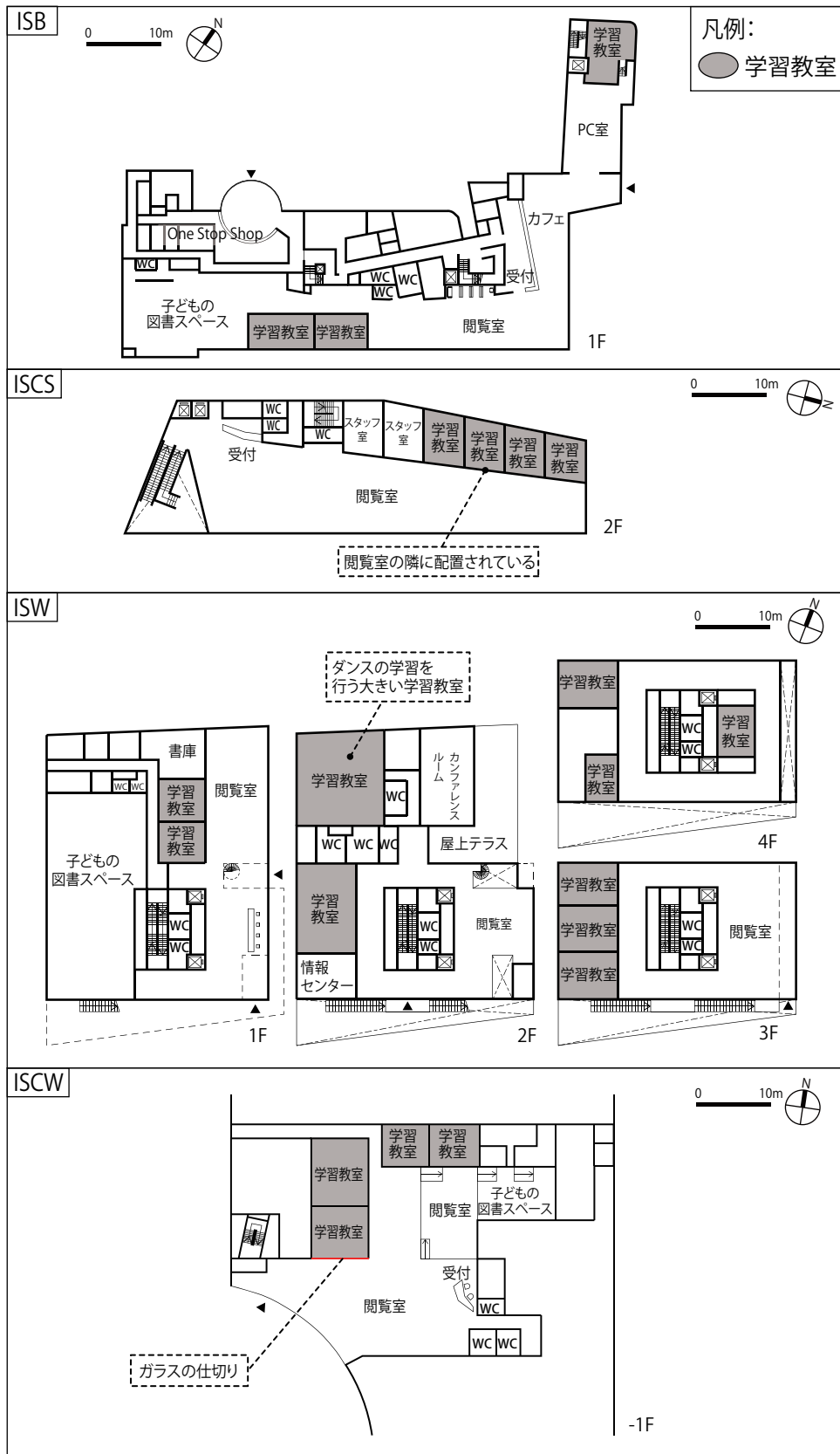


図 5-18 各 IS の学習教室の平面配置

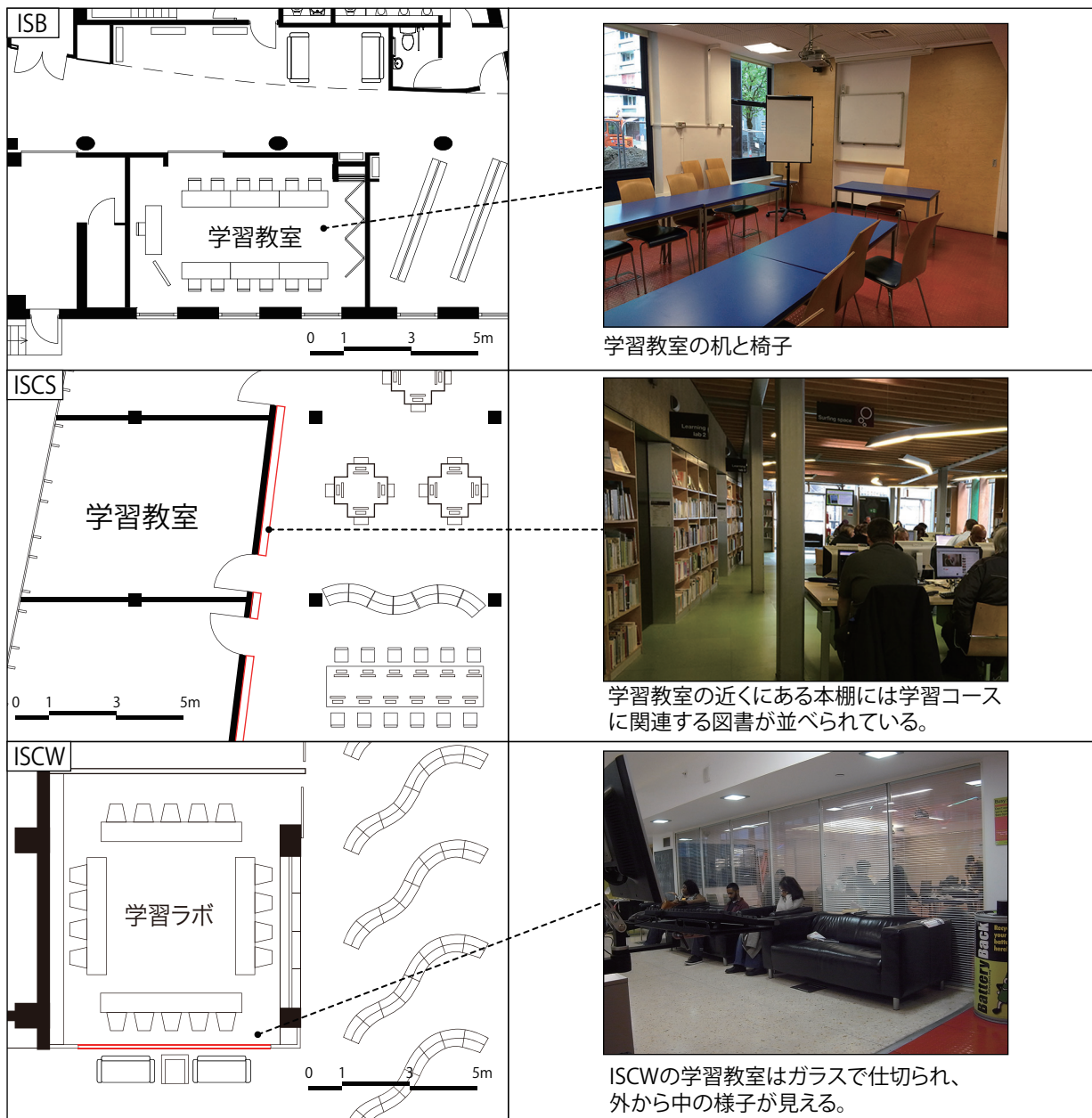


図 5-19 学習教室の設備と仕様

5-3-2. 子どもの図書スペース (Children's Library)

子どもの図書スペースはすべてのISに設けられている(表5-4)。ここでは、子どもが本を読む場所としてだけでなく、子どもが放課後に学校の宿題をしたり、家族で参加する学習教室、絵画教室などの様々な活動やイベントを行う場所となっている。

【部屋の配置】

子どもの図書スペースはISWM以外はアクセスがしやすく、また子どもにとって安全な場所とするためにISの1階の比較的奥に設置され、ISの玄関から子どもの図書スペースまで図書館内を巡るように設計されている。また、ISのスタッフが常駐し、親にとっても安心して子どもを行かせられるようにしている。(図5-20)。

【部屋の設備・仕様】

子どもの図書スペースには子ども向けの図書以外に、電子データを利用して勉強できるコンピューターも整備されている。また、子どもたちが読書するとともに自由に寝転がったり、はいはいできる柔らかいシートが床に敷かれ、カラフルなクッション置かれている(図5-21)。

表5-4 各ISの子どもの図書スペースの整備

| | 子どもの図書スペースの面積(m ²) | 座席数 | 子どものPC設置数(台) |
|------|--------------------------------|-----|--------------|
| ISB | 180 | 18 | 8 |
| ISCS | 119 | 11 | 6 |
| ISW | 345 | 36 | 10 |
| ISCW | 81 | 6 | 6 |
| ISWM | 151 | 29 | 8 |

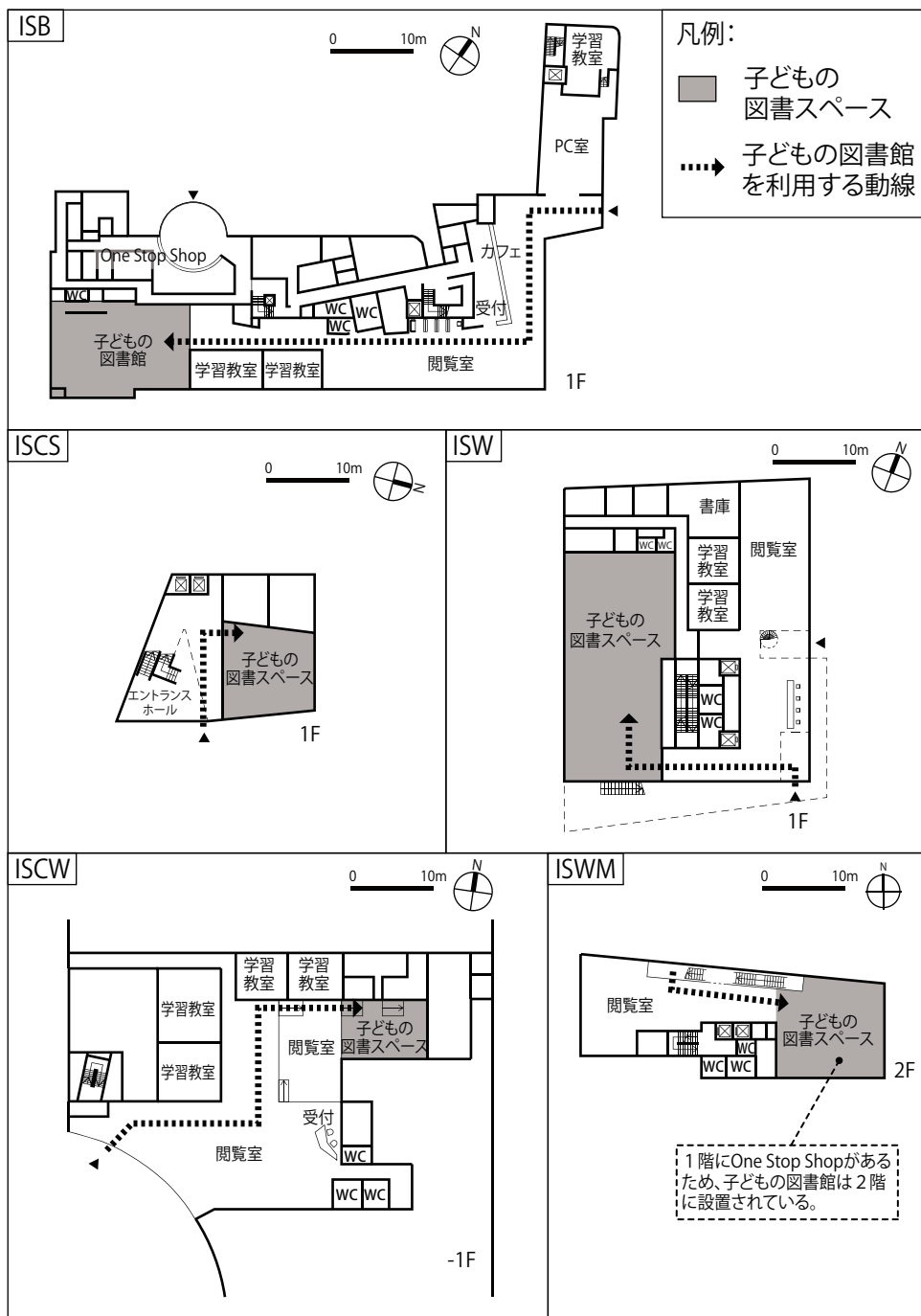


図 5-20 子どもの図書スペースの平面配置

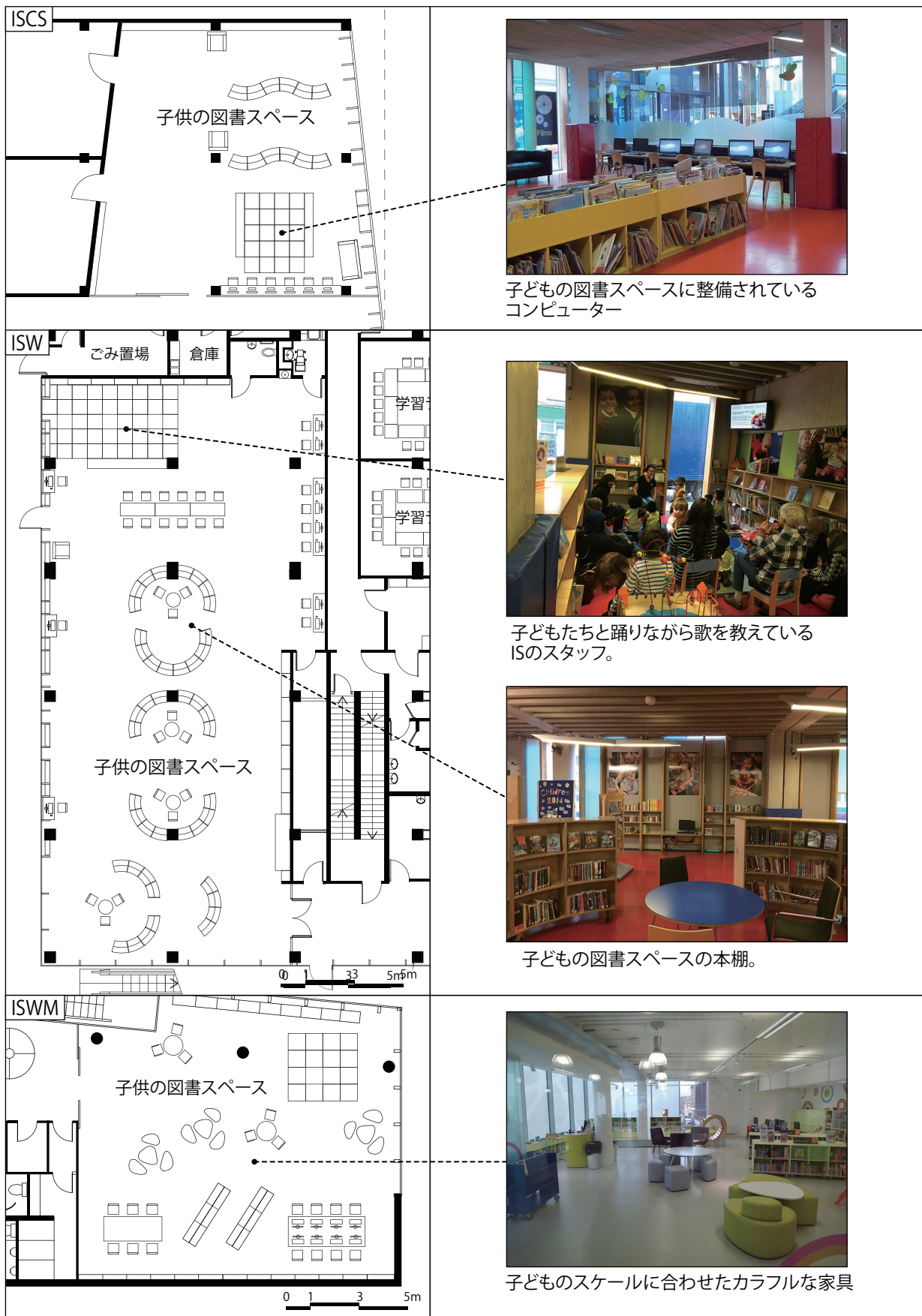


図 5-21 子どもの図書スペースの設備と仕様

5-3-3. One Stop Shop

ISBとISCWの1階にはTH区の行政サービスの窓口であるOne Stop Shop(以下OSS)が整備されている(表5-5)。広く開かれた公共図書館の特性を活かして市民により接近して行政サービスを提供することを目的としている。

【部屋の配置と隣接関係】

ISBではOne Stop Shopの専用玄関が設けられ、建物の内部でも別の空間になっているが、新築のISWMのOne Stop Shopは図書館と玄関を共用している。(図5-22)。

【部屋の設備・仕様】

One Stop Shopには待ち合いスペース、サービス提供の窓口や会議室などが整備されている。ISWMの待ち合いスペースには、本棚や展示品が並べられ、来訪者が図書館の本を読みながら待つことができる(図5-23)。

表5-5 各ISのOne Stop Shopの整備

| | One Stop Shop の面積 (m ²) | サービス提供 の窓口 |
|------|--|---------------|
| ISB | 250 | 不明 |
| ISWM | 407 | 8 |

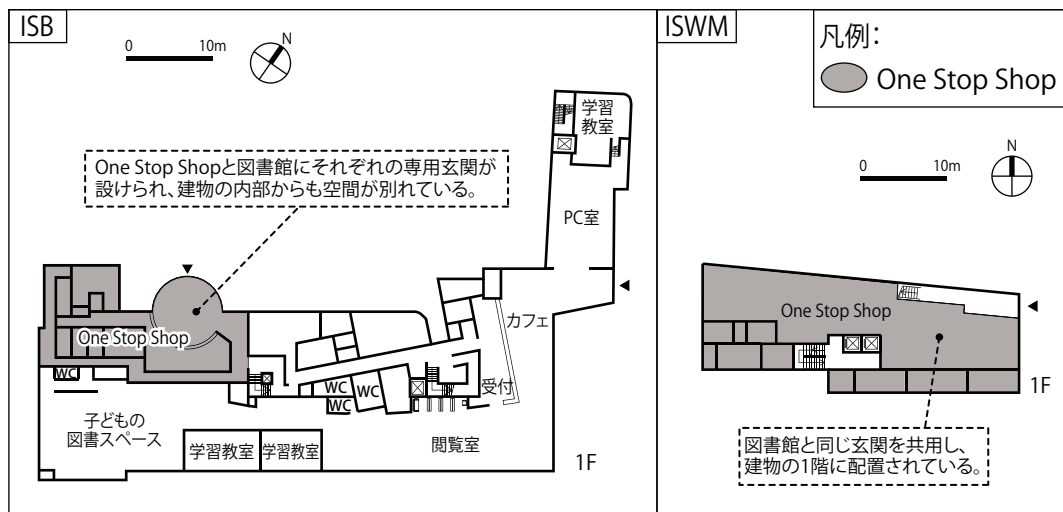


図 5-22 One Stop Shop の平面配置

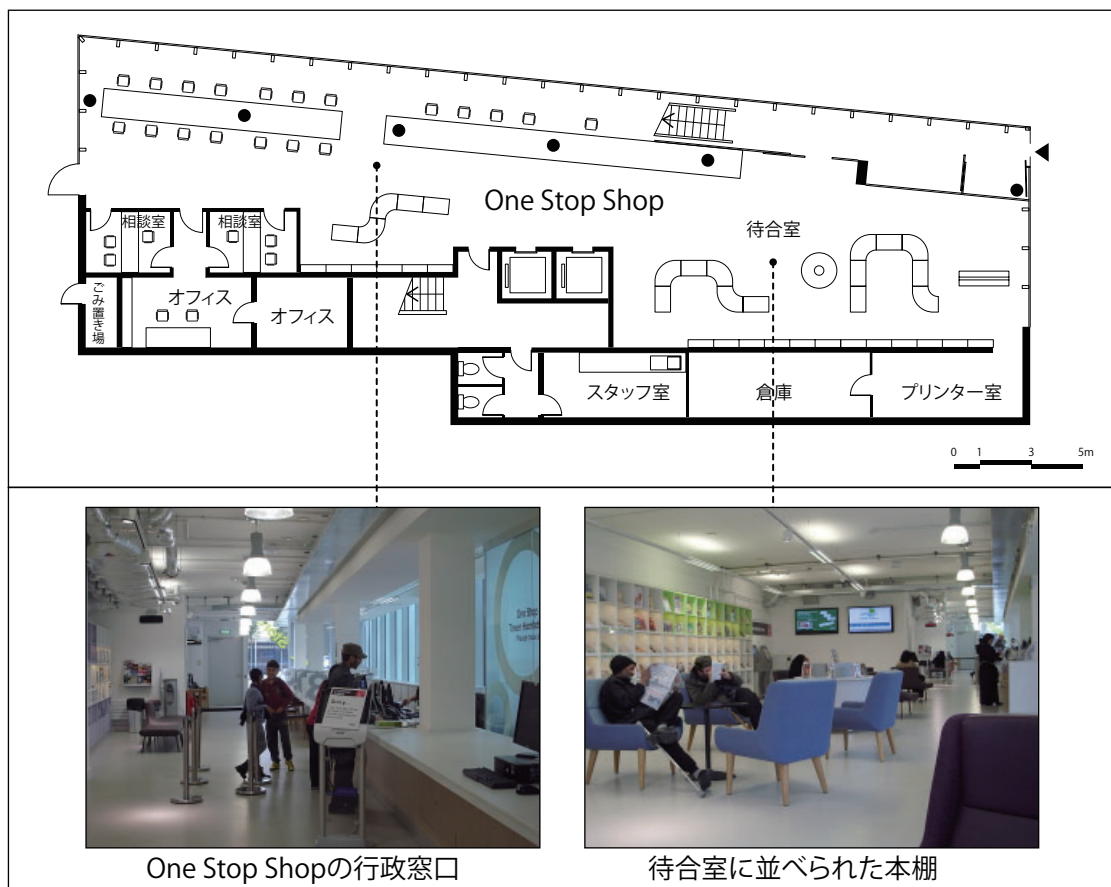


図 5-23 One Stop Shop の設備と仕様

5-3-4. カフェ

ISのカフェはお茶を飲むだけでなく、高齢者の集会などISの定期的なイベントを行う場所にもなっている(表5-6)。

【部屋の配置と隣接関係】

商店街沿いに立地するISBでは玄関を入ってすぐの位置にカフェが設置され、カフェの客席スペースを通過して図書館の受付や閲覧室に向う空間構成をとっている。また、カフェの受付は図書館の受付カウンターと一体的にデザインされている。5階建てのISWでは眺めがよい最上階にカフェが設置されている(図5-24)。

【部屋の設備・仕様】

カフェには丸いテーブルと椅子が並べられているが、ISWのカフェにはソファとテレビを備えた住宅の居間のようなスペースを用意して長時間の滞在も許容している(図5-25)。

表5-6 各ISのカフェの整備

| | カフェの面積(m ²) | 座席数 |
|-----|-------------------------|-----|
| ISB | 72 | 40 |
| ISW | 180 | 55 |

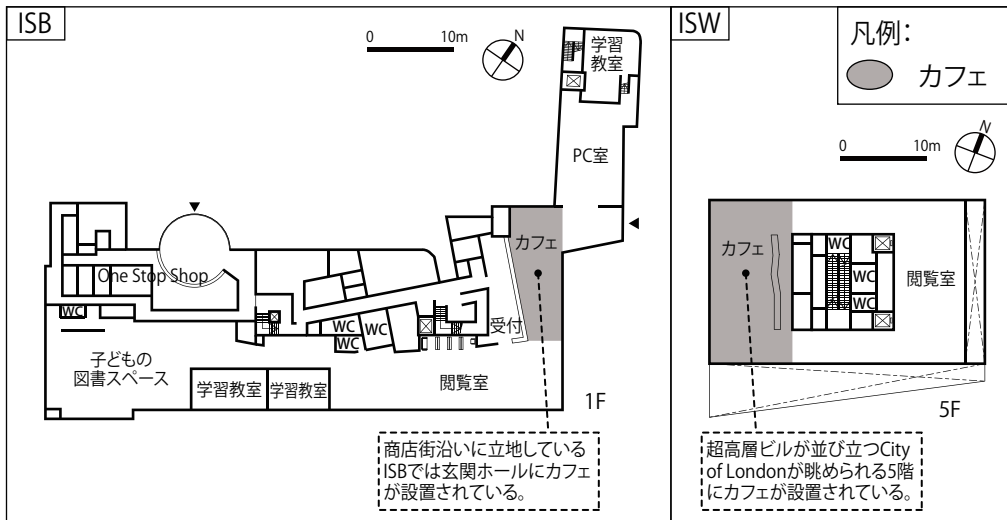


図 5-24 カフェの平面配置

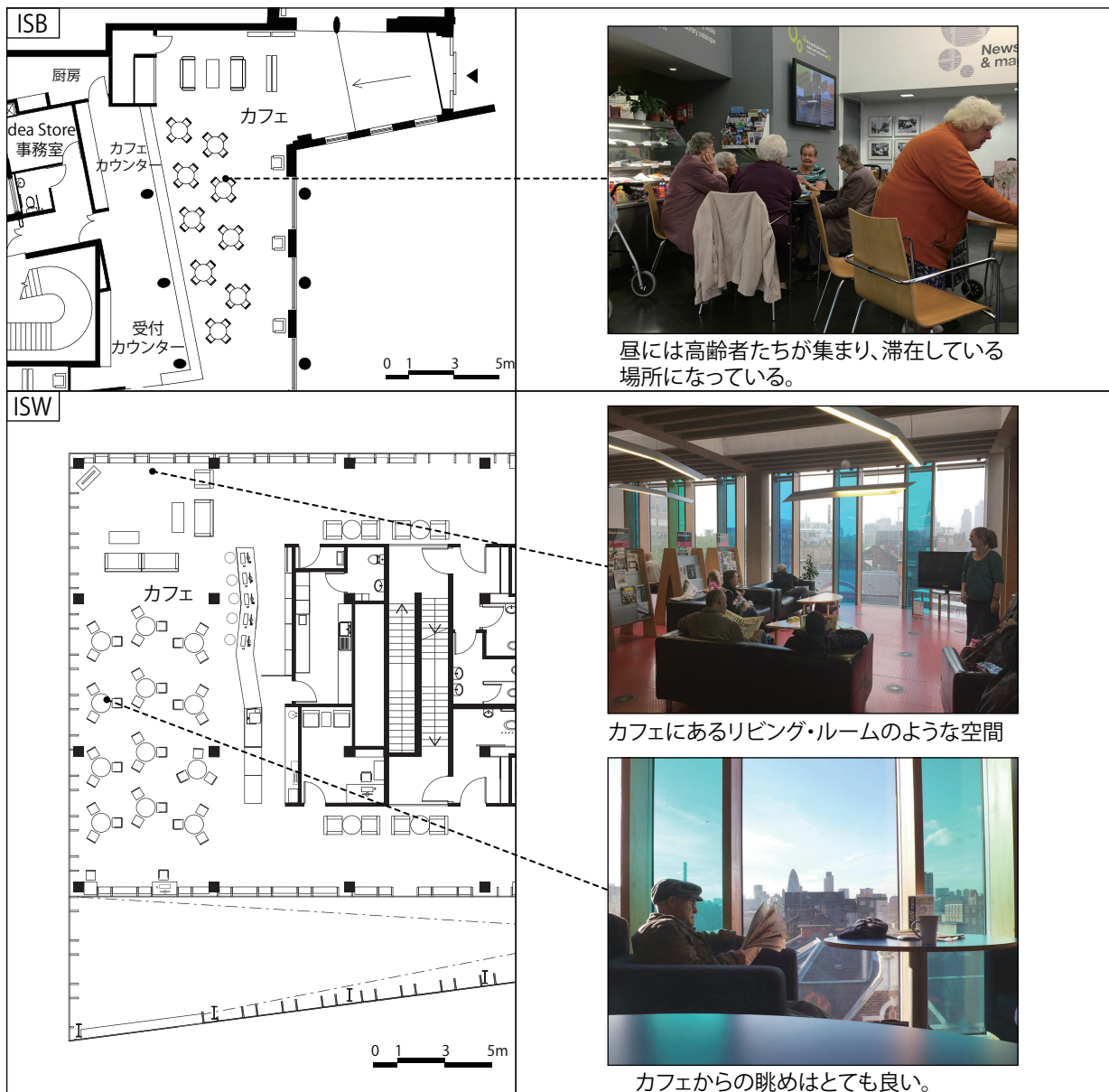


図 5-25 カフェの設備と仕様

5-4. 小結

各ISの立地と建築空間の分析により、以下の点が明らかになった。

5-4-1. Idea Storeの立地と建築空間の特徴

立地については、共通して既存の商店街や屋外マーケット、地下鉄など鉄道の駅近くに立地している。また近くに学校や病院などが存在するISも多く、5-1-3で述べたTown Centreに位置付けられたロンドンの都市拠点の現在の様子やISとの関係が理解できる。

建築空間に関して、改修事例のISBを除き、共通して目に留まる特徴的なガラス張りの外壁とし、図書館の中でも来館者が滞在できる閲覧室を商店街や道路沿いに配置し、外部のパブリックスペースと隣接させることによって内部のアクティビティを外部に対して可視化し、図書館内外の空間的親和性を高めている。その一方で、新築のISWやISWM、増築のISCSでは後述する学習コースを行う教室や子どものためのスペースを住宅地を面する静かな場所や、建物中央の比較的落ち着いたある位置に配置している(図5-26)。内部空間でも鮮やかな色を使った商業施設のようなデザインを採用し、入ってみたいと感じさせる空間づくりを行っており、ISBでは玄関を入ってすぐにまずはカフェを置くことで商店街との連続性を意識している。また、開架書架も立位の人の目線を遮らない高さに抑えられている。

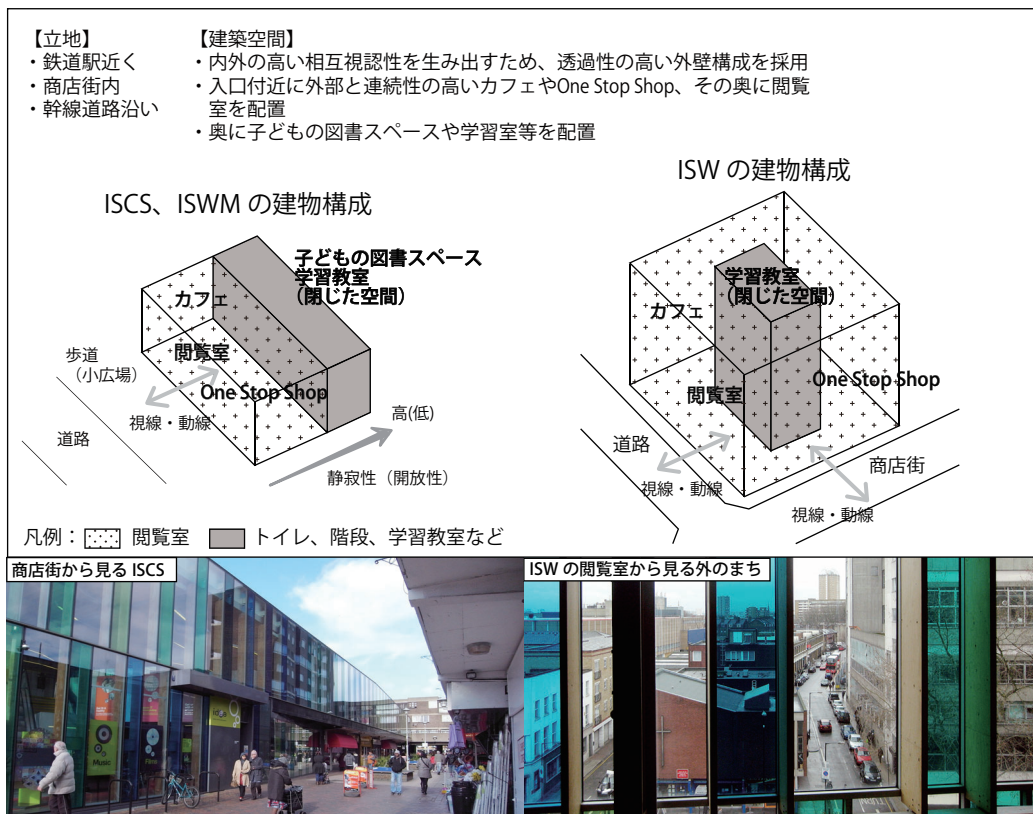


図5-26 ISの空間構成概念図

第6章 Idea Store の提供プログラム

この章では、ISで提供されている定期的イベントと学習コースを中心に、ISの提供プログラムについて分析し、またISの建築空間及び配置と提供プログラムの関係性について考察する。

6-1. 各図書館の利用傾向

前章までの分析で明らかになった空間的特性を有したTH区立図書館の図書館利用に関して、訪問者数^{注1}と図書の貸出数、学習コースの登録者数の推移を館毎に比較した(図6-1)。訪問者数と貸出数は基本的に館の面積や蔵書数に応じた数であり、またその推移は全般に安定しているが、施設面積が最も小さく、蔵書数も5館中4番目であるISCWの訪問者数と図書貸出数が比較的多いのは、4-1①で述べたようにビジネス街のショッピングモール内に立地していることの効果や、館内のコンピュータ利用者が多いことが考えられる。またISCSとISWMへの訪問者数が多いのも、商業集積や駅に近くに立地する効果と考えられる。その中で、2013－2014年度のISWMへの訪問者数は2012年までのWMLへの訪問者数の2倍以上になり、学習コース登録者数も伸びている^{注8}。貸出数の変化は殆どないことも考えると、立地の変更や街に開かれた建築空間および提供プログラムの効果がうかがい知れる。実際、ISの整備によって2011年度におけるTH区での図書の貸出数(ネット図書館、成人学習センターの貸出数も含む)がIS開設前の2001年度と比較すると28%増加したのに対し、訪問者数(TH区歴史資料館を含む)は240%増加していること、また区民の満足度も高くなっている¹⁾。

注1 訪問者数は各図書館の入口に設置された専用の電子機器によってカウントされ、集計されている。

一方、TH区立図書館で図書等を借りるには会員(Membership)になる必要があるが、2002年の利用実績のある会員はTH区人口比で15.2%(会員29,867人/人口197,100人)であるのに対して、2014年のそれは16.2%(会員41,049人/人口254,100人)であった。ただし、2014年のデータにはインターネットサービス利用のみの会員約30,000人については含まれていない¹⁰⁾。これらのデータから、TH区立図書館の改革によって新たに導入された空間・機能やそれを活かしたプログラムが、図書を借りに来る従来からの区民だけでなく、これまで図書館に足を運ばなかった区民の来訪を促した結果、TH区立図書館への総訪問者数が大幅に増加したと考えられる。その要因を解明するためには、ISの立地と建築空間の特性や図書等を借りる以外の目的で来訪する区民が多くなっている点をふまえながら、ISの提供プログラムの内容を明らかにする必要がある。

そこで、図書の貸出以外のサービスの内、主に定期イベントや学習コースについて各館の状況を比較しながら分析する。

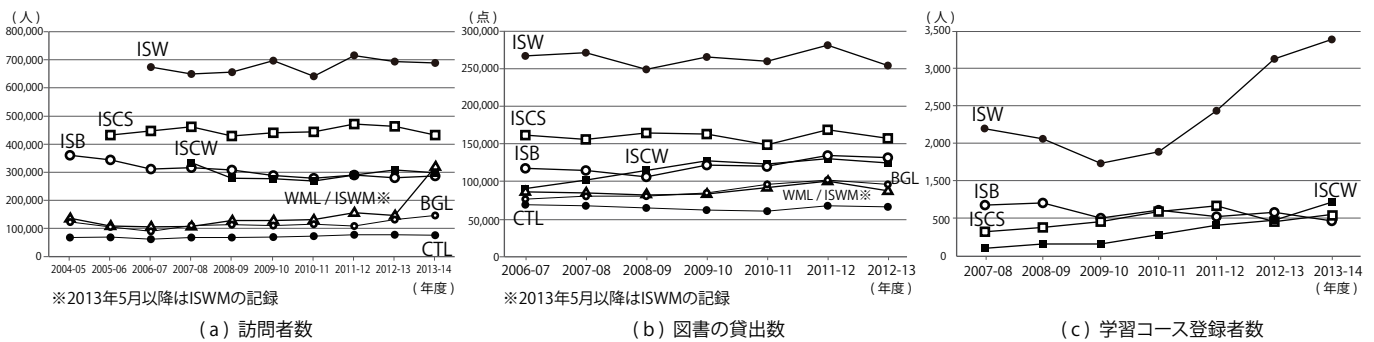


図 6-1 TH 区立図書館への訪問者数・図書貸出数・学習コース登録者数の推移

6-2. 定期的イベント

読書会や就業支援に関する相談会、子どもの向け活動、高齢者集会などイベントが定期的に IS の全館で開催されている（表 6-1）。

特に子ども向けには家族での読書やコンピューター学習、父親クラブなど多様なイベントが平日や週末に行われている。これは 2013 年 9 月に策定された「子どものための IS のサービス」(Idea Store services to children) の計画内容と深く関係している。この計画は TH 区立図書館において最低限提供すべき子ども向けプログラムの内容と子ども向けのイベントは全ての IS で提供する方針を示し、実際に図 6-2 で示すように実施されている。その際、IS は Dad's Club や Family Reading Group など家族で参加する場所と機会を提供し、子どもに向けたサービスを通じて子どもと親、親同士の交流を促進することによって、家族学習 (Family Learning) を支援している。

また、就職支援に関する相談会も BGL を除く 6 館で、また高齢者向けイベントの一つは ISCW を除く 6 館で毎週開催されている。

つまり、IS は公共図書館の従来の基本サービスを基盤にしなが、多世代が参加できるイベントを提供し、さらには就業という地域課題の支援の一役までも担っている。その背景として、IS 戦略 1999 で示された TH 区立図書館に生涯学習プログラムを導入する方針に基づき、IS は TH 区の成人学習センターである Shadwell Centre (以下 SHC) および Bethnal Green Centre (以下 BGC) 注 2 と連携しながら多様な学習コースを提供していることや、TH 区のコミュニティ・プラン (2011)¹⁾ に基づいて当初の生涯学習支援に加えて公共図書館の情報発信力を活かし、地域課題である就業・健康支援サービスにも対応する方針が IS 戦略 2009 で示されたこと挙げられる。

注 2 BGC (Bethnal Green Centre) は TH 区の成人学習センターの 1 つであったが、2013 に閉館され、2014 年 4 月に会議室や展示スペース、ホールなどを貸し出すコミュニティ・センター (Professional Development Centre) として新しく開館した。

1) Tower Hamlets Partnership: The Community Plan 2011, 2011.4

表 6-1 ISの定期的イベント

| | 読書 イベント | 相談会 | | | | | | | | | | | | | | | | 子ども向け イベント | 高齢者 向け イベント | | | | | |
|------|---|-----|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|---------------|-------------------|--|------------|------------------------|--|--|
| | Multilingual Poetry Group | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | Story Time | | | |
| | Bengali Book Group | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | Daily Serial | | |
| | Book Break | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | Boys' Book Club | | |
| | Book Group | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | Girls' Book club | | |
| | Idea Store Comic Forum | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | Computer Club | | |
| | Play Reading Group | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | Teenage Book Club | | |
| | Idea Store Online Information Stalls | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | Homework Club | | |
| | Crossrail Information Centre | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | Dads' Club | | |
| | Idea Store Job Club | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | Family Reading Group | | |
| | Skillsmatch Employment Service | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | Art Club | | |
| | Job Support Session | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | Golden Time | | |
| | IT for Beginners | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | News Vies Chat Session | | |
| | Sexual Health Advice Sessions | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | IT for beginners | | |
| | Poplaw | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | Welfare Benefits Advice Session | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | Architectural Advice | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | Citizens Advice Bureau Service | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | The Royal London Society for the blind Job Club | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | Aaj Kal(Current affairs in Bengali) | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | Knit Wits | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| ISB | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| ISCS | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| ISW | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| ISCW | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| ISWM | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| BGL | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| CTL | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |

凡例: ○毎月行う活動 ◎毎週行う活動 △予約制

| Children's Programme | | | | | | | |
|----------------------|------------------|------------------|------------------|-------------------|------------------|----------------------|----------|
| | Monday | Tuesday | Wednesday | Thursday | Friday | Saturday | Sunday* |
| 10:30am | Storytime | Storytime | Storytime | Storytime | Storytime | Dads' Club | |
| 2:15pm | | | | | | Family Reading Group | Art Club |
| 3:30pm | The Daily Serial | The Daily Serial | The Daily Serial | The Daily Serial | The Daily Serial | | |
| 4:00pm | Boys' Book Club | Girls' Book Club | Computer Club | Teenage Book Club | Homework Club | | |

*Please note Art Club will only take place in Idea Store Bow, Canary Wharf, Chrisp Street and Whitechapel

図 6-2 子ども向けの定期イベント^{注3}

注3 この表はISが公表した Idea Store for Children から引用したものである (資料編の子ども向けの定期的イベントを参考)。

6-3. 学習コースの内容の推移と登録人数

2007年度から2014年度までにISが提供した学習コースへの登録者数の変化(図6-1(c))と、2007年度から2014年度までの学習コースの内容変化の様子(表6-2)を分析する。

表6-2 年度ごとで見た各ISの学習コースの提供

2014 - 2015 年度

| テーマ | 就業支援 | | 健康支援 | | 子育て支援 | 趣味・生涯学習 | | | | | | | | |
|------|-------------|-----------|------------------|--|---------|------------|---------|-------|--------------|------------|----------|--------|---------|-------------|
| コース | 生活のための技能(7) | 有資格コース(4) | フィットネス、健康、福祉(12) | | 家族学習(7) | ビジネス&金融(4) | IT技術(3) | 料理(3) | ファッション&織物(3) | 外国語&翻訳(11) | 公演芸術(10) | 撮影術(5) | 視覚芸術(6) | 技術的DIY技能(7) |
| ISB | | | (1) | | (3) | (1) | | | (2) | (2) | (1) | (2) | (4) | (1) |
| ISCS | | | | | (3) | | (2) | (1) | (1) | (4) | (1) | (1) | (1) | |
| ISW | (7) | (2) | (1) | | (2) | (3) | (1) | (1) | (2) | (5) | (7) | (2) | | (1) |
| ISCW | (3) | | | | (2) | (2) | | | (1) | (7) | (1) | (2) | (1) | |
| ISWM | | | | | (1) | | | | | | (1) | (1) | (1) | |
| BGL | | | | | | | | | (3) | | | | | |
| SHC | (1) | (2) | (7) | | (2) | (3) | (2) | (3) | (2) | (1) | (1) | (5) | (4) | (5) |

2013 - 2014 年度

| テーマ | 就業支援 | | 健康支援 | | 子育て支援 | 趣味・生涯学習 | | | | | | | | |
|------|----------------|-----------|-----------|----------|---------|------------|---------|-------|--------------|------------|----------|--------|---------|---------|
| コース | 生活・仕事のための準備(5) | 有資格コース(3) | フィットネス(7) | 健康&福祉(8) | 家族学習(5) | ビジネス&金融(4) | IT技術(3) | 料理(2) | ファッション&織物(3) | 外国語&翻訳(13) | 公演芸術(11) | 撮影術(4) | 視覚芸術(7) | 技術教育(9) |
| ISB | | | (1) | | (1) | (2) | | | (1) | (2) | | (1) | (3) | (2) |
| ISCS | (1) | | | (1) | (1) | | (1) | (1) | (1) | (6) | | (1) | (1) | (1) |
| ISW | (4) | (2) | (6) | (8) | (2) | (3) | (2) | (1) | (1) | (6) | (8) | (1) | | (2) |
| ISCW | (3) | | | | | (1) | | | (1) | (7) | | (1) | (1) | |
| ISWM | | | | | | | | | (1) | | | | | |
| BGL | | | | | | | | | (2) | | | | | |
| SHC | (4) | (1) | (6) | (1) | (3) | (2) | (2) | (1) | (2) | (3) | (6) | (3) | (5) | (6) |

2012 - 2013 年度

| テーマ | 就業支援 | | 健康支援 | | 子育て支援 | 趣味・生涯学習 | | | | | | | | |
|------|----------------|--|-----------|----------|---------|------------|---------|-------|--------------|------------|----------|--------|---------|----------|
| コース | 生活・仕事のための準備(5) | | フィットネス(9) | 健康&福祉(6) | 家族学習(9) | ビジネス&金融(5) | IT技術(6) | 料理(4) | ファッション&織物(4) | 外国語&翻訳(11) | 公演芸術(18) | 撮影術(8) | 視覚芸術(8) | 技術教育(10) |
| ISB | (1) | | (2) | | (2) | (2) | | | (1) | (1) | | (2) | (3) | (2) |
| ISCS | (2) | | | (1) | (3) | (1) | (4) | | (1) | (4) | | (2) | (2) | (2) |
| ISW | (5) | | (3) | (5) | (2) | (4) | (6) | | (1) | (5) | (10) | | (1) | (2) |
| ISCW | (2) | | (1) | | | (3) | | | | (7) | | (1) | | |
| BGC | (1) | | (5) | | (2) | | | | (3) | (3) | (3) | | (3) | (8) |
| SHC | (4) | | (6) | | (5) | (1) | (4) | (4) | (3) | (1) | (7) | (6) | (6) | |

2011 - 2012 年度

| テーマ | 就業支援 | | 健康支援 | | 子育て支援 | 趣味・生涯学習 | | | | | | | |
|------|----------------|---------------|-----------|----------|-------|------------|---------|-------|--------------|--------|---------|-------------|---------|
| コース | 生活・仕事のための準備(3) | ESOL※1上級英語(2) | フィットネス(8) | 健康&福祉(4) | | ビジネス&金融(5) | IT技術(4) | 料理(2) | ファッション&織物(3) | 言語(11) | 公演芸術(7) | 撮影術&視覚芸術(9) | 技術教育(7) |
| ISB | (1) | | (4) | | | (4) | (1) | | (1) | (2) | | (3) | (1) |
| ISCS | (1) | | (1) | | | (1) | (1) | | | (3) | | (3) | (1) |
| ISW | (1) | | (5) | (4) | | (5) | (4) | (1) | (1) | (7) | (5) | (2) | (1) |
| ISCW | (2) | | (2) | | | (3) | | | | (9) | | (5) | |
| BGC | | | (4) | | | | | | (2) | (3) | (4) | (4) | (6) |
| SHC | (3) | (2) | (3) | | | (1) | (2) | (2) | (2) | | (4) | (6) | |

2010 - 2011 年度

| テーマ | 就業支援 | | 健康支援 | | | 子育て支援 | 趣味・生涯学習 | | | | | | | | | |
|------|------------------|--|--------------|------------|--------------|------------|---------|-------|--------------|-------|--------|-------|-----------------|--------------|------------------|-------|
| コース | 生活のための技能-ESOL(1) | | 健康&フィットネス(5) | 健康&セラピー(9) | 週末ワークショップ(2) | ビジネス&金融(4) | IT技術(3) | 料理(3) | ファッション&織物(4) | 言語(9) | ダンス(6) | 音楽(1) | 撮影術&デジタル・アーツ(2) | アーツ&デザイン(12) | 自動車・自転車メンテナンス(3) | 建設(2) |
| ISB | (1) | | (3) | (1) | | | (2) | | (1) | (1) | | | | (5) | | |
| ISCS | (1) | | (1) | (1) | | | (3) | | | (1) | | | | | | |
| ISW | (1) | | (2) | (8) | (1) | (4) | (3) | (1) | (2) | (4) | (6) | | (2) | (1) | | |
| ISCW | (1) | | | | (2) | (1) | | | | (4) | | | (1) | (4) | | |
| BGC | | | (3) | | | (1) | | | (3) | (5) | (2) | (1) | | (3) | (2) | (2) |
| SHC | (1) | | (3) | (4) | | (2) | (3) | (2) | (2) | | (2) | | (2) | (6) | (1) | |

2009 - 2010 年度

| テーマ | 就業支援 | | 健康支援 | | | 子育て支援 | 趣味・生涯学習 | | | | | | | | | | |
|------|-------------------|--|--------------|------------|----------|--------------|------------|---------|-------|--------------|--------|--------|-------|-----------------|-------------|------------------|-------|
| コース | 生活のための技能(ESOL)(1) | | 健康&フィットネス(6) | 健康&セラピー(9) | 健康&安全(2) | 週末ワークショップ(1) | ビジネス&金融(5) | IT技術(4) | 料理(2) | ファッション&織物(5) | 言語(11) | ダンス(7) | 音楽(2) | 撮影術&デジタル・アーツ(5) | アーツ&デザイン(8) | 自動車・自転車メンテナンス(1) | 建設(2) |
| ISB | (1) | | (1) | (1) | (1) | | (2) | (2) | | (1) | (2) | | | (1) | (2) | | |
| ISCS | | | | | | | | (4) | | (1) | (3) | | | | (1) | | |
| ISW | | | (3) | (8) | (1) | (1) | (3) | (3) | (1) | (1) | (5) | (6) | (1) | (2) | | | |
| ISCW | | | | | (2) | | (2) | | | | (2) | | | (1) | (1) | | |
| BGC | | | (3) | | | | (2) | | | (3) | (10) | (2) | (1) | (3) | (3) | (1) | (2) |
| SHC | (1) | | (4) | (4) | (1) | | (3) | (3) | (1) | (4) | | (2) | | (2) | (4) | | |

凡例: ISにおける就業支援の学習コースの提供 ISにおける健康支援の学習コースの提供 ISにおける子育て支援の学習コースの提供
 注: 各コース欄の()内の数字は各コースの開講科目の数であり、ISおよび既存2館の()内の数字はその内いくつかの科目が開講されているかを示す。

6-3-1. 学習コースの登録人数

開館間もない ISWM を除く IS 4 館について、ISW のコース登録数は 2009 年から大幅に増加し、2013 年度の登録延べ人数は他の IS の約 4 倍となっている (図 6-1(c))。また ISCW は施設規模としては最も小さいものの登録者数が年々増加している。ビジネス街という立地特性を反映して就業支援や、外国語の学習や翻訳に関する開講科目数が増加し、特に後者は 2014 - 2015 年度に IS 5 館の中で最も多く開講されていることがその理由として考えられる。

6-3-2. 学習コースの内容

表 6-2 は 2009 年度から 2014 年度までに IS が提供した学習コースとその提供科目数を年度ごとに整理したものである。就業支援に関しては、2009 - 2010 年度に ISB で始まった ESOL^{注4} コースが 2010 - 2011 年度には IS 全館で提供されるようになり、さらに 2011-2012 年度からは ESOL 以外の就業支援のコースが提供されるようになった。しかし近年では ESOL を含めて就業支援の学習コースは主に ISW で提供されており、他の IS における提供は減少している。この傾向は、健康支援の学習コースにおいても確認できる。また、家族学習コースは 2012-13 年度に提供が開始され、成人だけではなく、子どもと親と一緒に参加できる学習コースが用意されている。2014 - 2015 年度からは全ての IS で家族学習コースが提供されている。これは、5-2 で述べた「子どものための IS のサービス」の策定とともに、定期的イベントだけではなく学習コースについても家族学習を重視した結果と考えられる。一方、趣味・生涯学習に関する学習コースについては、特徴的な変化は見られない。

注4 ESOL (English for Speakers of Other Language) は英語が母語ではない市民に向けた英語教育のこと。

表 6-3 は各 IS ごとに見た学習コースの提供をまとめたものである。この表を基に、各 IS における就業支援、健康支援と家族学習の学習コースの提供を分析した結果、以下のことが分かった。

- ・ ISB は健康支援サービスを多く提供して来た。
- ・ ISCS は就業支援と家族学習を多く提供して来た。
- ・ ISW における学習コースの提供は全般的に充実されている。
- ・ ISCW は就業支援の英語学習を多く提供している。
- ・ 2013 年に開館したばかりの ISWM では全般的に学習コースの提供がまだ少ない。

表 6-3 各ISごとで見た学習コースの提供

ISB

| テーマ | 就業支援 | | 健康支援 | | | 子育て支援 | 趣味・生涯学習 | | | | | | | | | | |
|--------|---------------------|-----------------|---------------------|-----------------|-----------------|-----------------|-----------------|------------|----------|-------------------|-----------------|-------------|------------------|----------------------|-------------------|---------------------|----------|
| 2014年度 | 生活のための技能 (0/7) | 有資格コース (0/4) | フィットネス、健康、福祉 (1/12) | | | 家族学習 (3/7) | ビジネス & 金融 (1/4) | IT技術 (0/3) | 料理 (0/3) | ファッション & 織物 (2/3) | 外国語 & 翻訳 (2/11) | 公演芸術 (1/10) | 撮影術 (2/5) | 視覚芸術 (4/6) | 技術的DIY技能 (1/7) | | |
| 2013年度 | 生活・仕事のための準備 (0/5) | 有資格コース (0/3) | フィットネス (1/7) | 健康 & 福祉 (0/8) | | 家族学習 (0/5) | ビジネス & 金融 (2/4) | IT技術 (0/3) | 料理 (0/2) | ファッション & 織物 (1/3) | 外国語 & 翻訳 (2/13) | 公演芸術 (0/11) | 撮影術 (1/4) | 視覚芸術 (3/7) | 技術教育 (2/9) | | |
| 2012年度 | 生活・仕事のための準備 (1/5) | | フィットネス (2/9) | 健康 & 福祉 (0/6) | | 家族学習 (2/9) | ビジネス & 金融 (2/5) | IT技術 (0/6) | 料理 (0/4) | ファッション & 織物 (1/4) | 外国語 & 翻訳 (1/11) | 公演芸術 (0/18) | 撮影術 (2/8) | 視覚芸術 (3/8) | 技術教育 (2/10) | | |
| 2011年度 | 生活・仕事のための準備 (0/3) | ESOL 上級英語 (1/2) | フィットネス (4/8) | 健康 & 福祉 (0/4) | | | ビジネス & 金融 (4/5) | IT技術 (1/4) | 料理 (0/2) | ファッション & 織物 (1/3) | 言語 (2/11) | 公演芸術 (0/7) | 撮影術 & 視覚芸術 (3/9) | | 技術教育 (1/7) | | |
| 2010年度 | 生活のための技術-ESOL (1/1) | | 健康 & フィットネス (3/5) | 健康 & セラピー (1/9) | 週末ワークショップ (0/2) | | ビジネス & 金融 (0/4) | IT技術 (2/3) | 料理 (0/3) | ファッション & 織物 (1/4) | 言語 (1/9) | ダンス (0/6) | 音楽 (0/1) | 撮影術 & デジタル・アーツ (0/2) | アーツ & デザイン (5/12) | 自動車・自転車メンテナンス (0/3) | 建設 (0/2) |
| 2009年度 | 生活のための技術 (1/1) | | 健康 & フィットネス (1/6) | 健康 & セラピー (0/9) | 健康 & 安全 (1/2) | 週末ワークショップ (0/1) | ビジネス & 金融 (2/5) | IT技術 (2/4) | 料理 (0/2) | ファッション & 織物 (1/5) | 言語 (2/11) | ダンス (0/7) | 音楽 (0/2) | 撮影術 & デジタル・アーツ (1/5) | アーツ & デザイン (2/8) | 自動車・自転車メンテナンス (0/1) | 建設 (0/2) |

ISCS

| テーマ | 就業支援 | | 健康支援 | | | 子育て支援 | 趣味・生涯学習 | | | | | | | | | | |
|--------|-----------------------|-----------------|---------------------|-----------------|-----------------|-----------------|-----------------|------------|----------|-------------------|-----------------|-------------|------------------|----------------------|-------------------|---------------------|----------|
| 2014年度 | 生活のための技能 (0/7) | 有資格コース (0/4) | フィットネス、健康、福祉 (0/12) | | | 家族学習 (3/7) | ビジネス & 金融 (0/4) | IT技術 (2/3) | 料理 (1/3) | ファッション & 織物 (1/3) | 外国語 & 翻訳 (4/11) | 公演芸術 (1/10) | 撮影術 (1/5) | 視覚芸術 (1/6) | 技術的DIY技能 (0/7) | | |
| 2013年度 | 生活・仕事のための準備 (1/5) | 有資格コース (0/3) | フィットネス (0/7) | 健康 & 福祉 (1/8) | | 家族学習 (1/5) | ビジネス & 金融 (0/4) | IT技術 (1/3) | 料理 (1/2) | ファッション & 織物 (1/3) | 外国語 & 翻訳 (6/13) | 公演芸術 (0/11) | 撮影術 (1/4) | 視覚芸術 (1/7) | 技術教育 (1/9) | | |
| 2012年度 | 生活・仕事のための準備 (2/5) | | フィットネス (0/9) | 健康 & 福祉 (1/6) | | 家族学習 (3/9) | ビジネス & 金融 (1/5) | IT技術 (4/6) | 料理 (0/4) | ファッション & 織物 (1/4) | 外国語 & 翻訳 (4/11) | 公演芸術 (0/18) | 撮影術 (2/8) | 視覚芸術 (2/8) | 技術教育 (2/10) | | |
| 2011年度 | 生活・仕事のための準備 (0/3) | ESOL 上級英語 (1/2) | フィットネス (1/8) | 健康 & 福祉 (0/4) | | | ビジネス & 金融 (1/5) | IT技術 (1/4) | 料理 (0/2) | ファッション & 織物 (0/3) | 言語 (3/11) | 公演芸術 (0/7) | 撮影術 & 視覚芸術 (3/9) | | 技術教育 (1/7) | | |
| 2010年度 | 生活のための技術-ESOL (1/1) | | 健康 & フィットネス (0/5) | 健康 & セラピー (1/9) | 週末ワークショップ (0/2) | | ビジネス & 金融 (0/4) | IT技術 (3/3) | 料理 (0/3) | ファッション & 織物 (0/4) | 言語 (1/9) | ダンス (0/6) | 音楽 (0/1) | 撮影術 & デジタル・アーツ (0/2) | アーツ & デザイン (0/12) | 自動車・自転車メンテナンス (0/3) | 建設 (0/2) |
| 2009年度 | 生活のための技術 (ESOL) (0/1) | | 健康 & フィットネス (0/6) | 健康 & セラピー (0/9) | 健康 & 安全 (0/2) | 週末ワークショップ (0/1) | ビジネス & 金融 (0/5) | IT技術 (4/4) | 料理 (0/2) | ファッション & 織物 (1/5) | 言語 (3/11) | ダンス (0/7) | 音楽 (0/2) | 撮影術 & デジタル・アーツ (0/5) | アーツ & デザイン (1/8) | 自動車・自転車メンテナンス (0/1) | 建設 (0/2) |

ISW




| テーマ | 就業支援 | | 健康支援 | | | 子育て支援 | 趣味・生涯学習 | | | | | | | | | | |
|--------|-----------------------|-----------------|----------------------|-----------------|-----------------|-----------------|-----------------|------------|----------|-------------------|-----------------|--------------|------------------|----------------------|-------------------|---------------------|----------|
| 2014年度 | 生活のための技能 (7/7) | 有資格コース (2/4) | フィットネス、健康、福祉 (11/12) | | | 家族学習 (3/7) | ビジネス & 金融 (3/4) | IT技術 (1/3) | 料理 (1/3) | ファッション & 織物 (2/3) | 外国語 & 翻訳 (5/11) | 公演芸術 (7/10) | 撮影術 (2/5) | 視覚芸術 (0/6) | 技術的DIY技能 (1/7) | | |
| 2013年度 | 生活・仕事のための準備 (4/5) | 有資格コース (2/3) | フィットネス (6/7) | 健康 & 福祉 (8/8) | | 家族学習 (2/5) | ビジネス & 金融 (3/4) | IT技術 (2/3) | 料理 (1/2) | ファッション & 織物 (1/3) | 外国語 & 翻訳 (6/13) | 公演芸術 (8/11) | 撮影術 (1/4) | 視覚芸術 (0/7) | 技術教育 (2/9) | | |
| 2012年度 | 生活・仕事のための準備 (5/5) | | フィットネス (3/9) | 健康 & 福祉 (5/6) | | 家族学習 (2/9) | ビジネス & 金融 (4/5) | IT技術 (6/6) | 料理 (0/4) | ファッション & 織物 (1/4) | 外国語 & 翻訳 (5/11) | 公演芸術 (10/18) | 撮影術 (0/8) | 視覚芸術 (1/8) | 技術教育 (2/10) | | |
| 2011年度 | 生活・仕事のための準備 (2/2) | ESOL 上級英語 (1/3) | フィットネス (5/8) | 健康 & 福祉 (4/4) | | | ビジネス & 金融 (5/5) | IT技術 (4/4) | 料理 (1/2) | ファッション & 織物 (1/3) | 言語 (7/11) | 公演芸術 (5/7) | 撮影術 & 視覚芸術 (2/9) | | 技術教育 (1/7) | | |
| 2010年度 | 生活のための技術-ESOL (1/1) | | 健康 & フィットネス (2/5) | 健康 & セラピー (8/9) | 週末ワークショップ (1/2) | | ビジネス & 金融 (4/4) | IT技術 (3/3) | 料理 (1/3) | ファッション & 織物 (2/4) | 言語 (4/9) | ダンス (6/6) | 音楽 (0/1) | 撮影術 & デジタル・アーツ (2/2) | アーツ & デザイン (1/12) | 自動車・自転車メンテナンス (0/3) | 建設 (0/2) |
| 2009年度 | 生活のための技術 (ESOL) (0/1) | | 健康 & フィットネス (3/6) | 健康 & セラピー (8/9) | 健康 & 安全 (1/2) | 週末ワークショップ (1/1) | ビジネス & 金融 (3/5) | IT技術 (3/4) | 料理 (1/2) | ファッション & 織物 (1/5) | 言語 (5/11) | ダンス (6/7) | 音楽 (1/2) | 撮影術 & デジタル・アーツ (2/5) | アーツ & デザイン (0/8) | 自動車・自転車メンテナンス (0/1) | 建設 (0/2) |

ISCW

| テーマ | 就業支援 | | 健康支援 | | | 子育て支援 | 趣味・生涯学習 | | | | | | | | | | |
|--------|-----------------------|-----------------|---------------------|-----------------|-----------------|-----------------|-----------------|------------|----------|-------------------|-----------------|-------------|------------------|----------------------|-------------------|---------------------|----------|
| 2014年度 | 生活のための技能 (3/7) | 有資格コース (0/4) | フィットネス、健康、福祉 (0/12) | | | 家族学習 (2/7) | ビジネス & 金融 (2/4) | IT技術 (0/3) | 料理 (0/3) | ファッション & 織物 (1/3) | 外国語 & 翻訳 (5/11) | 公演芸術 (1/10) | 撮影術 (2/5) | 視覚芸術 (1/6) | 技術的DIY技能 (0/7) | | |
| 2013年度 | 生活・仕事のための準備 (3/5) | 有資格コース (0/3) | フィットネス (0/7) | 健康 & 福祉 (0/8) | | 家族学習 (0/5) | ビジネス & 金融 (1/4) | IT技術 (0/3) | 料理 (0/2) | ファッション & 織物 (1/3) | 外国語 & 翻訳 (6/13) | 公演芸術 (0/11) | 撮影術 (1/4) | 視覚芸術 (1/7) | 技術教育 (0/9) | | |
| 2012年度 | 生活・仕事のための準備 (5/5) | | フィットネス (1/9) | 健康 & 福祉 (0/6) | | 家族学習 (0/9) | ビジネス & 金融 (3/5) | IT技術 (0/6) | 料理 (0/4) | ファッション & 織物 (0/4) | 外国語 & 翻訳 (5/11) | 公演芸術 (0/18) | 撮影術 (1/8) | 視覚芸術 (0/8) | 技術教育 (0/10) | | |
| 2011年度 | 生活・仕事のための準備 (0/3) | ESOL 上級英語 (2/2) | フィットネス (2/8) | 健康 & 福祉 (0/4) | | | ビジネス & 金融 (3/5) | IT技術 (0/4) | 料理 (0/2) | ファッション & 織物 (0/3) | 言語 (7/11) | 公演芸術 (0/7) | 撮影術 & 視覚芸術 (5/9) | | 技術教育 (0/7) | | |
| 2010年度 | 生活のための技術-ESOL (1/1) | | 健康 & フィットネス (0/5) | 健康 & セラピー (0/9) | 週末ワークショップ (2/2) | | ビジネス & 金融 (1/4) | IT技術 (0/3) | 料理 (0/3) | ファッション & 織物 (0/4) | 言語 (4/9) | ダンス (0/6) | 音楽 (0/1) | 撮影術 & デジタル・アーツ (1/2) | アーツ & デザイン (4/12) | 自動車・自転車メンテナンス (0/3) | 建設 (0/2) |
| 2009年度 | 生活のための技術 (ESOL) (0/1) | | 健康 & フィットネス (0/6) | 健康 & セラピー (0/9) | 健康 & 安全 (2/2) | 週末ワークショップ (0/1) | ビジネス & 金融 (2/5) | IT技術 (0/4) | 料理 (0/2) | ファッション & 織物 (0/5) | 言語 (5/11) | ダンス (0/7) | 音楽 (0/2) | 撮影術 & デジタル・アーツ (1/5) | アーツ & デザイン (1/8) | 自動車・自転車メンテナンス (0/1) | 建設 (0/2) |

ISWM

| テーマ | 就業支援 | | 健康支援 | | | 子育て支援 | 趣味・生涯学習 | | | | | | | | | |
|--------|-------------------|--------------|---------------------|---------------|--|------------|-----------------|------------|----------|-------------------|-----------------|-------------|-----------|------------|----------------|--|
| 2014年度 | 生活のための技能 (0/7) | 有資格コース (0/4) | フィットネス、健康、福祉 (0/12) | | | 家族学習 (1/7) | ビジネス & 金融 (0/4) | IT技術 (0/3) | 料理 (0/3) | ファッション & 織物 (0/3) | 外国語 & 翻訳 (0/11) | 公演芸術 (1/10) | 撮影術 (1/5) | 視覚芸術 (1/6) | 技術的DIY技能 (0/7) | |
| 2013年度 | 生活・仕事のための準備 (0/5) | 有資格コース (0/3) | フィットネス (0/7) | 健康 & 福祉 (0/8) | | 家族学習 (0/5) | ビジネス & 金融 (0/4) | IT技術 (0/3) | 料理 (0/2) | ファッション & 織物 (1/3) | 外国語 & 翻訳 (0/13) | 公演芸術 (0/11) | 撮影術 (0/4) | 視覚芸術 (0/7) | 技術教育 (0/9) | |

凡例: (○/○) 全館で提供する科目数に対する今館の提供科目数
 ISIにおける就業支援の学習コースの提供
 ISIにおける健康支援の学習コースの提供
 ISIにおける子育て支援の学習コースの提供

6-4. ISの建築空間及び配置と提供プログラムの関係

【建築空間と提供プログラムの関係】

これまでの分析により、ISは地域課題とニーズに応じて、子どもや高齢者向けの定期的イベントを開催し、就業・健康支援の学習プログラムを提供していることがわかった。さらに、5章で分析したように、建築的な空間整備からも子どもの図書スペースやカフェ、学習教室などを用意し、ISの提供プログラムに対応している(図6-3)。

【ISの配置と提供プログラムの関係】

学習コースの提供状況とISの立地場所や周辺の地域特性との関係を表6-4に整理した。施設規模が最も大きいISWの周辺は、3章で示したように就業や健康に関して課題が多いが、公共交通の利便性がTH区内で最も高く、将来のOpportunity AreaやTown Centreに立地することから、TH区立図書館の中心施設として徐々に位置づけされてきていると理解できる。ISCWはビジネス街という立地特性に応じた言語系の学習コースが用意され、ショッピング・モールに設置する利便性から登録者数を増やしている。開館間もないISMMを除くと、ISBとISCSは訪問者数や学習コース登録者数はやや減少はしているものの比較的安定して推移している。子育て支援や趣味・生涯学習のコースを中心に提供しており、商業集積地内に立地することからも、近隣に住む高齢者や移民の住民が日常的に訪問、利用しているものと思われる。

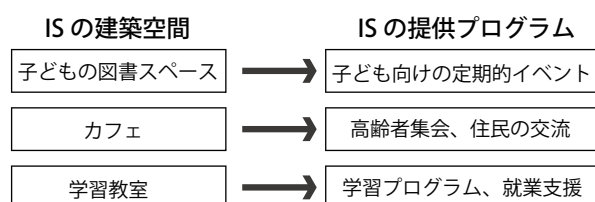


図6-3 ISの建築空間と提供プログラムの関係

表6-4 各ISの立地場所および地域特性と学習コースの関係

| 図書館 | 配置された場所 | 立地する地域の特性 | 学習コースの提供と図書館利用状況 |
|------|--|-----------------------------|---|
| ISB | ・商店街内 ・Roman Road East Town Centre | ・周辺に高齢者人口が多い。 | ・健康支援サービスを多く提供。 |
| ISCS | ・駅至近、商店街内 ・Chrip Sreet Town Centre | ・周辺に移民が多く、就業と健康問題が深刻になっている。 | ・就業支援と家族学習を多く提供。 |
| ISW | ・駅至近、公共施設多い ・Whitechapel Town Centre ・City Fringe Opportunity Area | ・人口密度が高く、就業と健康状態が問題になっている。 | ・全般的に学習コースの提供が充実しており、提供科目数も最も多い。 ・登録者数も最も多く、かつ伸びている。 |
| ISCW | ・業務地区、駅至近 ・Canary Wharf Town Centre ・Isle of Dogs Opportunity Area | ・業務地区であり、周辺に若者が多い。 | ・就業支援の英語学習を多く提供。 |
| ISWM | ・駅近く、公営住宅至近 ・Watney Market Town Centre | ・高齢者と移民の人口が多く、健康問題が深刻である。 | ・2013年に開館したばかり。学習コースの提供はまだ少ないが、訪問者数は増加。 |

6-5. 提供プログラムのその後 (2015~)

本章では、主に第2番目のIS戦略が発行された2009年度からの現段階における最後のIS(ISWM)が開館された2014年までのISの提供プログラムの特性について分析したが、2015年以降のISの提供プログラムに関しては、今後注目すべき内容として以下の内容を取り上げられる。

6-5-1. 子ども向けサービス

6-1と6-2で論じたように、ISは全館で子ども向けの読書・学習イベントを充実させ、子どもに学校と家以外に安全な場所を提供し、多様な活動を通じて子どもに読書の楽しみを伝えている。子どもは放課後あるいは休日にISで本を読みながら、自由に時間を過ごし、スタッフと一緒に宿題をやることもできる。現在、ISはTH区の小学校と連携し、学校のカリキュラムに合わせた資料提供と先生の指導によるワークショップを開催している。

2018年発行された子ども向けサービスの戦略(Idea Store and Children)¹⁾では、以下の4つをサービス提供の目的としている。

- ①楽しく読書することを推進する。
- ②子どもが自ら本を選択でき、貸し出すことを勧める。
- ③家庭内の読書をサポートする。
- ④図書館利用が家庭の日常的な習慣になることを助ける。

このように、ISは子どもだけではなく、親同士が交流する場所を提供し、家族全員が参加する家庭学習(Family Learning)を重視している。さらに、将来的に親たちがボランティアとしてISの仲間になることも積極的に勧めている。

6-5-2. 健康支援

3-1で述べたように、TH区民の平均寿命は全国平均より低く、癌による死亡率がロンドン市で一番高い。精神的な病気の入院数は市の特別区の中で5番目に高く、健康対策は大きな地域課題になっている。そこで、ISは2013年4月に健康支援に関する戦略書である「Medicine for the Soul: Idea Store Health Strategy」を策定し、図書館として地域の健康支援にも対応する方針を示した。

現在、ISはHPにてオンライン連絡簿「In the know」²⁾を提供し、Tower Hamletsの地元医療機関と連携しながら区民に確実に信頼できる医療施設と健康情報を紹介している。住民は自分のニーズに応える専門的な医療施設だけではなく、コミュニティグループやクラブにアクセスすることもできる。「In the Know」はTHのClinical Commissioning Group(CCG 臨床委託グループ、イギリスでは公的な国民医療サービスの大半をCCGに委託する)により運営されているが、ISのHPから「In the Know」にアクセスするようになっている。つまり、ISは区民に医療的サービスを提供しているのではなく、健康的な情報の紹介窓口になっている。

1) Idea Store and Children, <https://www.ideastore.co.uk/assets/documents/misc/180810%20Idea%20Store%20and%20children.pdf> [2020.10.3 確認]

2) In the Know, <http://www.ideastoreonlinedirectory.org/kb5/towerhamlets/cd/mentalhealth.page?communitychannel=10> [2020.10.3 確認]

6-5-3. 就業支援

健康問題を除くもう一つ TH 区の地域課題である就業問題に対して、IS は就労が困難である移民に向けて雇用に必要なスキル、特に基本的な言語能力と IT 技術などを習得する就業支援の学習コースを提供している。現在 IS は TH 区就業支援サービスセンター WorkPath と連携しながら、WorkPath の登録者に就職と資格取得などに必要な学習コースを提供しつつ、WorkPath が提供する専門講座を受講するための準備サポートを行っている³⁾。

3) Idea Store Employability, <https://www.ideastore.co.uk/employability> [2020.10.3 確認]

6-6. 新型コロナウイルスに対する支援

2020 年、新型コロナウイルス(以下新型コロナ)の感染拡大により、世界中がコロナ禍に巻き込まれる中、ロンドンでもこれまで 39 万人(2020 年 9 月 28 日時点)を超える感染者が確認された。TH 区でも I 一部の IS を閉館し、現在まだに開館中の IS では営業時間の短縮や提供プログラムの縮小を行っている。これまでと同様に図書館に来館できない、学習プログラムに参加できない区民に対して、IS では以下の支援を行っている。

・オンラインサービス

IS では区民に無料で電子図書を提供し、区民の読書を提供し続けている。また、学習プログラムに関しては、一部の開館図書館で提供しながら、事前予約によりオンラインで学習プログラムに参加することができる。また、従来図書館で行ったこどもへの読み聞かせは、ホームページにおいて毎日新しい読み聞かせの動画を投稿している⁴⁾。

4) Story Time Online, <https://www.ideastore.co.uk/storytime>[2020.9.19 確認]

・失業者や倒産事業者への相談窓口

新型コロナの流行により、仕事に影響を受けた失業者や倒産事業者、また経済的に大きい被害を受けた区民に対して、IS は相談窓口を設置し、相談者が利用できる支援プログラムや専門的な支援窓口の紹介を行っている⁵⁾。

5) Recordkeeping advice during the COVID-19 pandemic, <http://www.ideastore.co.uk/recordkeeping-guidance-coronavirus>[2020.10.10 確認]

・新型コロナウイルスの感染テスト

2020 年 9 月 18 日、TH 区は新型コロナウイルスのテストセンターを ISWM に設置し、新型コロナ感染の疑いのある区民に対して、ウイルステストを行っている⁶⁾。なお、ISWM は図書館機能としての開館は行っていない。

6) New Covid-19 test centre opens in Tower Hamlets , https://www.towerhamlets.gov.uk/News_events/2020/September_20/New-Covid-19-test-centre-opens-in-Tower-Hamlets.aspx [2020.10.10 確認]

新型コロナウイルスの感染拡大により、地域住民の精神的に大きな不安に襲われる中、IS が住民の悩みの相談窓口となり、さらには専門的な医療施設でもない区立図書館にウイルステストセンターが設置されたことは、IS が地域コミュニティの中核施設であることを示している。

6-7. 小結

ISにおける定期的イベントと学習コースの提供を分析し、以下の点が明らかになった。

- ① 5章で述べたように、TH区は区立図書館の再編計画において、立地と建築空間を総合的に再整備しただけではなく、TH区の地域ニーズと課題に応じて読書以外に生涯学習プログラムをISに導入し、就業支援に関する相談会、子どもの向け活動、高齢者集会などの定期的イベントを開催するなど、区立図書館の提供プログラムも再編した。
- ② TH区は住民の多くが移民であり、低所得者が多い地域課題に対して、子どもをはじめとした家族全員の読書・学習能力の向上を図るため、すべてのISにおいて、子ども向けのイベント活動と学習プログラムを提供している。特に、「子どものためのISのサービス」が策定されてから、ISはTH区の小学校と連携しながら、さらなる地域の教育支援を目指している。
- ③ ISは地域課題である区民の健康問題と雇用問題に対して、図書館単独において関連資料と情報を提供しているのではなく、地元の医療センターとTH区の雇用支援サービスセンターと連携を行いながら、確実に信頼できる健康・就業支援サービスを提供している。
- ④ 各ISは同じプログラムが提供されているのではなく、6-4で分析したように各ISが立地する地域特性によって、その提供プログラムも異なっている。特に表6-3から見る各年度の提供学習プログラムの推移をみると、ISWMの開館以来、多くの学習プログラムの提供はほとんどISWに集中され、他のISにおける提供は減少されつつである。このことから、IS戦略2009が示した中核施設(Anchor Idea Store)とサテライト施設(Satellite Idea Store)からなる図書館ネットワークの構築が現在進んでいると言える(図6-4)。

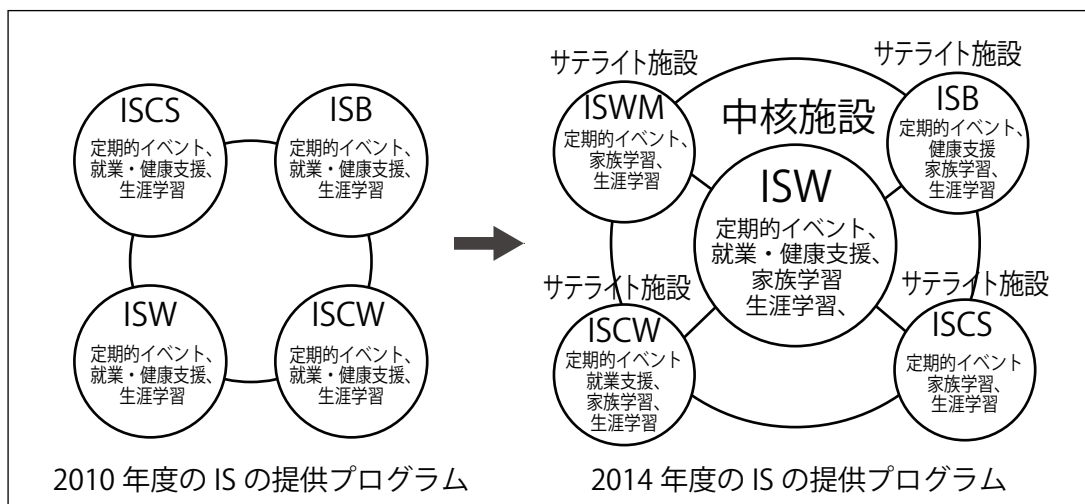


図6-4 ISが形成するTH区立図書館のネットワークの変化

7-1. 都市・地域計画および関連政策と Idea Store の再編計画の関係

4章ではISの整備に関係する図書館計画及び都市・地域計画の内容を分析し、ISの整備は主に以下の背景の中で行われたことが分かった。

- ①「Reading the Future」や「Framework for the Future」などのイギリスの中央政府から提示された新しい公共図書館のビジョンは、ISの整備において重要な方向性を示した。ISはこの各種の公共図書館政策に基づいて、住民が必要とする情報を発信する公共図書館機能を基盤にしながら、図書やインターネットによる情報発信と学習コースの提供などを通じて、就業支援や健康支援も実施している。その結果、この12年間でTH区の半分以上の住民がISを含むTH区立図書館を利用するようになり、同時に利用者満足度を向上させるなどの成果を上げた。これは、全ての住民に開かれているという公共図書館の空間・機能の基本特性を活かしながら、地域課題に対応して必要となる公共サービスを新しく内包していくこれからの公共図書館の空間と運営の再編の方向性を例示している。
- ②ISの整備に際しては、TH区は図書館の数よりも、その内容の質やアクセスしやすい立地を重視し、複数のTH区立図書館の配置を総合的に検討し、再配置を実施した。特に、商業施設や公共交通拠点に隣接するように再配置することにより、図書館利用が住民の日常生活の一部になることを目標とし、実現した。さらに、ロンドン・プランと「THCP to 2020」の公表以降には、Town Centreのネットワーク構築を核とした新しい都市・地域計画に即した区立図書館の再配置を計画し、実施している。
- ③このように、TH区は公共図書館に関する行政計画だけではなく、母都市の上位計画に基づいてTH区立図書館の再配置を実施し、さらに地域課題の解決を目指すコミュニティ・プランと連動しながら区立図書館として新たなプログラムを提供することによって、地域の課題とニーズに対応した区立図書館の再編を実現した(図7-1)。これは、今後の日本の公共施設の再編において必要になってくる施設の再配置や新たなプログラムの開発とそれに応じた建築空間の計画において、都市・地域計画と公共施設の再編が連動する必要性と重要性を示唆している。

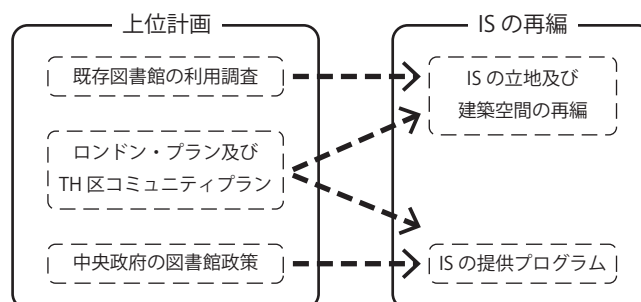


図 7-1 上位計画と IS の再編の関係

7-2. IS の建築空間及び配置と提供プログラムの関係

5章ではTH区が行ったISの建築空間の整備とISの配置について分析し、以下のことが明らかになった。

① ISの立地に関して、商業集積や公共交通へのアクセスビリティの点を重視して配置を行う方針に基づいているが、就業や健康問題等の面でTH区内でも異なる地域毎の特性と深く関係しており、それが建築空間のありかたや提供プログラムの設定に結びついていることを明らかにした。わが国の公共施設の立地論は、これまで当該公共施設のサービス内容や規模に基づく圏域に大きく依拠していた。しかし、今後公共施設の複合化の進展が予想される中では、立地する地域特性に応じたプログラム編成に基づく立地計画も求められよう。その意味で、ISの取り組みとその成果はいわゆる「ついで利用」といった利便性の面だけでなく、当該地域が抱える課題の正確な読み取りに基づく施設整備の重要性を示唆している。

② ISの建築空間について、外部から内部への高い視認性を実現した外壁デザインや、入りやすく感じさせるための色彩豊かなインテリア・デザイン、玄関付近にカフェを置くなどの空間設定は、公共図書館に対する親近感を生み出すための方策であると同時に、商業集積や公共交通の結節点に近接する立地条件を活かした建築計画上の解答であると言えよう。それに対して、静かさや落ち着き、安全性が求められる子どもの図書スペースや学習教室は賑わいのある外部からは離れた位置に、閉じた部屋で置くなどの配慮がなされている。すなわち、書架の配置方法によって全体の空間構成が概ね決められていた従来の図書館の空間計画と異なり、賑わいや喧噪感も許容する空間から落ち着きと静穏性の高い空間へと漸次的に移行していく空間計画が行われている(図7-2)。またBDSのゲートは建物入口に設置され、BDSによる管理範囲内に学習教室やカフェなどの空間・機能が配置されることにより、付置的ではなく統合的な複合化が行われ、そのことがISの提供プログラムの拡張に寄与している点も注目すべきである。公共図

書館に留まらず公共施設の複合化においては、入居する運営主体がそれぞれ独立した管理や運営を求める結果、空間的な複合化に留まるケースも少なくない。しかし、ISのように空間と提供プログラムの連動的な複合化は、地域社会が求めるきめ細やかなサービス提供に繋がるとともに、施設規模の適正化に対しても有効に働くものと考えられる。

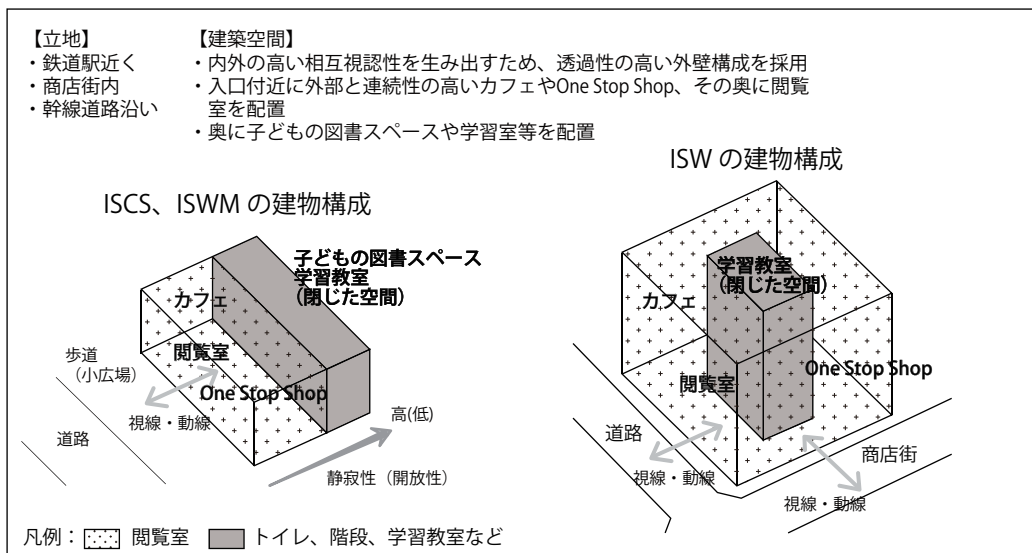


図 7-2 ISの空間構成

③さらに6章で行ったISの提供プログラムに関する分析から見ると、各々のISは立地する地域の課題とニーズに個別に応じる形で、子どもや高齢者向けの定期的イベントを開催し、就業・健康支援の学習コースを提供しており、そのために建築的にも子どもの図書スペースやカフェ、学習教室などを用意して対応している。また10年に亘ってIS 5館が整備されていく中で、多くの学習コースはISWに集約され、他のISでの学習コース数は減少しつつも、それぞれにおいて異なるコースが提供されている。つまり、IS戦略2009が示した中核施設(Anchor Idea Store)とサテライト施設(Satellite Idea Store)からなる図書館ネットワークの構築が現在進んでいると言えるが(図7-3)、これは空間と提供プログラムの整備がTH区立図書館全体での階層的展開と、立地する地域各々の特性に応じた個別的展開の両面から進んでいることを示している。これまでのわが国の公共施設は基本的に「一建物一機能」であったが、公共交通等の利便性も考慮した複合化によって提供プログラムが再編された結果として「一建物複機能」になった場合には、複数の公共サービスを提供する拠点ネットワークとしての再検討が必要となろう。

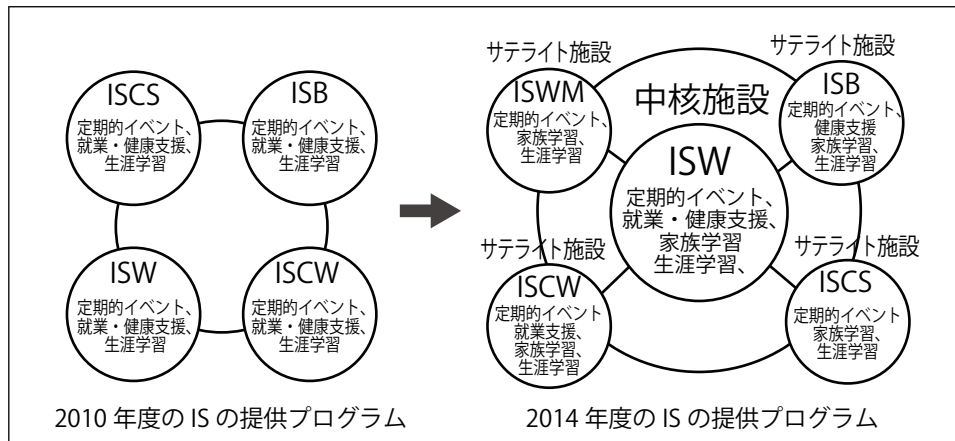


図 7-3 IS が形成する TH 区立図書館のネットワークの変化

以上、4章から6章から分析から、ISの再編計画の背景には中央政府から示した図書館政策だけでなく、ロンドン・プランやTH区のコミュニティプランなどの都市、地域の上位計画と連動しながら、図書館の配置と提供プログラムを再編し、さらにその新たな図書館サービスに対応できる建築空間を整備してきたプロセスを明らかにした。その関係を整理すると、図 7-4 のようになる。上位計画の内容は単に上から下へ降りることにとどまるだけでなく、ISの再編計画の内容と効果はさらに上位計画にもフィードバックされ、次の政策内容の展開にもつながっている点に、ISがもたらした成果の大きさを読み取ることができる。

また、ISの提供プログラムは地域計画の内容の変化に伴い、最初の生涯学習支援から就業、健康支援や子育て支援に拡大し、さらに個々のISにおいても各館の立地特性に応じて異なるプログラムを提供していることを明らかにした。

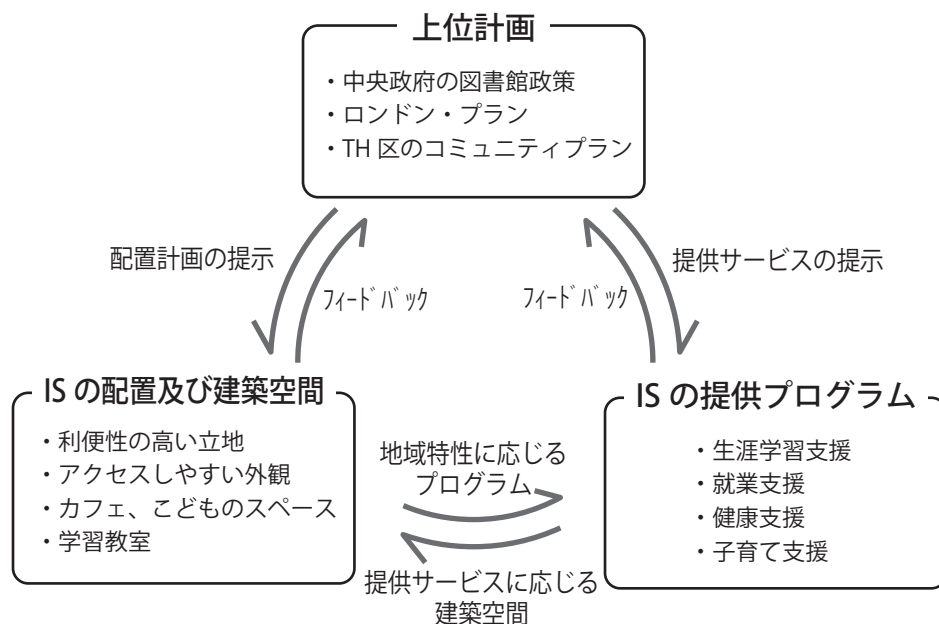


図 7-4 上位計画とISの配置および建築空間と提供プログラムの再編の相互関係

こうした、ロンドン TH 区立図書館 IS に関する研究成果は、これからの日本の公共図書館及び他の公共施設の再編において必要になってくる「量と質」の双方向的再編、つまり人口減少やコンパクトシティの形成における公共施設の集約と配置、また図書館サービスの多様化に対応する空間と機能の複合化の進展において、地域課題や市民ニーズに応えるこれからの新たな公共図書館のあり方の追求に対して多くの示唆を与えるものと考えられる。

7-3. 今後の公共図書館の再編への提言

イギリスの社会文化と図書館制度は日本と大きく異なり、IS が取り組んだ図書館の再編手法をそのまま日本に適用することはできない。しかし、都市や地域計画と連動しながら、既存の区立図書館の空間整備と配置を再編し、地域の課題とニーズに対応するサービスを図書館に内包するなど、ハードとソフトの両面から行った図書館の再編は、人口減少、少子高齢化による地域コミュニティの衰退や所得の格差の拡大といった生活の格差問題を抱える日本でも大変参考になる内容が多いと思う。

このような思いから、本研究で分析した IS の整備から、今後の日本の公共図書館の再編において参考できると考えられる要点を以下のようにあげる。

7-3-1. 図書館の立地

TH 区はこれまでアクセスしにくい場所に多く立地していた 13 館の既存区立図書館を最終的に 7 館に集約し、駅や商店街、屋外マーケットなど住民が利用しやすい、アクセスしやすい場所に図書館を再配置した。その結果、図書館来館者数は IS の開館前と比べ 240% 増加し、区民による図書館利用率は大幅に増加した。このように、住民の日常生活の結節点に公共図書館を配置させることは、図書館利用が住民の日常生活の一部となり、さらには図書館を取り組む地域の拠点づくりにもつながる。

7-3-2. 親しみのある建築デザイン

石の円柱、高い正門やセメント床を連想させるイギリスの伝統的な公共図書館とは異なり、IS は透明なガラス張りの外壁や鮮やかな色を用いた内装など、住民が日常的に利用している商業建築でよく見られる建築デザインを行っている。施設名である「Idea Store」も視認性の高い色を用いたロゴで、店舗看板のように外壁に張り出されている。公共図書館の建築デザインは奇抜な外観デザインや高い意匠性を挑む内部空間よりも、市民がいつも使い慣れている空間を取り組み、親しみのある建築デザインを行うことで物理的にも心理的にもアクセスしやすい施設づくりを行うべきである。

7-3-3. 図書館の複合化

ISでは、本の貸し出しだけではなく、就業問題や健康問題などの地域の課題に対して、就業や健康支援につながる学習プログラムとイベントを提供している。また、館内に地元の高齢者の憩いの場となるカフェや区の相談窓口を設置するなど、公共図書館の以外の機能を備えた空間とサービスを整備することでこれまで図書館とは無縁だった住民たちの関心を惹きつけ、図書の貸出数よりも多い来館者数を迎えることができた。近年、日本においても公共図書館を含む複合施設の計画は各地で確認できるが、そこには、日本自治体の公共予算の縮減と人口減少による都市機能と建築の集約が背景としてあると考えられる。しかし、ここで評価したいのは、単なる複数の用途と空間を複合するのではなく、ISが行ったように、地域のニーズと課題を丁寧に読み取った上で、その立地や地域特性に合わせて多様な機能と空間を盛り込んだ結果としての図書館の複合化である。

その他、日本の複合建築は建築基準法の異種用途区画が要求され、用途ごとに防火壁や防火シャッターなどによる防火区画が要求される。それにより、ほとんどの複合建築はただ物理的に複数の施設が隣接しているだけであり、相互的な空間のつながりはほとんど見られない場合が多い。しかし、図書館の複合化は「ついで利用」の促進だけではなく、他の機能とプログラムの空間的に融合することにより、図書館単独では実現できない多彩なプログラムと空間を提供し、市民の交流と地域の文化的な創造を促すべきである(図7-5)。2020年4月から施行された建築基準法の改正では、飲食店や物販など一部特定用途に対して異種用途区画の緩和内容が追加された¹⁾。つまり、複合施設の一体的な整備は建築的な空間づくりでは法律が整えつつあるが、複合施設の一体的な運営やプログラムの融合はまだこれから検討すべき課題である。

1) 建築基準法施行令第112条18項

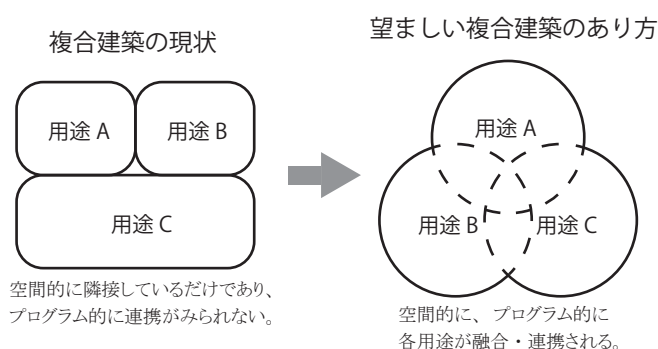


図7-5 複合建築の現状と望ましいあり方

7-3-4. 地域特性に合わせた空間およびプログラムの再編

公共図書館に限らず、これまでの日本の公共建築は機能主義という近代建築の思想に基づいて、学校、病院、劇場、博物館などのビルディングタイプに特化した建築計画が検討され、その標準的な計画に基づいて公共施設を整備し、市民に対して一律かつ効率の良い公共サービスを提供することを重視してきた。しかし、人口減少や少子高齢化による社会構造が大きく変化する中、各自治体が抱える地域課題も様々であり、これまで空間的、プログラムのにも機能性を重視する標準装備を行ってきた公共施設は現状の地域課題と市民ニーズに応えきれなくなっている。TH区は住民アンケートやヒアリング調査を経て、地域が抱えている課題を分析し、図書館の立地、空間および提供プログラムを総合的に再編した。また、同じ区内においても、5つのISは新築施設から改修施設まであり、それぞれ異なる地域特性を有する場所に立地していることから、各ISにおいて異なる空間と提供プログラムが整備されている。このように、これからの図書館再編においては、全て一律な強制基準から要求するのではなく、各図書館が位置する地域特性に合わせた空間整備を行い、プログラムを展開することが重要である。

2章で紹介したように、日本においても、地域社会における公共図書館の新しい役割を見出す動きが各地で確認できる。しかし、その中の多くはまだ住民の来館数や貸出数の向上を目的としている。今後は地域の課題とニーズに応えられる図書館サービスの提供を目指すべきである。また、日本の図書館再編には提供プログラムだけ、または立地だけを再編する事例が多いため、今後は空間とプログラムの両方の再編を考慮した上で住民に望ましい図書館像を掘り探る必要がある。

そのためにも、行政から公共図書館までを取り巻く社会的変化を明確に把握し、新しい社会問題と要望に応えられる図書館ビジョンを示す必要がある。同時に、公共図書館からも都市・地域計画と連動しながら、図書館というサービスとその空間が地域の中でどのような役割を果たして行くかを考えるべきである。

参考文献

【参考図書】

- ・長本千代治：近世貸本屋の研究，東京堂出版，1982
- ・小黒浩司：図書・図書館史，JLA 図書館情報学テキストシリーズ 3，日本図書館協会，2013
- ・松本直司、他：建築計画学，理工図書，2013.3
- ・是枝英子、他：現代の公共図書館・半世紀の歩み，日本図書館協会，1995.8
- ・佐藤政孝：図書館発達史，みずうみ書房，1986.3
- ・薬師院はるみ：名古屋市の1区1館計画がたどった道：図書館先進地の誕生とその後，八千代出版，2012.10
- ・池谷のぞみ、他：図書館は市民と本・情報をむすぶ，勁草書房，2015.3
- ・齋藤純一：公共性，岩波書店，200.5
- ・小篠隆生、小松尚：「地区の家」と「屋根のある広場」，鹿島出版会，2018.12
- ・植松貞夫，SD 編集部：「本と人のための空間：図書館建築の新しい風」，鹿島出版会，1998.3
- ・松林正己：図書館はだれのものかー豊かなアメリカの図書館を訪ねて，風媒社，2007.2
- ・松林正己：続・図書館はだれのものかー図書館の未来を求めて，風媒社，2010.3.31
- ・菅谷明子：未来をつくる図書館ーニューヨークからの報告，岩谷新書，2003.9
- ・溝上智恵子：高齢者社会につなぐ図書館の役割ー高齢者の知的欲求と余暇を受け入れる試み，学文社，2012.9.28
- ・吉田右子：デンマークのにぎやかな公共図書館：平等・共有・セルフヘルプを実現する場所，新評論，2010.11
- ・吉田右子、他：読書を支えるスウェーデンの公共図書館：文化・情報へのアクセスを保障する空間，新評論，2012.9
- ・吉田右子、他：文化を育むノルウェーの図書館ー物語・ことば・ツイキが踊る空間，新評論，2013.5.10
- ・根本彰：理想の図書館とは何かー知の公共性をめぐって，ミネルヴァ書房，2012.1.10
- ・アリストア・ブラック、デーブ・マディマン著、根本彰、他1名訳：コミュニティのための図書館，pp.69，東京大学出版社，2004
- ・西川馨：改革を続ける英国の図書館ー最新事情・見学報告，リブリオ出版企画，pp.42，2003.3
- ・自治体国際化協会ロンドン事務所：英国の公立図書館，自治体国際化協会，1995.2
- ・綿拔豊昭：図書・図書館史，学文社，2014.4
- ・アントネッラ・アンニョリ：知の広場ー図書館と自由，みずうみ書房，2011.5
- ・前川恒雄，石井敦：図書館の発見（新版），日本放送出版協会，2006.1
- ・レイ・オルデンバーグ著、忠平美幸訳：サードプレイス：コミュニティの核になる「とびきり居心地よい場所」，みずうみ書房，2013.10

【論文】

- ・裏田武夫、小川剛：明治・大正期公共図書館研究序説，東京大学教育学部紀要，東京大学教育学部，pp.153-189，1965
- ・久保元広、小松尚：ボストン公共図書館の運営方針の改訂と建築的変更に関する研究，日本建築学会大会学術講演梗概集，建築計画，pp.87-88，2019.7
- ・須賀千絵：英国における公共図書館経営改革策：『モデル基準』と『全国基準』の比較を中心に，Library and Information Science，45号，pp.1-29，2001
- ・須賀千絵：英国の公共図書館・博物館法と中央政府の役割の変容，情報の科学と技術，第59巻，第12号，pp.579-584，2009.12
- ・関直規：ロンドンにおけるコミュニティ教育施設の戦略・発展と成果 - タワー・ハムレッツ区の「アイディア・ストア」の事例，日本公民館学会年報，第10号，pp.116-124，2013
- ・Jo Hartley: Tower Hamlet' Idea Store: Are They Working, 2005.9
- ・英国における相互扶助組織による公共図書館運営にみられるガバナンスの変容，専修人文論集，専修大学学会 (99)，pp.207-229，2016.11
- ・栗原嘉一郎、他：分館お利用圏域ー公共図書館の設置計画に関する研究・5，日本建築学会論文報告集 (194)，pp.45-52，1972.4

- ・中井孝幸：地方都市における図書館の利用圏域の二重構造—疎住地の地域施設の設置計画に関する研究・1, 日本建築学会計画系論文集, 第 482 号, pp.75-84, 1996.4
- ・丁園、今井正次、中井孝幸：複数図書館の選択利用の諸要件に関する研究—施設の選択利用を促す地方都市における図書館計画に関する研究 1, 日本建築学会計画系論文集, 第 557 号, 173-179, 2002.7
- ・中井孝幸、他：図書館利用者の館内行為と滞在場所から見た居場所の形成—滞在型利用からみた公共図書館の施設計画に関する研究 その 1, 日本建築学会大会
- ・大前裕樹、中井孝幸、今井正次：他者との関係に見る居場所形成の要因—滞在型利用からみた公共図書館の施設計画に関する研究 その 2
- ・中井孝幸、他：大学図書館における学習環境と利用者の図書館像—「場」としての大学図書館の施設計画に関する研究 その 1, 日本建築学会計画系論文集, 第 79 巻, 第 709 号, pp.2347-2356, 2014.11
- ・徳原直子：図書館パフォーマンス指標と図書館統計の国際標準化の動向 (特集：図書館パフォーマンス指標と経営評価の国際動向), 現代の図書館, vol.40, No.3, pp.129-143, 2002。
- ・糸賀雅児：図書館評価の現状と課題—パフォーマンス指標の活用に向けて, 現代の図書館, vol.40, No.3, pp.124-128, 2002
- ・Wiegand, Wayne A.(2003) : "To Reposition a Research Agenda: What American Studies Can Teach the LIS Community About the Library in the Life of the User," The Library Quarterly, 73(4) pp.369-382

【参考記事】

- ・末次健太郎, 伊万里をつくり、市民とともに育つ市民の図書館—伊万里市民図書館の取り組みについて, 発表 4, シンポジウム「人と人、人と資料が会う場としての図書館」, <特集> 第 55 回研究大会, 図書館界 66(2), pp.112-117, 2014
- ・小布施町立図書館「まちとしょテラソ」, 新建築, 84(12), 新建築社, pp.118-129, 2009.11
- ・特集—複合施設の潮流：図書館からのアプローチ, 図書館雑誌 110(4), pp.222-225, 2016
- ・《討論》図書館の連携サービスの可能性と課題 (特集・第 58 回研究大会シンポジウム), 図書館界 69(2), pp.106-117, 2017
- ・自治体国際化協会ロンドン事務所：英国の公立図書館, 自治体国際化協会, 1995.2
- ・須賀千絵：イメージチェンジをはかる英国の公共図書館, 文部科学省, http://www.mext.go.jp/a_menu/shougai/tosho/houkoku/06040715/023.htm を参照, [2013.9.7 18:19 確認]
- ・須賀千絵：英国の PFI 図書館—パフォーマンス市立図書館を訪ねて, みんなの図書館, 335, pp.54-63, 2005.3
- ・諸外国の公共図書館に関する調査報告集—UK の公共図書館, 株式会社シティー・ディー・アイ, pp.99-130, 2005.3, 文部科学省の HP を参照 [2014.6.24 確認]
- ・荒井広明：新構想図書館「アイデアストア」(ロンドン・タワー・ハムレッツ区) の 10 年, <http://ameblo.jp/booksharing/day-20130715.html> を参照 [2013.10.18 9:11 確認]
- ・須賀千絵：英国公共図書館訪問記 3(タワー・ハムレット), みんなの図書館 (312), pp.51-62, 2003
- ・図書館総合展「"武雄市図書館"を検証する」全文, ハフィントン・ポストのインターネット新聞, http://www.huffingtonpost.jp/2013/10/31/takeo1_n_4186089.html
- ・中西典子：ロンドン・インナーエリアにおけるコミュニティ・ガバナンスの実相—タワー・ハムレッツ区の地域戦略パートナーシップを事例として, 地域創成研究年報 (4), pp.182-230, 2009
- ・Heather Wills, An innovative approach to reaching the non-learning public: the new Idea Stores in London, The New Review of Libraries and Lifelong Learning, 2003, pp.107-120

【政策】

- ・ 中小都市における公共図書館の運営—中小公共図書館運営基準委員会報告」日本図書館協会，1963
- ・ 市民の図書館，日本図書館協会，1970
- ・ 名古屋市教育委員会：なごやアクティブ・ライブラリー構想，2017.12
- ・ 図書館の設置及び運営上の望ましい基準（平成 24 年 12 月 19 日 文部科学省告示第 172 号）の第一の二：設置の基準
- ・ Tower Hamlets Council: A library and Lifelong Learning Development Strategy for Tower Hamlets, 1999.4
- ・ Tower Hamlets Council: Idea Store Strategy 2009, 2009
- ・ Department of National Heritage: Reading the Future, 1997.2
- ・ Department for Culture, Media and Sport: Framework for the future, 2003.2, http://www.healthlinklibraries.co.uk/pdf/Framework_for_the_Futures.pdf [2014.4.28 11:05 確認]
- ・ Department for Culture, Media and Sport: The modernisation review of public libraries: a policy statement, 2010.3, <https://www.gov.uk/government/publications/the-modernisation-review-of-public-libraries-a-policy-statement> を参照 [2014.4.23 19:14 確認]
- ・ 英国図書館情報委員会 著，永田治樹と他 3 名 訳：新しい図書館 - 市民のネットワーク，日本図書館協会，2001.7
- ・ Department of Culture, Media and Sport: Comprehensive, Efficient and Modern Public Libraries – Standards and Assessment, 2001
- ・ Museums, Libraries and Archives: Public Libraries, Archives and New Development-A standard Charge Approach, 2010
- ・ Department of Health: Choosing Health-Making Health Choices Easier, 2011.04, <http://www.smokefreeengland.co.uk/files/choosing-health.pdf> [2014.9.21 18:44 確認]
- ・ Tower Hamlets Council: Medicine for the Soul-Idea Store Health Strategy, 2013
- ・ Greater London Authority: The London Plan, 2004.2
- ・ Tower Hamlets Council: Tower Hamlets Infrastructure Delivery Plan, 2009.09
- ・ Tower Hamlets Partnership: The Community Plan 2007-2008 (The Community Plan to 2010), 2007, [http://modgov.towerhamlets.gov.uk/Published/C00000320/M00002004/AI00010067/\\$CommunityPlanAppx1060607.docA.ps.pdf](http://modgov.towerhamlets.gov.uk/Published/C00000320/M00002004/AI00010067/$CommunityPlanAppx1060607.docA.ps.pdf) [2014.6.25 15:15 確認]
- ・ Tower Hamlets Partnership: Tower Hamlets Community Plan to 2010, 2002-2003 draft, 2002.6
- ・ Tower Hamlets Partnership: Tower Hamlets Community Plan 2020 vision, 2008
- ・ Tower Hamlets Council: Core Strategy 2025-Development Plan Document, 2010.09
- ・ Tower Hamlets Council: Managing Development Document-Development Plan Document, 2013.04
- ・ Tower Hamlets Council: London Borough Tower Hamlets Town Centre Spatial Strategy to 2025, 2009.7

【参考 Web サイト】

- ・ Idea Store HP：<http://www.ideastore.co.uk/>
- ・ タワー・ハムレッツ区の HP：<http://www.towerhamlets.gov.uk/>
- ・ Idea Store の公式的に各種のパンフレットを展示するオンライン文書共有サイト：<http://issuu.com/ideastores>
- ・ UK 政府 HP：<https://www.gov.uk/>
- ・ CIPFA (英国勅許公共財務会計協会)HP：<http://www.cipfa.org/>
- ・ イギリス国家統計局 (Office for National Statistics) HP: <http://ons.gov.uk/>
- ・ 文部科学省 HP：<http://www.mext.go.jp/>
- ・ 日本図書館協会 HP：<http://www.jla.or.jp/>
- ・ 日本工業標準調査会 HP：<http://www.jisc.go.jp/>

図表リスト

【図】

| | | |
|--------|---|-----|
| 図 1-1 | 研究の構成 | p3 |
| 図 2-1 | イングランドの地方政府と公共図書館の設置自治体 | p30 |
| 図 2-2 | 図書館評価指標の四領域の相互関係 | p36 |
| 図 2-3 | 公共と図書館の利用圏域図 | p37 |
| 図 3-1 | ロンドン特別区の中の TH 区 | p45 |
| 図 3-2 | 各ロンドン特別区の総計人口 (2011) | p45 |
| 図 3-3 | 各ロンドン特別区の人口増加 (2001-2011) | p45 |
| 図 3-4 | 各ロンドン特別区 1-19 歳の人口割 (2011) | p46 |
| 図 3-5 | 各ロンドン特別区 20-64 歳の人口割 (2011) | p46 |
| 図 3-6 | 各ロンドン特別区 65 歳以上の人口割 (2011) | p46 |
| 図 3-7 | 各ロンドン特別区の民族人口割 (2011) | p47 |
| 図 3-8 | 各ロンドン特別区平均就業率 (2011) | p47 |
| 図 3-9 | 各ロンドン特別区の世代ごとの平均収入 (中央値)(2011) | p48 |
| 図 3-10 | TH 区の人口構成 (2011) | p48 |
| 図 3-11 | TH 区各民族ごとに見た平均就業率 (2011) | p48 |
| 図 3-12 | IS 戦略 1999 | p51 |
| 図 3-13 | IS 戦略 2009 | p51 |
| 図 3-14 | TH 区の区立図書館の配置 | p53 |
| 図 3-15 | IS 設立前後の TH 区立図書館の年間訪問者数 | p57 |
| 図 3-16 | IS 設立前後の TH 区立図書館の年間貸出数 | p57 |
| 図 4-1 | IS の整備と関連政策及び事業の相互関係 (1997~) | p60 |
| 図 4-2 | 2004-2008 年のロンドン区域とロンドン特別区 | p65 |
| 図 4-3 | TH 区の Town Centre と Opportunity Area と IS の配置 | p66 |
| 図 4-4 | 2002-2014 年の TH 区の Ward と LAP | p68 |
| 図 4-5 | 2014- 現在の TH 区の Ward と LAP | p68 |
| 図 4-6 | TH 区のコミュニティ・プランの変遷 | p69 |
| 図 4-7 | IS 戦略が示した IS の提供サービスの変化 | p69 |
| 図 4-8 | IS の整備と関連政策のスパイラル・アップの構築プロセス | p71 |
| 図 5-1 | 各ロンドン特別区就業率 (2011) | p73 |
| 図 5-2 | TH 区内の選挙区 (Ward) 毎の特性と TH 区立図書館の配置 | p74 |
| 図 5-3 | PTALs に基づく TH 区の公共交通アクセスビリティ (2012) | p75 |
| 図 5-4 | TH 区立図書館配置と各種将来計画 | p75 |
| 図 5-5 | BSF として整備された TH 区の中高等学校 | p76 |
| 図 5-6 | PCP として整備された TH 区の小学校 | p76 |
| 図 5-7 | TH 区の既存 Town Centre と計画中の Town Centre | p77 |
| 図 5-8 | ISB の配置図 | p80 |
| 図 5-9 | ISB の平面図 | p81 |
| 図 5-10 | ISCS の配置図 | p83 |
| 図 5-11 | ISCS の平面図 | p84 |
| 図 5-12 | ISW の配置図 | p86 |
| 図 5-13 | ISW の平面図 | p87 |
| 図 5-14 | ISCW の配置図 | p90 |
| 図 5-15 | ISCW の平面図 | p91 |

| | | |
|--------|-------------------------------------|------|
| 図 5-16 | ISWM の配置図 | p93 |
| 図 5-17 | ISWM の平面図 | p94 |
| 図 5-18 | 各 IS の学習教室の平面配置 | p97 |
| 図 5-19 | 学習教室の設備と仕様 | p98 |
| 図 5-20 | 子どもの図書スペースの平面配置図 | p100 |
| 図 5-21 | 子どもの図書スペースの設備と仕様 | p101 |
| 図 5-22 | One Stop Shop の平面配置 | p103 |
| 図 5-23 | One Stop Shop の設備と仕様 | p103 |
| 図 5-24 | カフェの平面配置 | p105 |
| 図 5-25 | カフェの設備と仕様 | p105 |
| 図 5-26 | IS の空間構成概念図 | p106 |
| 図 6-1 | TH 区立図書館への訪問者数・図書貸出数・学習コースの登録者数の推移 | p109 |
| 図 6-2 | 子ども向けの定期イベント | p110 |
| 図 6-3 | IS の建築空間と提供プログラムの関係 | p114 |
| 図 6-4 | IS が形成する TH 区立図書館のネットワークの変化 | p117 |
| 図 7-1 | 上位計画と IS の再編の関係 | p114 |
| 図 7-2 | IS の空間構成 | p114 |
| 図 7-3 | IS が形成する TH 区立図書館のネットワークの変化 | p122 |
| 図 7-4 | 上位計画と IS の配置および建築空間と提供プログラムの再編の相互関係 | p122 |
| 図 7-5 | 複合建築の現状と望ましいあり方 | p124 |

【表】

| | | |
|--------|-------------------------------|-----|
| 表 2-1 | 1970 年代の公共図書館論と現在の公共図書館論 | p9 |
| 表 2-2 | TH 区と名古屋市の公共図書館整備状況 (2012 年度) | p29 |
| 表 2-3 | 日本とイギリスの図書館設置数 (2012 年度) | p31 |
| 表 2-4 | 日本とイギリスの公共図書館の利用実態 | p32 |
| 表 2-5 | 日本公共図書館の延床面積の基準 | p33 |
| 表 2-6 | 日本公共図書館の蔵書冊数の基準 | p33 |
| 表 2-7 | 日本公共図書館の開架冊数の基準 | p33 |
| 表 2-8 | 日本公共図書館の資料費の基準 | p33 |
| 表 2-9 | 日本公共図書館の年間増加冊数の基準 | p33 |
| 表 2-10 | 日本公共図書館の職員数の基準 | p33 |
| 表 2-11 | 「全国基準」が示した公共図書館の利用距離圏 | p34 |
| 表 2-12 | インナーロンドン特別区とアウターロンドン特別区 | p34 |
| 表 2-13 | 図書館サービスに関する利用者の満足度基準 | p35 |
| 表 2-14 | 各パフォーマンス指標 (ISO11620) の目的別分類 | p36 |
| 表 2-15 | 図書館建築に関する既往研究 | p43 |
| 表 3-1 | 住民意向調査からわかる TH 区立図書館に必要な再編項目 | p50 |
| 表 3-2 | TH 区の IS との既存図書館の概要 | p52 |
| 表 3-3 | 旧成人学習センターの建築概要 | p54 |
| 表 3-4 | 2013-2014 年度の IS の学習コース | p54 |
| 表 3-5 | IS の建設の資金提供者 | p56 |
| 表 4-1 | IS の整備に係る政策及び事業の分類 | p59 |

| | | |
|-------|----------------------------|------|
| 表 4-2 | ロンドンプランが示すデンシティマトリックス | p64 |
| 表 4-3 | 2001-2016 年のロンドン区域の発展 | p65 |
| 表 4-4 | TH 区の IS との既存図書館 | p52 |
| 表 5-1 | IS および TH 区立図書館の建築概要 | p78 |
| 表 5-2 | 各 IS における特徴的なスペースの概要 | p95 |
| 表 5-3 | 各 IS の学習教室の整備 | p96 |
| 表 5-4 | 各 IS の子どもの図書スペースの整備 | p99 |
| 表 5-5 | 各 IS の One Stop Shop の整備 | p102 |
| 表 5-6 | 各 IS のカフェの整備 | p104 |
| 表 6-1 | IS の定期的イベント | p110 |
| 表 6-2 | 年度ごとで見た各 IS の学習コースの提供 | p111 |
| 表 6-3 | 各 IS ごとで見た学習コースの提供 | p113 |
| 表 6-4 | 各 IS の立地場所および地域特性と学習コースの関係 | p114 |